

くちびるの潰れた友達

被爆体験証言者 浅野 温生

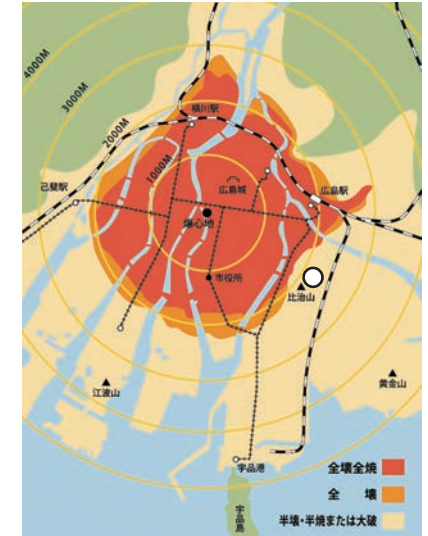
70回生 奥野 天葵

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月8日、比治山にある半地下式の防空壕の中で、建物疎開作業中に被爆し、大火傷を負った中学生の火傷で潰れた口に、救助のおばさんが缶詰のミカンを流し込んでいた。おばさんは泣きながら「カタキをとってあげるけんね」と励ましていた。



生徒のコメント

潰れた口や防空壕の中など、自分の目で見たとことのないものを表現するのは難しく、何度も証言者の方に聞いて描き直しました。自分で描いた絵を見て、もし自分の知っている人がこんな惨状だったらと思うと、証言一つひとつの重みを感じた。そんな言葉が無くなってしまった時、「戦争はいけない」という言葉は、どうしたら深く受け止めてもらえるだろうか、そう感じた。

被爆体験証言者のコメント

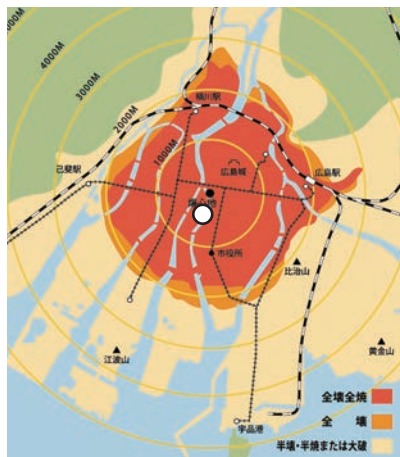
72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵の様な体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ボンボンと煮えている音など説明しても、画像化するのは制作する諸君にとっても難しかったと思う。

川で亡くなった人々を収容する兵士

被爆体験証言者 浅野 温生

70回生 加藤 詩温

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆ドームそばの元安川には、猛火から逃げようとした人や、被爆して水を求めた人たちなど、たくさんの被爆者の死体が流れていた。被爆から6日後、兵士たちは小さな舟で死体を収容した。(爆心地から200メートルの場所)

生徒のコメント

火傷をし、水の中で亡くなっている人々を写した写真というものが無く、浅野さんの話を聞いてイメージするという、今までやったことのない制作にとっても戸惑いました。特にそう思ったのが、まだ収容されていない死体です。ほとんどの資料が、陸で亡くなった焼死体であったため、川の中で亡くなった人々の様子を描くのに苦労しました。ですが、浅野さんに質問したり、助言をもらうことで、ここまで完成させることができました。制作の過程で苦しくなることも多々ありましたが、一生に二度とない機会をくださったことをありがたく思います。

被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵のような体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのには制作する諸君にとっても難しかったと思う。

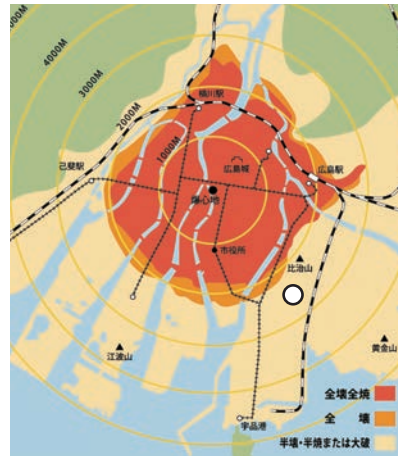


家族を火葬する人たち

被爆体験証言者 浅野 温生

70回生 亀高 菜那

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

皆実町の被服支廠近くの蓮田のほとり、やっと見つけたわが子の死体を、道路わきで火葬にする遺族。原爆直後、お坊さんも寺も火葬場もなかった。(爆心地から2.5キロメートルの場所)

生徒のコメント

この絵は、原爆によって亡くなった家族を遺族が火葬している場面なのですが、私は実際に家族を火葬するという経験をしたことがないので、家族を焼く人の悲しみや、原爆で家族を失ったことへの悔しさ、また、そういう状況に置かれた人はどのような表情をするのかといったことを想像するのに苦労しました。

悩んだこと、苦しんだことはたくさんありましたが、今は広島で生きる人間として「原爆の絵」の制作に関わることができて良かったと思っています。

被爆体験証言者のコメント

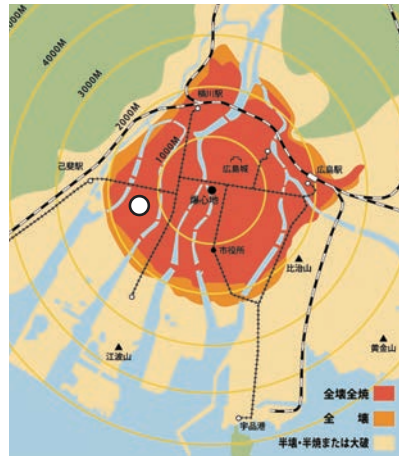
72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵の様な体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのには制作する諸君にとっても難しかったと思う。

「遺体収容所」になった二中のグラウンドに 並んでいた簀巻き状態の遺体

被爆体験証言者 浅野 温生

69回生 川崎 友貴

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月8日、広島県立第二中学校を訪ねた時、校舎は倒壊、全焼、跡形もなく、裏門には「遺体収容所」の張り紙があり、校舎は全焼、グラウンドには20体前後の死体が簀巻きで並んでいた。

近所の人々が、自宅まで逃げ帰って死亡したり、焼け跡、救護所などで見つけた身内の遺体を、火葬場もないので、取りあえずグラウンドまで運んできたらしい。(爆心地から1.6キロメートルの場所)

生徒のコメント

言葉で伝えられたものを想像し、自分の中で画像化するのが難しかったです。自分たちでこの絵の状態を再現して用意した資料も実際とは違ったりして、とてももどかしさを感じました。

普段何気なく住んでいるこのヒロシマで、72年前にこんなに悲惨なことが起こったんだということを改めて感じ、実際にそんな悲劇を経験しても生き抜いてきた戦争経験者の方々はとても強いと思いました。

被爆体験証言者のコメント

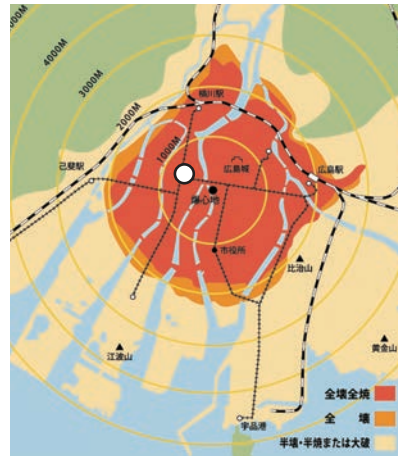
72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵のような体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのは制作する諸君にとっても難しかったと思う。

焼けた電車内、 逃げる間もなく死んでいった二人の亡骸

被爆体験証言者 浅野 温生

70回生 桐林 勲

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

十日市町あたりで爆風により脱線し、道路脇で焼けて鉄骨だけになった電車内。座席があった付近に乗客が2人、骨になった状態で並んでいた。(爆心地から500～600メートルの場所)

生徒のコメント

浅野さんの様々な被爆体験談を聞き、その場面を絵として後世へ遺すこの取り組みを通して、戦争の悲惨さや人間として持つべき大切な思いを再認識しました。

参考になる資料が少なく、焼けた電車の内装は特に描くのが難しかったです。浅野さんから多くの助言をいただき、ここまで完成させることができました。ありのままを絵にすることができたか少し不安ですが、これからはこの絵を、様々な場所で活用していただきたいです。

被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵の様な体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのには制作する諸君にとっても難しかったと思う。

焼け跡からやっと見つけた孫娘を連れ帰るお婆さん —その女の子の膝から下は骨になっていた—

被爆体験証言者 浅野 温生

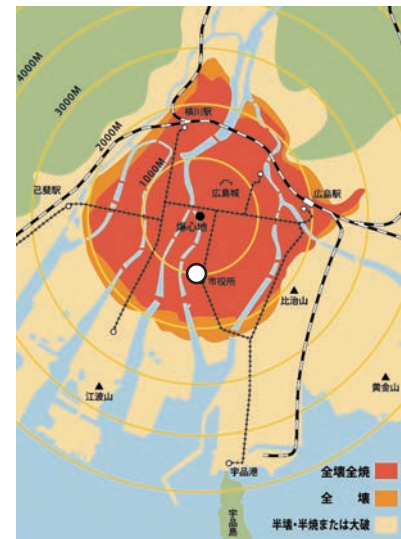
69回生 野村 かなめ

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月7日午後、市役所に行く途中、焼死体がごろごろと転がり、余燼くすぶる中ですれ違った70歳余りのおばあさんが小さな女の子をおんぶしていた。その女の子の膝から下は骨になっていて、焼け跡でやっと見つけた孫娘を連れ帰る途中だったかと推測された。(爆心地から1キロメートル余りの場所)



生徒のコメント

原爆の絵を制作して、人が見たことを絵で表現することはとても難しいことだと実感しました。今の高校生は、原爆が落とされた時のことをよく知らないし、本でよく見る様な、悲惨な状況を実際に自分の目で見ていないので、想像するのは難しいと思います。でも、実際にそれを経験した証言者さんだからこそ伝えられる言葉の表現で、当時の状況を以前より想像することができました。この絵を証言者さんの体験に近づけさせるのは時間がかかりましたが、とても良い経験になりました。

この原爆の絵を通して、少しでも多くの方々に原爆のことやこのような活動のことなどを知ってもらい、平和について考えてくれたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

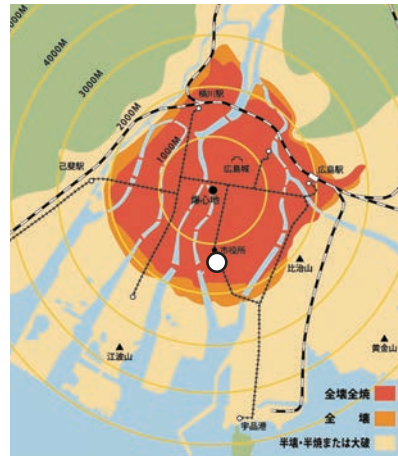
72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵の様な体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのは制作する諸君にとっても難しかったと思う。

日赤病院前の無傷の死体

被爆体験証言者 浅野 温生

70回生 前田 葉月

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月8日午後、やっと逃げてきた日赤病院前の前庭には蘇鉄を囲むように被爆者の死体が転がっていた。たくさんある死体の中に、当時の浅野さんと同じ年くらいの県立商業の生徒が横たわっていた。

火傷も傷もないきれいな姿だったが、兵士がスコップで転がすと、ツーツと赤い血がその口から流れた。その時初めて、その学生が死んでいたことが分かってショックだった。(爆心地から1.2キロメートルの場所)

生徒のコメント

当時の写真や資料が少なく、浅野さんが見られた光景をキャンパスの上で再現することに苦労しました。浅野さんが思い描く景色と、私が浅野さんの言葉からイメージした景色が違っていたこともあり、見たことを言葉で伝えることや、それを理解することの難しさを知りました。

8月6日にヒロシマで起こった事について、原爆の絵を制作する前より深く知ることができたので、これを後世に伝えていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵のような体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのには制作する諸君にとっても難しかったと思う。

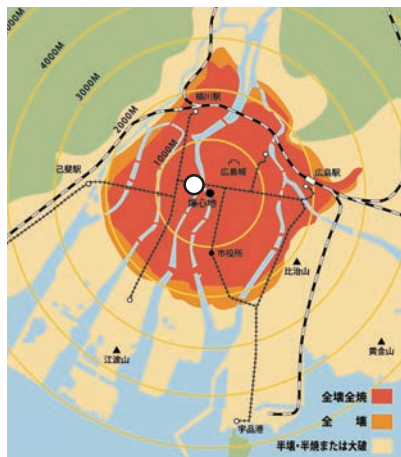


防火用水の中で立ったまま焼かれた被爆者たち

被爆体験証言者 浅野 温生

70回生 三坂 日奈子

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から近い本川町、相生橋西の電車道の防火用水の中で立ったまま焼け死んだ人たち。

水に浸かった膝から下だけは生身だった。

(爆心地から400～500メートルの場所)

生徒のコメント

体験したことも、見たこともない風景を、想像して描くのは難しかったです。何度も描き直していく中で、具体的に、どのように描いていけば良いのかわからず苦労しました。特に、火傷の状態の描き分けが大変でした。しかし、浅野さんが親身になって答えてくださったので、とても励みになりました。この絵を通して、たくさんの人に原爆の恐ろしさや、浅野さんの思いが伝われば良いと思います。

被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵のような体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのには制作する諸君にとっても難しかったと思う。



暗闇の中の真赤な太陽

ヒロシマピース ボランティア 荒井 覺

73回生 岡田 友梨

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時、大河国民学校の5年生だった荒井さんは、8月6日の朝、比治山橋東詰で祖母と建物疎開で家屋の廃材を拾い集めていた。その時、上空から聞き慣れたB29の爆音が聞こえ、強烈な閃光が走るとともに地響きを感じ、記憶が途切れた。原爆炸裂の爆風で飛ばされて気絶し、意識が回復した時に最初に目に入ったのが暗黒の中の真赤な丸い物体、それが太陽であった。子供心に地獄に来たと思い、すすやちりで真っ黒になった瓦礫の街の中で、大勢の人が逃げ惑う人の声と足音が聞こえたのでその方に恐る恐る這って行くと、そこにはさっきまで使っていた大八車があった。



生徒のコメント

最初に荒井さんと打ち合わせをした時は、私に原爆についての知識がほとんどなく、「大八車」や「ゲートル」といった言葉も、原爆の絵の制作をする上で初めて知りました。広島で育った一人として、少しは原爆について知っていると思っていましたが、実際には何も知ってはいなかったのだと感じさせられました。

晴れた明るい朝が一瞬にして暗闇に変わってしまったという事実が信じられず、自分の知らないことを絵にすることはとても難しかったです。瓦礫や逃げ惑う人々の様子なども、どう描けばよいのか戸惑いましたが、写真資料や荒井さんの証言を元に、私なりに解釈して描きました。

原爆の絵の制作を通して、本当に原爆は恐ろしいものだと感じています。今回の制作で学んだことを、戦争を経験していない方々に伝え、平和の尊さを多くの人に感じていただきたいです。

被爆体験証言者のコメント

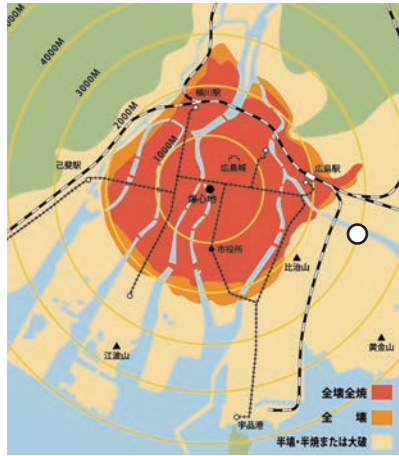
戦争も原爆も知らない自分の孫の様な学生さんに、どんな風に描いて頂くかの説明が大変でした。例えば真っ暗で暗闇の中に赤い太陽と云っても想像が付かないので深い濃霧で霧が黒い濃霧のようだと想像をしていただきました。火傷もその時には痛くも無く自分ながら気が付いていなかったし、傷を見ていなかったもので、どんな様に描いて頂くか迷いました。

消えていった幼い姉妹…生きていてほしい

被爆体験証言者 新井 俊一郎

64回生 中須賀 愛美

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

黒々とそびえ立つ比治山の向こうから、被爆者たちが東大橋を渡って逃げてくる場面。手前の幼い少女2人はしっかりと手を握り合って逃げてきた。奥には被爆者たちを気遣う様子もなく、部外者を通すまいと立ちはだかる憲兵、さらに市へ入ろうとする記者らしき男性と乱闘する憲兵らがいる。

生徒のコメント

新井さんからは「2人の幼い少女が東大橋を渡って逃げてきている場面」を描くよう依頼されていましたが、より詳しくお話を伺っていくうちに、「憲兵らの話も入れたい」と思うようになり、このように複雑な構成になりました。新井さんが最も印象に残っているという2人の少女の顔はパンパンに膨れ上がっていたということで、それをどのように描くかということで一番悩みました。また、自分の想像に過ぎないとしても、こちらへ向かってくる「幽鬼のような」被爆者たちを描く度にやりきれなくなり辛かったです。新井さんは実際にこの恐ろしい光景を目の当たりにされました。しかしそれを辛さのあまり隠してしまうことなく、私たちに語ってくださいました。その決意に深く感謝します。また、改めて原爆がどれほど恐ろしく悲しいものであるかということを感じさせられました。

被爆体験証言者のコメント

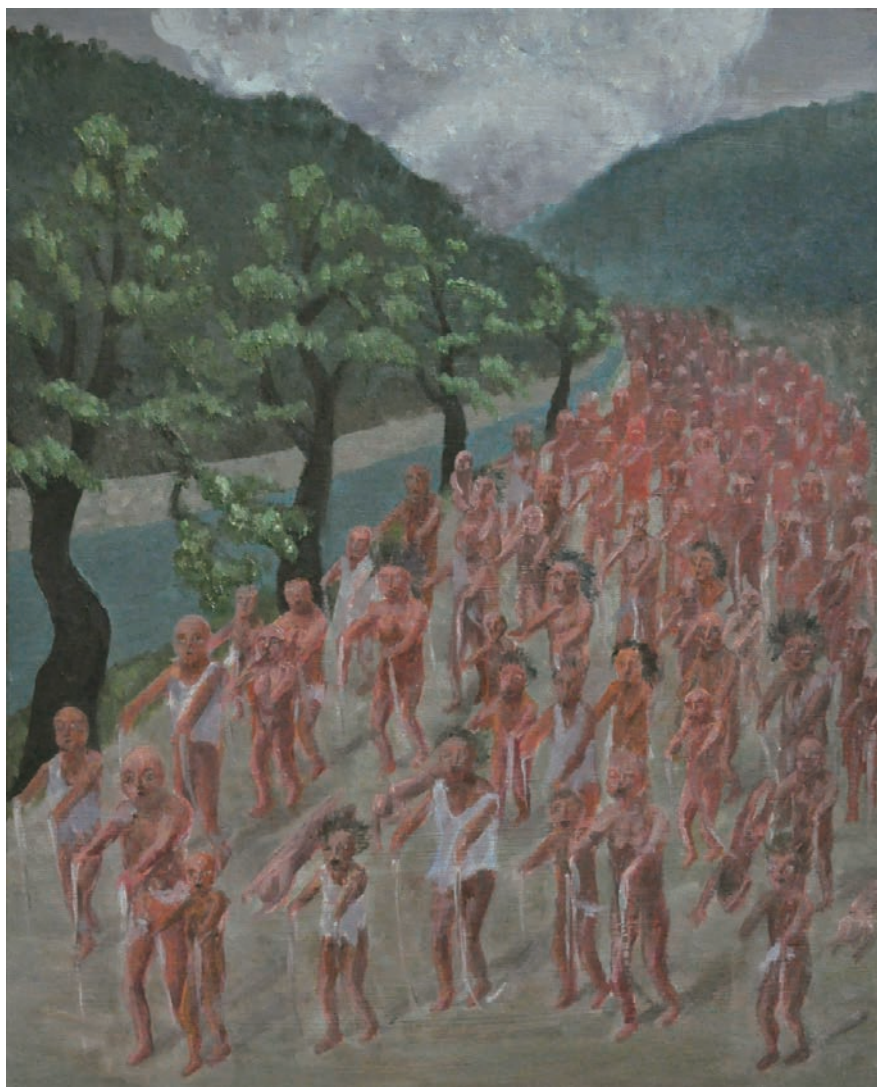
彼方の広島は炎々と燃え上がり、壊滅していることは明らかでした。市内に続く狭い「東大橋」の上は、逃れ来る瀕死の被爆者の群で埋め尽くされ、仁王立ちの憲兵が「誰一人として広島には入れぬぞ」と立ちはだかっていました。写真機を肩にした新聞記者らしい人は、乗ってきた自転車もろとも橋下の川に放り込まれ、中学生の私たちも彼らに遮られました。と、その時、焼けたただれ、皮膚を引きずりながら逃れ来る群衆の足元から幼い姉妹が現れ、スローモーションのように私の横を通り過ぎて行っただけです。風船そのままに顔が腫れ上がり、互いの手を握り合ったまま「しっかりねっ」という姉の声を残して被爆者の中に消えたのです。なんとか助かっていて欲しい、と、願いつける思いの込められた絵が、私に代わって祈り、訴えてくれることでしょう。

山陽道・松並木の下で出会った幽鬼の群… これが人間なのか!

被爆体験証言者 新井 俊一郎

64回生 西家 奈津

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、農村動員に出動していた賀茂郡原村(現在の東広島市八本松町原村)から連絡文書を届けるため広島へ向かう途中、旧山陽道、安芸中野の松並木で数えきれないほど多くの被爆者と出会ったところ。



生徒のコメント

何度も構図を練り直しました。自分たちが思っている以上に悲惨な状況を想像することには限界があり、またそれを絵にすることの難しさを痛感しました。

今までは被爆体験などを聞くだけでしたが、今回「原爆の絵」を制作させていただいたことで、「伝える」ことの大切さを感じました。戦争と原爆の現実を、もっと後世に伝えていかなければならないと思いました。

被爆体験証言者のコメント

八本松駅で原爆の閃光を浴び、たどり着いた瀬野駅から、燃え上がる猛炎の下にある広島へと歩き始めた私たちは、中野駅を過ぎて旧山陽道の松並木に差しかけたとき、流れ来る異様な人間の波に出会うのです。幽霊の姿そのままに、誰もが両手を体の前に差し伸べ、指先から包帯かボロ布のようなものを地面に引きずっているではありませんか。

声もなく、ゆっくり流れて来る何百、いえ何千もの幽鬼の群れでした。静かに動いて来た群の中から、次々に倒れ伏す人々。瀕死の大火傷を負いながらも、倒れた人を避けて歩みゆく人々。狭い旧山陽道は、あっという間に全身を焼かれ、赤裸と化した動かぬ人間の山が積み上げられていました。

想像を絶する被爆者の群れを忠実に描いてくれた現代っ子に、感嘆の賛辞を贈ります。

私たちは原爆炸裂の瞬間、 凄まじい閃光と避退するB 29を見た

被爆体験証言者 新井 俊一郎

74回生 山田 紬生

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

山陽本線「八本松駅」で下り列車を待っていた中学1年生たちは、突然、彼方の広島方面の空が猛烈な閃光で輝き、頭上を轟音とともに超低空で飛び去るB 29の機影を目にした。それは、1945年8月6日の朝8時15分だった。ただ1発の原子爆弾でヒロシマが消え去り、15万人近い市民が殺され、悪魔の放射線が人々を刺し貫いた「原子時代の幕開け」の瞬間を目撃したのだった。

(あの時期を表現するのに、多くの人が誤って電車と言う。当時の山陽本線は、未だ蒸気機関車が客車を牽引している時代だった、ということが理解されて居ない証拠だ)

生徒のコメント

被爆体験を聞くことで、新井さんの頭の中にある記憶を私がもう一度構成し、新井さんの思いにできるだけ近い作品にすることがとても難しかったです。中でも、光の表現や、頭上すれすれを飛び去ったB 29を描くのにとっても苦労しました。新井さんは当時の様子を熱心に語ってください、8月6日に現実起こったことの悲惨さを突き付けられました。これが過去の出来事というだけでなく、今でも現実起こりうることだと強く感じました。

被爆体験証言者のコメント

当時の私たちは13歳の中学1年生だった。学校は広島高等師範学校附属中学校。敗戦必至の状況のなか、広島市では空襲に備えて市内を横断する巨大な防火用空き地帯を建設すべく、市内の中学校、女学校1~2年に動員令を発動し、連日、建物の疎開作業に駆り立てていた。我が校の教官方は、炎天下の作業の危険性を逸早く察知し、1945年7月20日、英断をもって学校を挙げて食糧増産のため農村へ出動した。

農作業の成績優秀な生徒5人は、伝令として広島市内の母校本部へ報告書を伝達すべく帰省が許された。それに選ばれた私たちは8月6日、八本松駅で列車到着を待っていた。その駅の標高は地上500メートルであり、8時15分、広島上空600メートルで炸裂した原爆の閃光を、私は、ほぼ同じ標高から見た稀有な一人として、その瞬間を証言し残したいと思った。しかも同地点で、原爆を投下したB 29エノラゲイ号と思しき一機が、凄まじいプロペラ音と共に超低空で、150度の急旋回で避退する瞬間も目撃していたことを付言しておきたい。

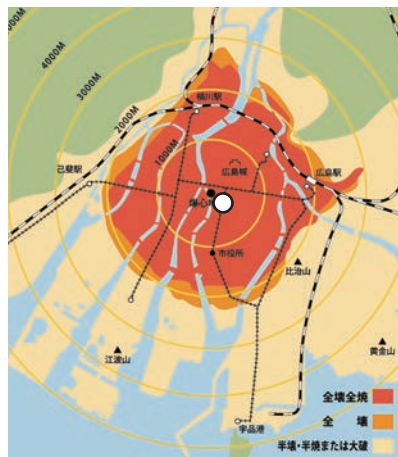
被爆時の閃光を描いた作品は少なく、然も地上高がほぼ同じ標高から見た閃光を描くのは、原爆の絵として恐らく初の作品であろう。それだけに、高校2年生の山田紬生さんの苦労と努力に対して、格別の敬意と感謝を捧げたい。

皆、どこに消えたの？

被爆体験証言者 飯田 國彦

74回生 サンガー 梨里

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日午後、本通から見た原爆ドームです。炎や煙がもうもうと立ち上がる中、焼かれて亡くなったたくさんの人々の遺体が見当たりません。しかし、地面の瓦礫をよく見ると、所々に人骨が混ざっているのが分かります。8月6日午前8時15分に投下された原子爆弾は、一瞬にして全ての木造建物を破壊して燃やし尽くし、電柱をなぎ倒して黒炭とし、数万の人々をバラバラの白骨と炭の塊にして、瓦礫の下に埋め尽くすほどの力があったのです。

生徒のコメント

私ははじめて原爆の絵の制作に取り組みました。そこでまず感じたのは、自分がどれほど8月6日について知らなかったのかということです。広島に住んでいるため平和学習はありましたが、今回の作品制作と証言者の方との話を通して、表面上のことだけしか分かっていなかったということに気が付きました。また、強い思いを持って証言活動を続けている飯田さんの姿を見て、私も動き出さなければと感じました。

自分ではない人のイメージを形にするのは思いの外難しく、同じところを何度も何度も描き直すことも多くありました。ですが、他の人と共に一つの作品を作り上げることは、これからの制作活動に活かせる貴重な体験となりました。

被爆体験証言者のコメント

8月6日の午後です。爆心地から500mの本通付近から原爆ドームへの鳥瞰です。毎秒300~440mの爆風と3000~4000℃の高温で、全ての建物は破壊されて燃え尽き、人間を含む全生物はバラバラの白骨と炭の塊になり、その上が瓦礫と炭で覆われました。その後遺骨の収集が始まり慰霊碑に埋葬されましたが、全ての遺骨が収集されるはずもなく、現在の広島市の中心部は、収集し残した遺骨の上に建設された街である、といっても過言ではありません。

原爆孤児の私は、毎晩のように被爆場面を夢に見てPTSDに悩まされ、被爆から60年間、平和公園へ近寄ることすら出来ませんでした。

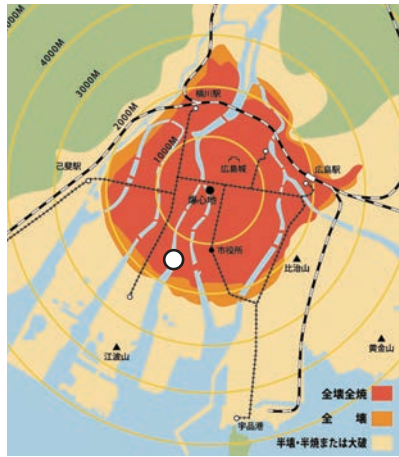
サンガー梨里さんに、「はだしのゲン」の中沢啓治さんが描けないと言われた、原爆の本当の悲惨な場面を描いていただきました。誠に無理な、酷なお願いをしてしまい、申し訳ありませんでした。核兵器禁止が中々進まないのは、原爆の本当の悲惨さを知る人が少ないからだだと思います。この絵が少しでも核兵器禁止へのお役に立てますようお願いして止みません。

おびただしい遺体 (8月7日早朝、住吉橋東詰)

被爆体験証言者 飯田 國彦

74回生 サンガー 梨里

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下の8月6日午後から夕方、服は燃え、皮膚が剥がれて垂れ下がった沢山の人が住吉橋東詰へ集まってきました。ここは以前から避難場所に指定されていて、集まっていた人々は避難用の船を待っていたと思われます。3歳の僕は、叔母の山本弘子(県女4年生、母の妹)に抱っこされてここへ辿り着きました。この絵はその翌日、8月7日早朝の光景です。折角ここまで辿り着いた夥しい数の人々が、並んで、顔が膨れて亡くなっていました。

生徒のコメント

今回の絵は、飯田さんだけでなく、この風景を見た飯田さんの叔母様の想いも背負って描きました。数え切れないほどの人を描くのにとっても苦労しましたが、飯田さんをはじめとして、先生方や、同じ教室で制作していた仲間、原爆資料館のスタッフの方にも助けてもらい、描き続けることができました。飯田さんと2年にわたり、2枚の原爆の絵の制作を経て、私の平和に対する向き合い方が変わり、自分にできることをより積極的に考えるようになりました。証言者の方々が日々活動している様子を間近で見て、私たちがまだ高校生であるということは平和活動の障害だとは思わなくなりました。私達が描いた原爆の絵を証言者の皆さんが証言活動に使ってくださることで、世の中に戦争の悲惨さを発信できているからです。この2年間に原爆の絵を制作して学んだことは一生忘れないと思います。

被爆体験証言者のコメント

ローマ法王は広島へお出でになり、「戦争は人間の仕業です」というメッセージを遺されました。(1981年ローマ法王ヨハネ・パウロ二世石碑・広島平和資料館) そのお言葉の意味するところは、「被爆者は業火(自身の罪の炎)に焼かれたのではなく、罪によって地獄へ落とされたのではない」ことを明言されたのです。ローマ法王は「ここ広島には、戦争のもたらした惨事と苦しみが多く存在している」というメッセージを遺されました。(教皇訪日公式記録・ヨハネ・パウロ二世 主婦の友社1981年)

仏教やキリスト教にも地獄があり、曼荼羅などにも地獄の描写がありますが、どの地獄にも原爆のように悲惨な光景はひとつも描かれておりません。この付近の爆風は160m/秒、温度は1000~2000℃、放射線量は7000msvと言われており、地獄との違いは歴然です。

更に現在の原爆は広島原爆の数十倍の威力を持っており、地球そのものを死の星にします。核兵器は廃絶しなければなりません。サンガー梨里さんには大変ご苦労をおかけしました。感謝申し上げます。

首筋のうじ虫を取っている母の姿

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 久保 友莉乃

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

家で、火傷を負ったところに赤チンという薬を塗って治療していたが、首の後ろが塗りづらい上に、薬が枕に吸われてしまうせいで治りが遅く、肉が腐ってうじがわいてしまった。そのうじを取り除くために、李さんのお母さんが「아이고(アイゴ)」と叫び、泣きながら箸でうじを取ろうとしている。

生徒のコメント

首にうじがわくという、聞くだけでゾットするような出来事が、当時ほぼ私たちと同じ年の李さんに起こったという事実に、最初はただただ驚いていました。状況をより近づけるために、資料を集めたりしましたが、初めは、その資料の画像を見るのにも抵抗がありました。本当にこの絵を描き切ることができるのかと不安に思うこともありました。

しかし、原爆の絵を描くという人生に二度とないような経験をさせてもらっている上に、李さんが辛い記憶を思い出して語ってくださったことを無駄にするようなことはしたくないと思うようになり、一層取り組む気持ちが強くなりました。この絵が李さんの活動に役立つものとなってくれば幸いです。

被爆体験証言者のコメント

最後に完成した絵を見せて頂き、本当に良く描けていると思いました。この絵のお蔭で証言をしやすくなり、特に子どもたちに伝えていく大切さも分かってくれると思います。

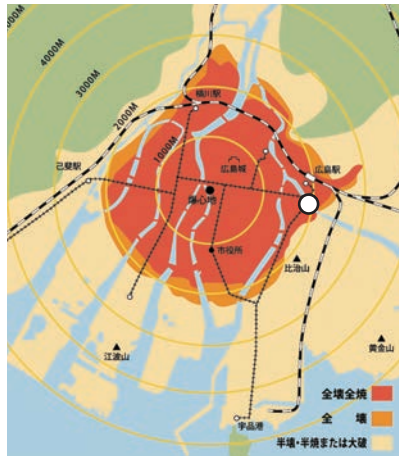
本当に、久保さん、倉重さん、富田さんの3人に、お礼を込めて感謝します。ありがとうございました。

閃光ののち伏せた場面

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 倉重 侑季

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

学校や職場で、「爆弾が落とされたら、目と耳と鼻を自分の手でふさぎ、うつぶせになる」と教えられていた李さんは、原爆が投下されたのを見て、とっさにそれを実行した。

生徒のコメント

今の高校生の多くが、広島と長崎に原爆が落とされた日を知らないという話を聞いたことがあります。彼らの多くは原爆に対する興味や関心が薄く、どこか他人事のように思っているのだと思います。

以前は私もそうでした。広島に住んでいるというだけで原爆の全てを知ったような気になっていました。しかし、李さんからお聞きした話はどれも知らないことばかりでした。これらのお話は誰もが知っている話ではありませんが、誰もが知るべき話です。

より多くの人に証言者さんのお話を知ってもらうため、私の絵が少しでも手助けになると嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

伏せた場面がよく描けていて、当時を思い出させるような良い色づかいだと思います。この絵があると子どもたちが、この状況をすぐに分かります。ありがとうございます。

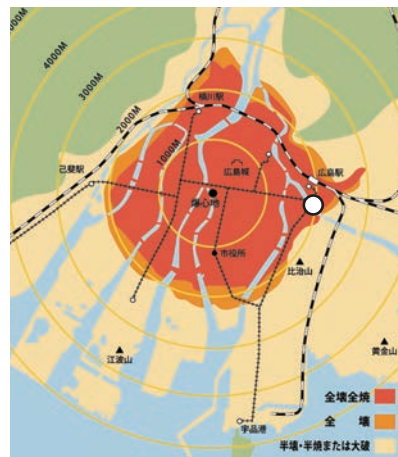


橋のたもとの被爆者が私を見つめている

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 倉重 侑季

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆後帰宅する時、橋のたもとに行くと、被爆したたくさんの人々が集まっていて、自分を探しに来た家族がないかこちらをうかがっている。

生徒のコメント

今の高校生の多くが、広島と長崎に原爆が落とされた日を知らないという話を聞いたことがあります。彼らの多くは原爆に対する興味や関心が薄く、どこか他人事のように思っているのだと思います。

以前は私もそうでした。広島に住んでいるというだけで原爆の全てを知ったような気になっていました。しかし、李さんからお聞きした話は何れも知らないことばかりでした。これらのお話は誰もが知っている話ではありませんが、誰もが知るべき話です。

より多くの人に証言者さんのお話を知ってもらうため、私の絵が少しでも手助けになると嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

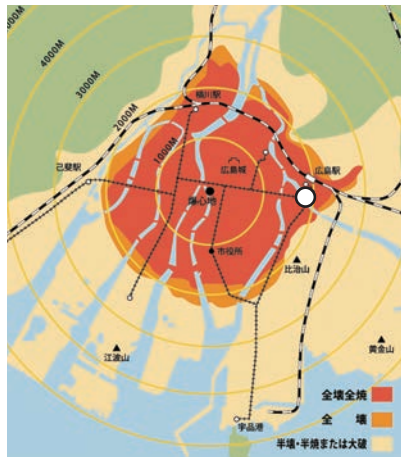
私が被爆体験を話すときに必ずこの場面を語っていますので、この絵があると子どもたちが、この状況をすぐに分かると思います。よく描けていると思います。ありがとうございます。

被爆後に立ち上がったところ (荒神橋から見た爆風によってなぎ倒された家々)

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 富田 真衣

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時機関庫で働いていた李さん。勤め先に路面電車で向かう途中、原爆が投下された。異変を感じた李さんは、すぐにうつぶせになる。2～3秒後、立ち上がり周りを見てみると、原爆の爆風によって家々はつぶれ、見渡す限り視界を遮るものはなかった。

生徒のコメント

私が初めて李さんにお会いした時、とても明るい方だという印象を受けました。それだけに証言を聞いたときには衝撃的でした。爆心地から1.8 kmという近い距離で被爆されたそうです。それでもすぐに異変を感じ、うつぶせになるといったとっさの判断は、簡単にできることではないと思います。

先日、現役のアメリカ大統領が広島に来られました。その時の「謝るという問題ではない」という被爆者の言葉からは、71年前にここ広島で起きた出来事を肌で感じてほしい、という気持ちを感じられました。たくさんの人に伝わってほしいです。

被爆体験証言者のコメント

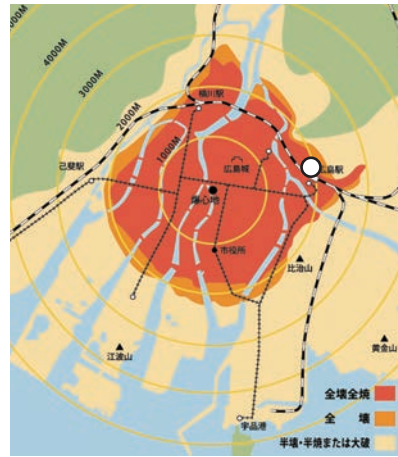
閃光・熱線、この時すでに衣服から出ていた皮膚は全て焼き尽くされ、立ち上がってみると全てが陰もなく見渡された。この絵があると子どもたちが、この状況をすぐに分かるといいます。本当によく描けています。感謝です。

熱線で火傷し機関車のオイルを塗っている

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 富田 真衣

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

全身に火傷を負った李さんは、自身の仕事場である機関区に向かう。「火傷には油が良い」とそこに居た李さんの仲間にもわれ、蒸気機関車の油を塗ってもらう。

生徒のコメント

私が初めて李さんにお会いした時、とても明るい方だという印象を受けました。それだけに証言を聞いたときには衝撃的でした。爆心地から1.8 kmという近い距離で被爆されたそうです。火傷を負ったところに油を塗るというのは本当に想像を絶するような痛みだったと思います。

先日、現役のアメリカ大統領が広島に来られました。その時の「謝という問題ではない」という被爆者の言葉からは、71年前にここ広島で起きた出来事を肌で感じてほしい、という気持ちが感じられました。たくさんの人に伝わってほしいです。

被爆体験証言者のコメント

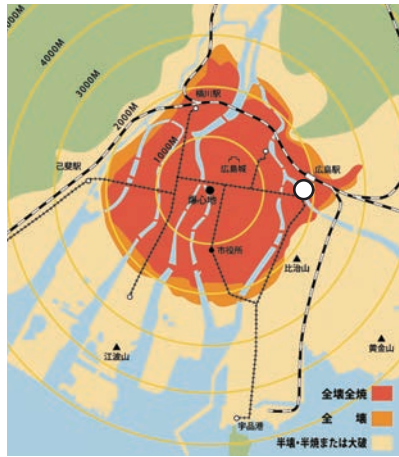
当時私は16歳でしたが火傷し、機関車の油を塗ってもらっている様子がよく描けています。この絵があると子どもたちが、この状況をすぐに分かります。本当によく描けています。感謝です。

閃光

被爆体験証言者 李 鍾根

70回生 曾根 沙也佳

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

猿猴川にかかる荒神橋に入ったその時、突然空に黄色みがかった光線が2、3秒間漂っていた。(爆心地から約1.8kmの地点)

生徒のコメント

李さんの視界を染めた、黄色がかった閃光は、何度も何度も色を塗り重ねて描きました。見たことがない色を想像して、李さんの記憶と擦り合わせながら、当時の光景に近づけることは簡単なことではありませんでしたが、この絵を制作することで、私自身の平和についての考え方が大きく変わりました。もし私がこの絵を描いていなければ、原子爆弾の閃光が黄色がかったことも、「原爆被害」が一言ではくれないということも、知ることができなかったと思います。

原爆の記憶が失われてしまうのは、本当に恐ろしいことです。この「閃光」を、もう誰も見ることがないように、私はこれからも行動し、伝え続けていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

まず、曾根沙也佳さんにありがとうございますを言わせて頂きます。自分にも描けない原子爆弾の閃光を描いてくださいとお願いしました。何度も打ち合わせをする、何度も描き直す。すまないと思いながら頼んでいました。

今日、絵を見せて頂き、出来た、これだと思いました。苦しい時もあったと思います。良く耐えて下さったことと思います。心からお礼を申します。嬉しいです。



被爆した馬

被爆体験証言者 李 鍾根

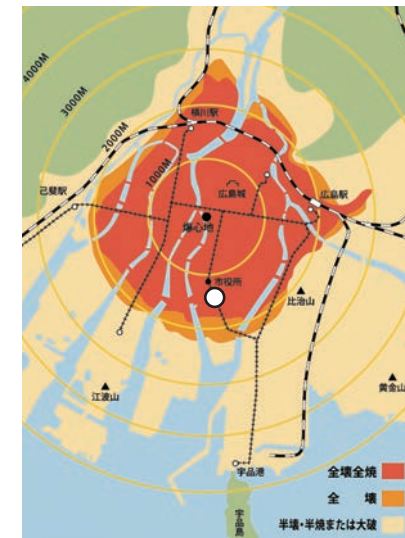
71回生 桂木 晋作

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

夕方4時頃に見た、広島大学の塀が爆風で倒れて、その瞬間に馬の口から爆風が入り、目の玉が飛び出している様子。



生徒のコメント

証言者の方の見た景色と自分が想像していることは、違うことも多く、打ち合わせの度に勘違いをしていたりして、話を聞いて描くことの難しさを感じました。また、証言者の方に話が伝わりやすいように馬の模型を作って構図や色を確認したり、普段の制作ではないような工夫をすることができました。

これからの生活の中で、また、広島を離れた時に、原爆の絵を通して感じたことや、知識などを知ってもらいたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

桂木晋作君、ありがとうね。馬が大好きだと言っていたように、立派に描けました。何度も描いては消し、注文を付けていましたね。私が訪問するときには、いつも二人で迎えてくれました。心からお礼を申します。嬉しいです。

非常トラック(男性優先)

被爆体験証言者 池田 精子

61回生 立川 侑子

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の広島市内。海田町の病院へ向かう途中のトラックに負傷者が乗せられている様子を描いた。戦場へ兵士として送られる男性が優先的に病院に運ばれ治療を受けたため、老人や女性、子どもさえもトラックに乗せてもらえず、トラックの周りに人が群がり、大騒ぎになったという。

生徒のコメント

戦争のために全てを捧げ、そのために多くのものを失った時代。その苦痛に耐え生き延びた人の話を聞くということは、少しためらいがあり、また責任が重いものだった。しかし、語り継ぐことが戦争廃止と平和維持のために私たちができる手段の一つである。

兵士として戦場に行ったという話を祖父から聞いたことがある。戦場で生死の境に立った祖父は、今でも当時のことが頭から離れないと言う。私は絵を通じて見てくれる人みなさんに戦争の恐ろしさをしっかりと理解してもらいたいと思う。

制作中、負傷した人とその人を運んでいる兵士の肌の様子に苦労した。原爆によって肌の表面がはがれて全身真っ赤になった人もいれば、黒くくすんだ赤い血の塊のできた人などを描き分けするのが難しかった。

被爆体験証言者のコメント

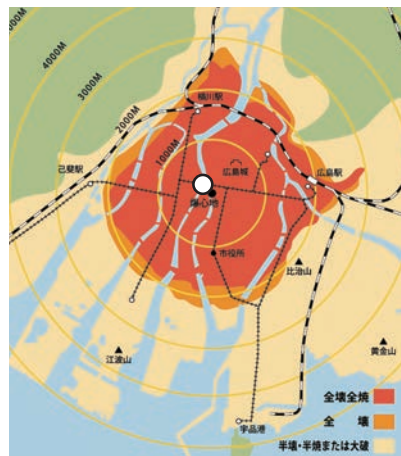
原爆を知らない立川さんが当時の話だけで描くのは大変難しいと思っていたが、出来上がった作品を見て、すばらしい出来だと思った。悲惨な情景が走馬灯のようによみがえり、二度と戦争があってはならない、人類の滅亡につながる核兵器を廃絶しなければいけないとの思いを強く感じた。立川さん、本当にすばらしい絵をありがとう。

うめつくされゆく川

被爆体験証言者 池田 精子

61回生 原 望美

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後、逃げる途中、川いっぱいにはれる人々。ざぶんざぶんと川に飛び込み人の勢いは止まることはなかった。川を流れていく全身ふくれあがった人々の身体。ぼろぼろの服、皮膚。川の辺りにはけがを負った親子、今にも飛びこもうとする男性、川に行き着く前に息絶えた人を描いた。

生徒のコメント

私は広島に生まれ育ったため、小さい頃から平和教育などを通して、戦争や原爆について学ぶ機会が多かったので、今回の原爆の絵の制作に関わることができ、良い体験ができたと思っている。原爆の絵を描くにあたり被爆体験を聞き、改めて原爆の悲惨さを思い知らされた。

下絵を見てもらった際に、証言者の池田さんは、「人をもっと増やして」と言われた。自分でも多めに描いたつもりだったけれど、実際には自分の想像以上に多くの方が亡くなられていたということを知って驚いた。私は実際にその場を見たわけではないので、現実味を求めようとしても、自分の想像できる範囲に収まりきれないものがあり、そこをどうやって表現するか考えることがとても難しかった。多くの人に、この作品を通して原爆の悲惨さを知ってもらい、平和の大切さに気付いてもらいたいと思う。

被爆体験証言者のコメント

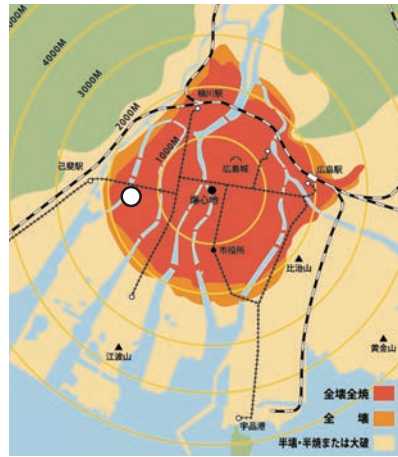
難しいお願いで大変だったと思うが、出来上がった作品はすばらしく感激した。当時のことを思い出して涙がわいてきた。“ヒロシマ”を風化させないために、永遠に語りかけてくれる絵が出来てうれしい。原さん、すばらしい絵を本当にありがとう。

私が見た被爆直後の被爆者(福島川河川敷)

被爆体験証言者 井口 健

67回生 伊東 良隆

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

井口さんは福島川の隣にある奉公先の工場の集会所で被爆し、その衝撃で気絶しました。集会所に火が回ってきて目を覚ました井口さんは窓から飛び出し、河川敷に着地しました。

その時、足に釘が刺さり、その釘を抜いて上を向いた瞬間に井口さんが見た光景を絵にしました。

生徒のコメント

中学生の時、基町高校の原爆の絵の特集番組を見て、この取り組みを知って興味を持ち始め、この度この絵を描かせていただきました。

燃える街も全身に火傷を負った人も想像することができず、とても苦労しましたが、井口さんのお話を聞き、資料館の資料を見て、やっと描くことができました。

この絵を描くことを通して、被爆者の方の苦しみを知りました。被爆の実情について、多くの人に知っていただくための情報発信の中心になっていきたいです。

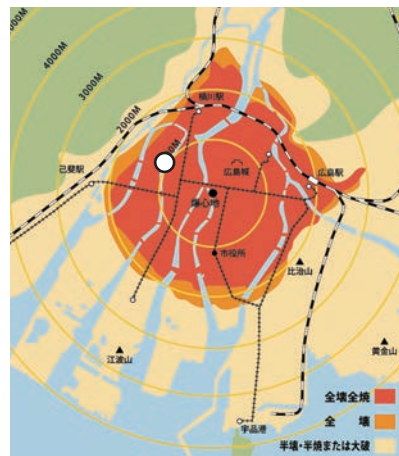


潮の引いた河原の惨状

被爆体験証言者 大田 金次

69回生 黒川 奈夏

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された日の午後2時頃。潮の引いた天満川に焼け焦げた多くの人々や馬、家財道具などが流れてきて、その場で静止している場面。この様子は天満川だけでなく、広島市内の多くの川で見られたそうです。

生徒のコメント

今回初めて原爆の絵を制作するにあたって、証言者の方のイメージ通りに描くことができるか、不安でいっぱいでした。また、真っ黒に焼け焦げた人や溶けたビンなどを多く描くことはとても難しく、考えさせられることだなと思いました。

今までは、原爆を経験された方のお話を聞くだけでしたが、今回の活動で、聞いたことを絵で表現し、多くの人々に広島で起こったことを伝える手助けができ、本当に貴重な体験ができたと思います。

被爆体験証言者のコメント

この度は松田さん、黒川さんに大変お世話になりました。お会いする度に私は思った事を言い、大変苦労されたと思います。しかしキャンパスを見せてもらう度に私のお願いしたことが絵になっており、安心しています。私の講話の時には皆さんの絵を修学旅行の生徒の皆さんに披露したいと思っています。今後のご活躍を祈っています。

炎から逃れ水を求めて雁木に集まってきた人々

被爆体験証言者 大田 金次

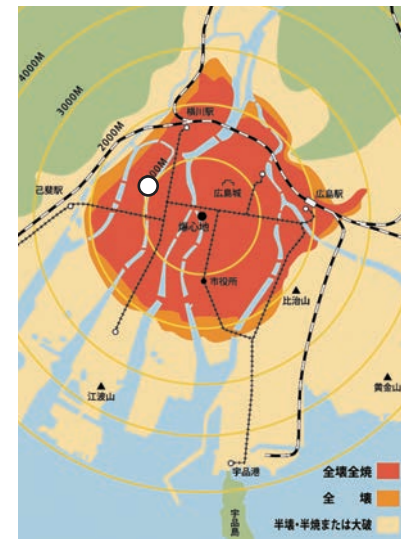
69回生 松田 優奈

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された日の午前9時頃の天満川。炎から逃れてきた人、怪我をし、助けを求める人、水を求める人、黒く焼け焦げて亡くなったたくさんの人達が雁木で足の踏み場もないほど横たわっている惨状。その中には赤ん坊を背負ったまま息絶えた母親の姿もあった。



生徒のコメント

黒こげの人、全身に怪我や火傷をしている人…。お話を聞いても当時の悲惨な光景は想像もできませんでした。聞いたことを一つひとつ考えて理解して絵におこしていくのに、自分の知識不足、技術不足を感じ、とても苦労しましたが、今までよりもっと「あの日」のことを深く知り、平和がどれほど大切なものか気づくきっかけになりました。この経験をこれからの制作にも何かしらの形で生かしていければ良いと思います。

被爆体験証言者のコメント

この度は松田さん、黒川さんに大変お世話になりました。お会いする度に私は思った事を言い、大変苦労されたと思います。しかしキャンバスを見せてもらう度に私のお願いしたことが絵になっており、安心してます。私の講話の時には皆さんの絵を修学旅行の生徒の皆さんに披露したいと思っています。今後のご活躍を祈っています。

翌朝の悲しみ

被爆体験証言者 大林 芳典

60回生 丸住 裕香

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下の翌日、破裂して水が噴き出す水道管に集まる人々。少年は腕の火傷を水で冷やし、大人達は家族を失った辛さから肩を落としている様子を描いた。

生徒のコメント

絵を描くにあたり、たくさんの資料を集めた。今までは情報を受け取るだけだったけれど、今回はその情報を自分なりに解釈しながら、絵を描いていくという作業をした。その作業が思ったよりも大変で、でも今までより深く原爆について考えることができた。私が原爆について考えながら描いた絵で、見る人にも何か伝えられたらいいと思う。

被爆体験証言者のコメント

8月7日、工場焼け跡あたりで出会った現場係長のつぶやきが肉親をいっせいに失った悲痛な嘆きの言葉と察し、いつも我々動員学徒を叱咤激励していた彼の傷心の深さを思い、暗い気持ちになった。

被爆証言ではあまり語ったことはないが、その時の情景は今も鮮明に脳裏に残っている。

父の遺骨を捧げ持っている少女

被爆体験証言者 大林 芳典

60回生 宮田 実来

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

女学生がとてもまじめな顔で、父の遺骨を差し出している場面を描いた。

生徒のコメント

少女のまじめな顔をどう描けばいいのか悩んだので、もしそれが自分だったら家族の遺骨を持ったときにどんな思いであったか、どのような表情をするだろうかと考えながら描いた。ただ無表情なだけだとまじめな顔とはいえないので、前をじっと見つめ、少しでも不安さを感じる顔とした。

被爆体験証言者のコメント

8月9日の朝、避難所の前で会った時、父の遺骨だと伝えられた。その時の緊張した面影、胸中に涙があふれるのをじっと耐えていたその悲しみを思って、答える言葉も知らずただ頷いたのみだった。

訊ねて来た祖父母と去って行ったが、その人の戦後は知るゆえもない。心の片隅に埋もれていた記憶だったが、今はこんなこともあったと語り残したい心境である。

8月6日の夜の火災～炎に追われる～

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 伊内 悠

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された日の夜に起こった火災。
家が燃え、逃げる途中に、瓦礫に足を取られた人や、
遺体につまずいた人、たくさんの人が襲ってくる炎に
呑まれたそうです。



生徒のコメント

証言者の岡田さんに被爆体験について何度もお話を聞いて質問をする度に、あの日、岡田さんが見た光景と私の想像している光景はおそらく全く違うのだろーうと思いました。真っ赤な夕焼けを見るとあの日の出来事を思い出して今でもつらいと、絵具をそのまま出したような赤だったとおっしゃっていたのが私の心に深く残りました。

岡田さんの記憶に少しでも近づけようとしてしましたが、どう描けば良いのか分からず途方に暮れることもありました。今でもまだ近づけることができていないかもしれませんが、少しでも岡田さんの証言の助けになってほしいです。

被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。
私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

鬼の形相

被爆体験証言者 岡田 恵美子

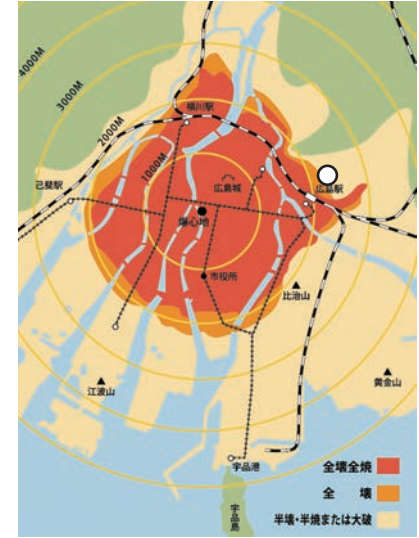
68回生 宇都宮 朱里

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

岡田さんが弟さんと避難する途中、東練兵場で焼け焦げた人々の間を縫って歩いた時、突然もんぺの裾を掴まれ「助けて」と言われた。



生徒のコメント

岡田さんからお話を伺った際、まず、70年も人の記憶に残るほど恐ろしい顔というのが分からず困惑しました。鬼の画像を見たり、ホラー映画を見たりして想像を巡らそうとしました。岡田さんは何度も、記憶に残ることが必要だとおっしゃられていて、私自身、それができてこそこの絵の真価、この絵を描くことの意味になると思いました。一人でも多くの人にこの絵を見て、あの日のことについて思っただけだと嬉しいです。見たことのない状況を聞いて描くことは、始めに思っていたよりもずっと難しく、貴重な体験となりました。

被爆体験証言者のコメント

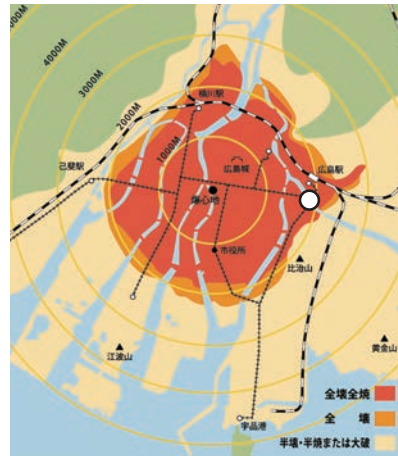
原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。私が感動し、感謝しております。ありがとうございました。

炎の中で助けを求める女の子

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 岡島 愛

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

この絵は、岡田さんが避難している時に見た、炎の中で倒れている少女の絵です。この子は倒れてきた柱に足を挟まれていて、逃げようにも逃げられませんでした。岡田さんが見た時、般若のように目を見開いて、「助けて、お母さん」と叫んでいたそうです。

生徒のコメント

死の恐怖で般若のように歪んだ顔を描くことに一番苦労しました。また、炎に囲まれている様子を描くのも難しかったです。

岡田さんは「助けてあげたかったけれど、置いていくしかなかった。本当に辛かった」と何度も話されていて、その悲痛な体験を描くのはとても根気と集中力があることでした。この絵を見た人が思わずぎよっとするような表情を目指して描きました。

被爆体験証言者のコメント

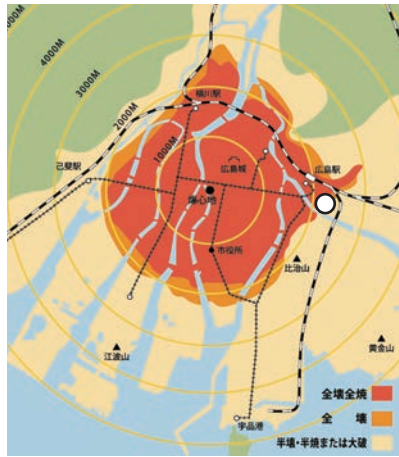
原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

原爆投下前の朝

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 岡島 愛

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下される直前の朝の風景を描きました。

良く晴れた8月6日の朝、外で3歳と5歳の弟たちが飛行機に向かって手を振っていました。その様子を岡田さんは窓から見えています。

しかし、日本のものだと思っていたその飛行機は、実はアメリカのものだったのです。

生徒のコメント

原爆は広島を焼き尽くしましたが、投下される前まではいつも通りの一日が始まろうとしていたことを改めて感じました。

この絵を描く時に意識したことは、原爆の恐ろしさをまだ知らない、平和な日常を表現することです。そのために、小さな男の子にモデルを頼んだり、当時の日本家屋の資料や岡田さんの話を元に窓と室内を描き込んだりして、より日常を感じられるように頑張りました。

被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。

私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。



真っ赤に火傷した被爆者たち

被爆体験証言者 岡田 恵美子

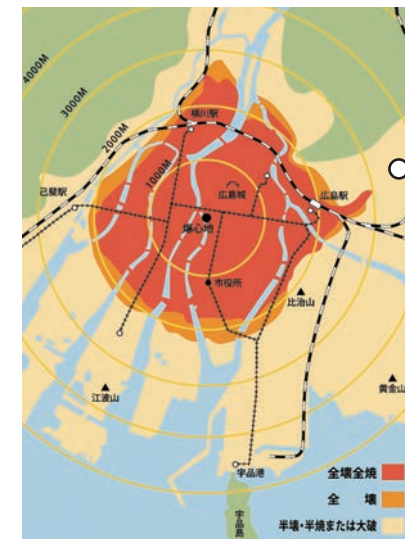
68回生 吉田 吏江

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

尾長の自宅で被爆した後、中山へ向かうため山を越える場面。その道は、山を越えようとしたがそこで力尽きてしまった犠牲者たちで埋め尽くされていた。犠牲者たちは皆、全身真っ赤に火傷していた。



生徒のコメント

この場面の場所は私もよく知っていて、岡田さんの話される被爆直後の様子と現在の様子は全く異なり、そこから想像し、描き表すことが大変でした。

また、資料を見ながら絵を描いていると、全てフィクションに思えてくるけれど、どれも実際にあったことであり、自分にとって平和が当たり前になっているのだと自覚し、怖くなりました。

被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。

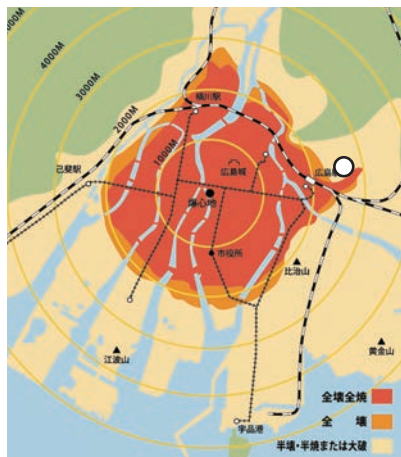
私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

私が初めて見た被爆者

被爆体験証言者 岡田 恵美子

70回生 岩本 依路

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

これは原爆が投下された後、山手に避難していく時に、岡田さんが生まれて初めて見た死体です。岡田さんはぎょっと驚き、足が進まなかったそうです。その死体は、性別が分からないほど皮膚がひどく焼けただれて垂れ下がり、全身血まみれになっていて、辺りは血の海のようになっていました。担架で運ばれて来て、この坂道に放置されてしまったように、岡田さんの目に映ったそうです。

生徒のコメント

原爆は恐ろしい。それは幼い頃から平和学習などで学んで知っていました。しかし、この原爆の絵の活動を通して、資料として様々な写真や当時の様子を再現した映画などを見ていく中で、私は、知っているのではなく、知ったつもりになっていたのだと気づかされました。今まで無意識に原爆のことを遠ざけようとしていたのだと気がつきました。

原爆の絵を制作する上で苦労したことはたくさんありました。特に、皮膚が焼けただれ、血だらけになった死体を今まで見たことはありませんし、想像したこともなかったもので、具体的なイメージを作り上げることに手こずりました。

岡田さんの記憶に沿える絵になるよう、平和に想いを馳せながら描きました。

被爆体験証言者のコメント

担架の上で赤く焼けた死体。私が最初に見た死体です。ぎょっとして、怖くて、足が前に進みませんでした。血が流れていました。

何度か、私の言葉だけではイメージが伝わらず、資料館の遺品を見てもらったこともありました。非常に大変だったと思います。

世界中で永遠に見てもらえる絵ができ、感謝しております。

お母ちゃん!

被爆体験証言者 岡田 恵美子

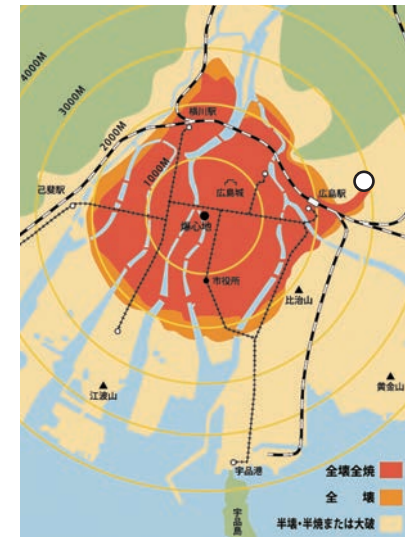
71回生 中川 雛

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2.8キロ離れた、東練兵場付近、原爆の二次火災より逃げていた当時8歳の岡田さん。その際、幼い少女が瓦礫につまずき、転倒。炎が迫りくる中、鬼の形相で「お母ちゃん!」と叫ぶ女の子と視線を交わす岡田さん。



生徒のコメント

原爆の絵を描き始めた時、岡田さんの体験を想像するのは、とても難しいことでした。迫りくる炎の熱量や迫力なんて分かりませんし、まして、人でない、鬼の形相の少女なんて、さっぱりわかりません。それでも、資料を探し、絵を描き、岡田さんにお見せして意見をいただくことを繰り返していました。

すると、どこか遠くのように感じていた声は、徐々に朗々と聞こえ、視界が鮮やかになってくるのを感じました。岡田さんの体験に確かに近づいていく感触があり、改めて戦争の悲惨さと愚かさを感じました。

また同時に、より多くの人に、戦争と平和について考えてもらえるよう、この絵と全力で向き合おうと決心しました。

被爆体験証言者のコメント

倒れた柱に挟まれ、動けなくなった女の子が「助けて」と私のもんぺをつかんだ。女の子は狂ったように大火の中で「お母ちゃん!」と叫んでいた。あの時の女の子の目を今でも忘れることができない。いつもごめんなさいと思います。あの時の炎の色を思い出すので、赤い夕焼けを見るのが嫌です。

原爆体験のない生徒さん。何度かお会いしてもなかなかイメージが伝わらない。大変ご苦労なされたことと思いますが、非常に立派な絵ができました。心から感謝しております。

少年の思い

被爆体験証言者 奥田 榮

60回生 佐々木 成美

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆に遭い、気付けば崩壊した家の前に立っていた奥田さん、周りには焼けただれた人がうずくまっていた様子を描いた。

生徒のコメント

広島に生まれ育った私は原爆の話を小学校の時から平和学習などで毎年聞いてきた。そのため、取り組みやすいのではないかと考えていたが、自分の知らなかった恐ろしい様々な出来事を知ったりどう描写したらいいかわからないこともあったりして、何度か筆の止まることもあった。絵の制作を通して、自分が現実の1割程度も原爆について知らないことを痛感し、もっとヒロシマについて学び、知るべきだと思った。

被爆体験証言者のコメント

被爆当時の話を熱心にたびたび聞いてもらい、また質問してもらい感謝している。
被爆時の様子が立派に描写されていて、とてもよい出来に仕上がっている。
62年前の生き地獄を思い出し涙が出る。
地球上では現在でも戦争が絶えない。1日も早く平和と核兵器の廃絶を願っている。
佐々木さん、ありがとう。

八月六日の記憶～燃える電車を見つめて～

被爆体験証言者 奥田 榮

60回生 濱田 奏衣

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

一瞬で兄と離れ離れになった。兄を助けることもできず当惑していると、一人の女性が瓦礫から這い出てきた。左肩から大量の出血をしていた女性は、右手で奥田さんの手を引いてくれた。逃げる途中で振り返ると、焼けた市内電車と舞い上がる煙、遠くには原爆ドームが佇んでいた。電車のそばには、逃げ出す力を失い倒れこんだと思われる幾人かの姿があった。

生徒のコメント

被爆者の言葉を形に表すのと同時に、ヒロシマを描くという特別な思いを抱きながら絵の制作に取り組んだ。資料探しもいつも以上に時間をかけた。思うように描くことができず筆が止まってしまった時は、友達の描く姿を見ては刺激を受け、何度も勇気をもらうことができた。いつまでも、どこにいても絵を描くことができる、そんな平和を守らなくては行けないと改めて強く感じる事ができた。

被爆体験証言者のコメント

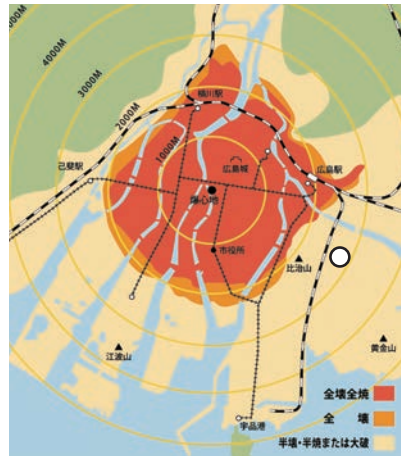
被爆当時の話を熱心にたびたび聞いてもらい、また質問してもらい感謝している。被爆時の様子が立派に描写されていて、とてもよい出来に仕上がっている。62年前の生き地獄を思い出し涙が出る。地球上では現在でも戦争が絶えない。1日も早く平和と核兵器の廃絶を願っている。濱田さん、ありがとう。

空襲警報が鳴る中、 学校から泣きながら家へ帰る

被爆体験証言者 小倉 桂子

69回生 石原 晴香

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

証言者の小倉さんが戦時中、通っていた小学校にいたときに空襲警報が鳴った。先生の「走って帰れ」という声を聞いて、帰る途中で飛行機から撃たれると思い、恐怖で泣きながら走って家へ帰ったという場面。

生徒のコメント

原爆の絵の制作で苦労したのは、実際に見たことのない場面を描くための資料集めや、その場면을証言者さんの記憶を元に自分の手で描くことです。絵の中にある石灯籠はこの絵の中でとても重要なもので、それを描くために、今も実際に残っている本物の灯籠を見に行き、写真を撮り資料を集めました。

また、証言者の小倉さんは毎回丁寧にお話ししてくださり、若い世代に原爆の体験を知ってもらいたいという思いが強く伝わってきました。そのため、私も、少しでも証言通りに描けるよう努力をしました。

被爆体験証言者のコメント

被爆後の絵はたくさん見たけれど、被爆前に子どもがどんな経験をしたか、どんな恐怖を味わったのかを描いてほしかった。原爆が落とされたその日だけでなく、それ以前の戦時中の生活の様子がよく表現されている。

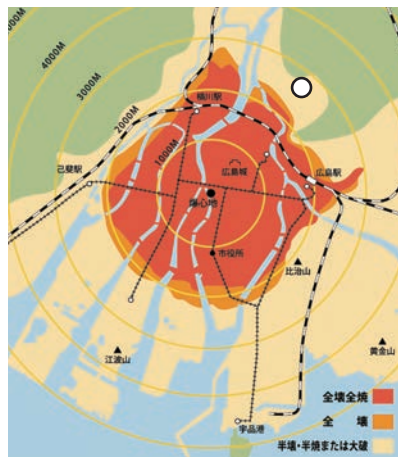


自宅の前で黒い雨に遭う自分

被爆体験証言者 小倉 桂子

69回生 市川 月穂

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時8歳の小倉さんは、自宅近くで被爆した後、家の前で黒い雨に遭った。白いブラウスに落ちた黒い汚れを触ると、ベタベタしていて、雨だと気付いた。

生徒のコメント

自分の目の前に無いもの、実際に体験できないものを描くことは想像力があるものだと改めて感じました。

原爆の話はこれまでに何度も聞き、色々なことを知っているつもりでしたが、小倉さんの証言を聞き、黒い雨のことはもちろん、原爆投下後の被爆者たちのこと、そして戦後のことなど、今まで聞いたことのない話がどんどん出てきました。自分はまだまだ無知であるということを知ることができました。

被爆体験証言者のコメント

当時の下駄やモンペなどの衣服を上手く再現してくれた。

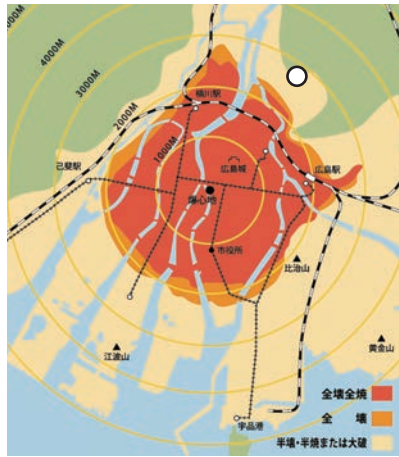
雨の感じ、手の感じや、瓦の積み上がりなど、場面の様子がよく描けている。

早稲田神社から見た 8月7日の広島市内の風景

被爆体験証言者 小倉 桂子

68回生 久津間 紗也

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の8月7日の朝、当時小倉さんの自宅の近所にあった早稲田神社から眺めた広島市内の光景。至る所で死体を焼く煙が上がっている。ほとんどの建物が崩壊しており、まさに焼け野原といった様子で、崩壊していない数少ない建物の中で、ちょうど正面に見えた福屋(旧)と中国新聞社がとても印象に残っているそうです。

高い建物が少ない分、海が近く感じられ、「(海まで)歩いていけそう」と思ったそうです。

生徒のコメント

実際に見たこともないものをいかに小倉さんの記憶の情景に近づかせるか、ということが一番苦労した点です。どれだけ資料館で当時の広島の写真を見ても、小倉さんが「(当時の広島風景に)そっくりだ」とおっしゃった、東日本大震災での津波に襲われた街の写真を見ても、うまく絵に表すことができず、何度も描き直して、やっとの思いで描き上げました。

この原爆の絵の制作を通して、前よりも当時のことを知ることができ、またより一層原爆被害の悲惨さを思い知りました。この絵が少しでも平和活動の役に立てたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

広がりのある風景を描くことはとても難しいのに、よく努力して描いてくれたと思います。8歳の私の、海が見えたときに受けた衝撃がよく表現されています。

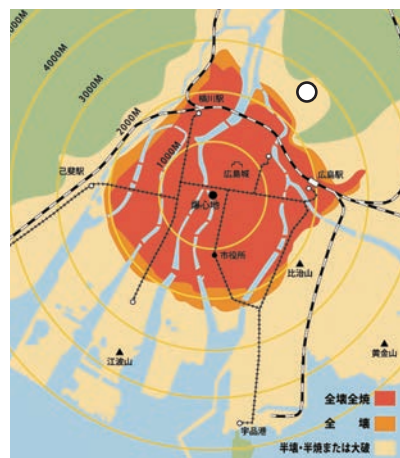


部屋一面に突き刺さったガラスの破片

被爆体験証言者 小倉 桂子

69回生 蔡 茹夢

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日に原子爆弾が投下され、その爆風で小倉さんの家の窓ガラスが全て割れ、その破片が部屋一面に隙間なく突き刺さっている様子。

生徒のコメント

今回の制作にあたり、私はより深く原爆のことについて考え、知ることができたと思います。過去に被爆者の方のお話を聞く機会は何度かありましたが、お話を聞くだけでなく、それを絵にすることは本当に大変で難しいことだということが分かりました。

苦労したことは、昔の家の構造がよくわからず、なかなか描き始めることができなかつたところです。ガラスの突き刺さり方など、お話だけでは分からないこともたくさんあり、資料なども活用しながら描きました。

被爆体験証言者のコメント

本当に難しい絵だと思った。

当時の日本家屋を説明するのも難しく、実際に見たこともない場面をよく描いてくれたと思う。

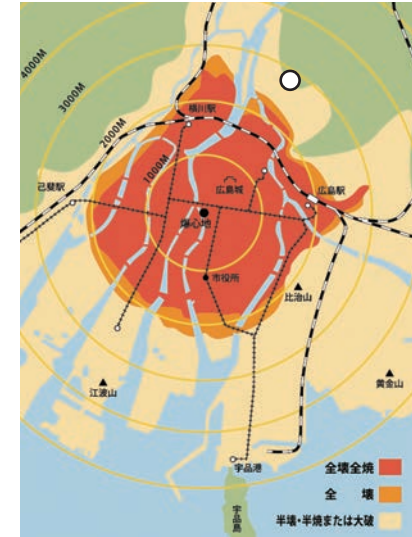
神社の石段に押し寄せる人々とそれを治療する兵士

被爆体験証言者 小倉 桂子
66回生 山口 達典
平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

神社の石段に押し寄せる被爆者たち。それを治療する兵士。治療と言うものの、薬もなく、応急処置程度のことさえできない。油のようなものが入ったバケツを持って、火傷に塗ってやっていただけだ。手前の折り重なって倒れる人々はもう虫の息で、ハエがたかったり、ウジがわいていた。



制作者のコメント

人びとの傷口や肉、血管を描いていると、その痛みがこちらにも感じられて、絵を描くとはこういうことかと感じたことがありました。今まで、人の意識の中の光景を具体化するという経験がなかったので、とても辛く、苦しい日々でした。しかし、この経験が自分の次の制作に活けると確信していますし、この絵が小倉さんの証言の助けになれば幸いです。

被爆体験証言者のコメント

絵があまりにもリアルで恐怖を感じた。この風景が忘れられないで、その後何度も夢に見たことを思い出した。姉が見たという、頭がパッキリ割れて血管がくっきり見えている人もとてもよく描けている。

目もくらむ光

被爆体験証言者 小倉 桂子

72回生 原田 真日瑠

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日の朝、当時8歳だった小倉さんがお父さんから「今日は学校に行くな」と言われ、「みんな学校に行けていいなあ」と思いながら、自分の家の前の通学路を眺めている時に原子爆弾が投下され、左上が光った瞬間。まぶしい光の中で全てのものが真っ白になったように感じられた。すぐ後に続く爆風で、道路に叩きつけられ気を失った。



生徒のコメント

当時の家や家周り、光の鋭さを表現するのがすごく難しかったです。実際に、原子爆弾投下時に小倉さんが立っていた場所にも取材に行き、できる限り小倉さんが見た光景に近づけたいと思いながら描きました。

経験のないことを絵で表現するのはとても難しいことですが、今回制作した絵から、光の鋭さや原子爆弾が落ちた瞬間のことだけでなく、当時の人々の服装やどんな家に住んでいたのかということまで感じていただけると嬉しいです。

この絵をたくさんの日本人の方や外国人の方に見ていただいて、8月6日に広島で何があったのかを知っていただき、またさらに多くの人へ伝えていける架け橋になればいいなと思いました。

被爆体験証言者のコメント

私の心を代弁してくれる基町高校生という傳承者ができて嬉しく思います。世界に私の思いを伝えてくれると感じました。最も分かりやすい絵という形で、この絵を日本や世界の隅々のどこかで多くの人に見ていただくことができます。高校生が描く絵は表現が優しく伝わりやすいと思います。一番大切なのは次世代を担う若者たちの想像力と創造力であると感じます。彼らの感性を通して当時の惨状が伝わってきます。

暗闇の中で燃える小屋

被爆体験証言者 小倉 桂子

71回生 桂木 晋作

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆風によって飛ばされ、牛田の家の前の道路で数分気を失っていた。しばらくして気が付いたとき周りは真っ暗になっていたが、遠くで納屋の藁屋根が燃えていた。「いったいどのくらい気を失っていたのだろう」と思う。



生徒のコメント

私はこの取り組みに参加して今回で二回目です。昨年とは違い、今年は本を読んだり、写真を見て戦争の背景を勉強したりしました。この絵を使って小倉さんの証言活動に役立ててもらい、また色々な人に見ていただきたいです。

被爆体験証言者のコメント

私の心を代弁してくれる基町高校生という伝承者ができて嬉しく思います。世界に私の思いを伝えてくれると感じました。最も分かりやすい絵という形で、この絵を日本や世界の隅々のどこかで多くの人に見ていただくことができます。高校生が描く絵は表現が優しく伝わりやすいと思います。一番大切なのは次世代を担う若者たちの想像力と創造力であると感じます。彼らの感性を通して当時の惨状が伝わってきます。

待つ

被爆体験証言者 笠岡 貞江

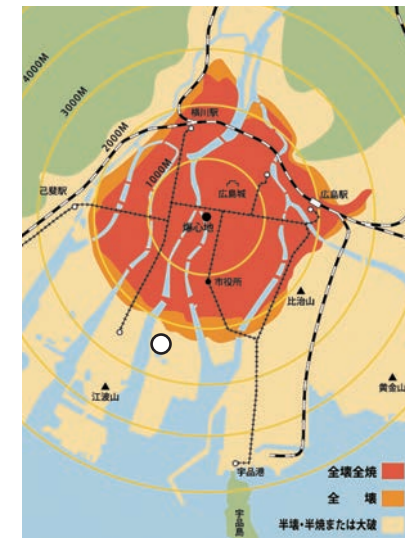
60回生 久保 玲奈

平成19(2007)年度制作 日本画(F15号)



描いた場面

原子爆弾投下後、子どもの無事を心配しつつ、潮が引くのを待つ母親。潮が引けば、川を渡り家へ帰ることができるのに、似島の方に行く舟に乘せられてしまう場面を描いた。



生徒のコメント

被爆証言を基にたくさんの資料を見つけ、その中から想像を膨らませていくことが大変だった。濁りよどんだ水、血が流れる水を様々な色を入れつつ、どうにか表現できるように何度も色を塗り重ね、深みを出すことに苦労した。

人のために描くこと、過去を描くことはとても大変な活動だが、被爆証言を聞き証言に近づける努力と表現力の必要性、絵画として過去を残すことの重要性が少し理解できたと思う。

被爆体験証言者のコメント

雑魚場町で建物疎開作業中に被爆し、安全と思われる方向には逃げずに、子どもの身を案じて江波町の家に戻ろうとして、川の潮水が引くのを待っている母親の心情を察し、証言の際、胸が苦しく言葉に詰まってしまう。私の証言を聞き、その情景をイメージして絵を描いてくれた生徒さんに感謝する。

傷つき潮に流される被爆者、舟に乘せられて運ばれる被爆者、母親も意思に反し舟に乘せられたものと思う。

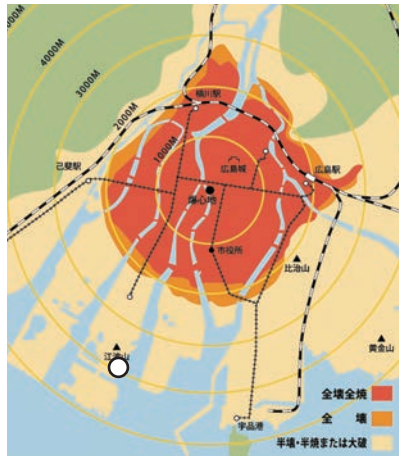
何枚もの下絵を描き、絵を仕上げるまでに色を重ね、手を加えて時間をかけて完成させた苦労に対してお礼を言いたい。

ヒロシマ～昇る魂～

被爆体験証言者 笠岡 貞江

61回生 立川 奈緒

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された翌々日、被爆してケガで弱っていた父が亡くなり、その火葬を夜海の浜辺で行った。火が消えないように見張りをしていた笠岡さんは、火葬中の炎から青白い火の玉がいくつも立ち昇ってくるのを見たといい、その火の玉が人の魂だと思ったということである。

生徒のコメント

火や火の玉は実際にあるものだが、どちらも初めて描くものだったし、笠岡さんの気持ちをこめることに苦労した。戦争で亡くなった人々には、それぞれ伝えなかったこと、やりたかったことが沢山あったと思う。それらが無に帰してしまったことが、笠岡さんの心に強く残ったのではないかな。私もこの絵の制作を通して、戦争について、原爆について考えた。この絵を見た人が、少しでも戦争について考え、笠岡さんの気持ちに触れることができればと思う。

被爆体験証言者のコメント

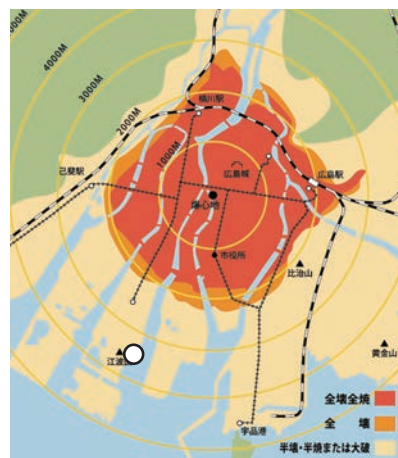
原爆は一瞬のうちに多くの生命を奪った。戦時中であっても、人は皆夢も希望も持っていた。私の父親は、屋外で被爆し、全身火傷で2日後に亡くなった。木切れを集め身内で火葬した。浜辺では同様に多くの死体が焼かれていた。12歳だった私も火が消えないように火の守りをしていたところ、日が暮れ薄暗くなると火の玉が飛んでいた。いくつもいくつも飛んでいたのが驚いたが、その場を離れられず見つめるだけだった。様々な思いを残して死んでいった人の魂だと思う。生きたい生きて色々なことをしたいと心に残して死んだ人たちの魂だと思う。何とか残しておきたいと思っても自分で絵にすることができず、今回お願いした。見たことのない場面を、私の言葉だけで絵を描くということで、何度も手を加え、難しく、苦労が多かったと思う。ありがとう。

港の船の間に浮き沈みする死体

被爆体験証言者 笠岡 貞江

63回生 西岡 優華

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

焼け焦げた死体が、上流から海辺の船場まで流れ着いて浮かんでいるところ。

生徒のコメント

打合せの時、絵の場面以外にも、原爆が落とされた直後の人々や建物の様子を教えていただき、単純な恐怖心だけではなく、このような惨劇を繰り返してはならないという使命感が湧いてきました。

今後も被爆者の方々との交流を通して、平和の大切さを未来に伝えていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

川に流れていた死体を兵隊さんが引き揚げたのですが、港に入ってしまった死体までも手が届かなかったのでしょうか。舟と舟の間に死体が浮かんでいました。陸から見ていた子どもとも大人とも分からない死体に対して、気の毒でどうにかしてあげたいという心が湧きませんでした。

死体であっても命です。平和な現在であればすぐに引き上げて、葬ってあげたでしょうに。

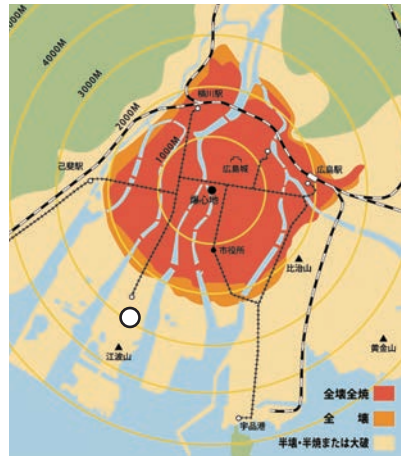
戦争は人の心まで変えていたのです。心を忘れていました。死体でも「いのち」です。いのちとして扱えなかった。「ここに沈んでもらってはいけない」と沖へ押し出しました。

被爆当日、初めて見た被爆者

被爆体験証言者 笠岡 貞江

63回生 向田 紗希

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時江波町に住んでいた笠岡さんたちのもとへ、街中へ出かけていた近所の小父さんが、市内で起きた異変を知らせるために戻ってきたところ。小父さんは火傷で皮膚が変色していましたが、市内へ出かけている家族がいる近所の人たちのために、必死に江波まで戻って来た。

生徒のコメント

火傷を負いながらも江波まで戻ってきた小父さんの使命感、家族のいる市内に異変が起きたと知った近所の方々の驚き悲しむ様子を描くのが難しかったです。

実際に被爆した方だけでなく、そのご家族など、本当に多くの人々を苦しめる原爆は、あってはならないものだと感じました。

被爆体験証言者のコメント

綺麗な光を見た直後に、粉々になったガラスが頭に突き刺さり、傷を負いました。何が起ったのか分からず、近所のおばさん達と心配している中、30分くらい経った頃でしょうか、近くに住む男の人が出先の舟入(爆心地から2km地点)で爆弾にやられ、戻って来ました。その顔、腕はピンク色の火傷をしていました。「広島はおおごとじゃ、ピカッと光って全部やられた」と街中を指しながら話されました。

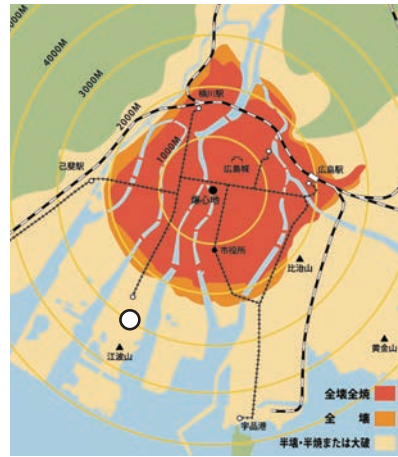
それを聞いてびっくりしました。市内の建物疎開に子どもを行かせている親たちは直ぐに探しに出かけました。市内に出かけている両親を心配しても、その時13歳の私はどうすることも出来ず、オロオロするばかりでした。

ああ!幽霊だ!!

被爆体験証言者 笠岡 貞江

65回生 高山 愛季

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

父のために畑にトマトを取りに走って行く時、ふと顔を上げた瞬間、白い幽霊の行列が目の前を行進していた。その場は逃げたが、後から考えてみると、それは皮膚がはがれて垂れ下がった腕を前に出して歩く、灰をかぶった被爆者であった。

生徒のコメント

見たことのない場面を描く。それは大変でとても難しいことでした。血を流しながら苦しそうに歩く人、見てもいないのに私が描いてもいいのかと悩む時もありました。しかし、私たちの世代がこの証言を形に遺すことで、これから先、多くの人に原爆によって何が起きていたのかを伝えることができる、制作が進むにつれ感じられました。

できるだけ多くの人にこの原爆の絵を見ていただき、感じてほしいと思います。

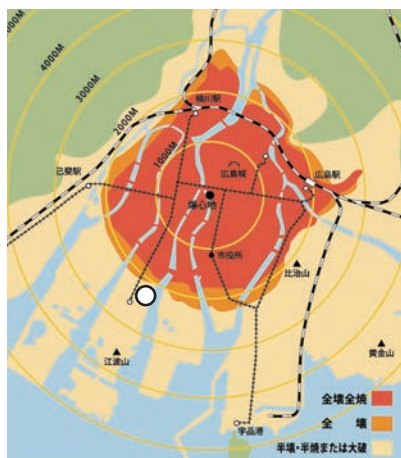


原爆投下後、初めて行った学校で

被爆体験証言者 笠岡 貞江

66回生 永井 攻

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が落とされた数日後、笠岡さんが友人と共に死体を集めている最中に倒壊した学校の壁を見つけた。それを持ち上げると生焼けの死体が横たわっていた。

生徒のコメント

今回原爆の絵の制作に携わらせていただいて、改めて戦争の悲惨さを感じました。実際に見たことのないものを描き表すのはとても難しかったです。特に、赤黒く、異臭を放つ死体を表現するのが大変でした。この絵を見て、何か少しでも感じてもらえたら幸いです。

証言者の方の貴重なお話を聞くことができ、本当によい経験になりました。ありがとうございました。

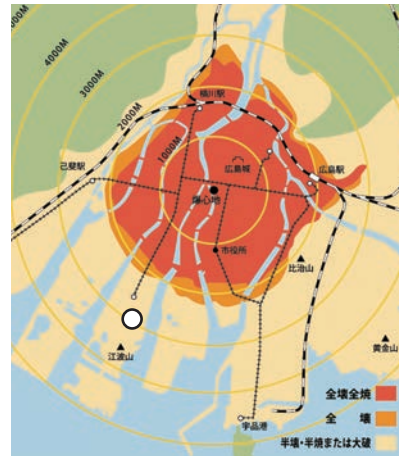


本当に、おとうさん？

被爆体験証言者 笠岡 貞江

68回生 小川 美波

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された翌日未明、親戚の家に逃れていた大火傷の父親を兄が連れにゆき、荷車に乗せられて家に着いた時の姿。

生きている人とは見えない、体は真黒、何も着ていない、目は見開いたまま、くちびるが可哀想、ザクロのようだった。

生徒のコメント

証言の中で笠岡さんは「お父さんは真っ黒でこげた所が黒く光っていた。顔が大きく膨れ、唇がめくれてザクロのようになっており、目が大きく見開かれていた様子だった」と言われていました。その想像が全くつかず、資料をいくつも見て、何度も描きなおしました。

今、原爆のことを殆ど、あるいはまったく知らない人が大勢いると聞きます。私は今回の経験から、原爆が投下された事実を改めて身近に感じました。私たちがまで続けられてきた原爆の事実の伝承を、今度は私たちが続け、原爆をよく知らない人に広めていかなければならないのだと強く思います。

被爆体験証言者のコメント

真黒な姿がどのように表現されるのか。実際に画になるのだろうか。見た事も経験もない生徒さんが想像し描いて下さった事に感謝です。

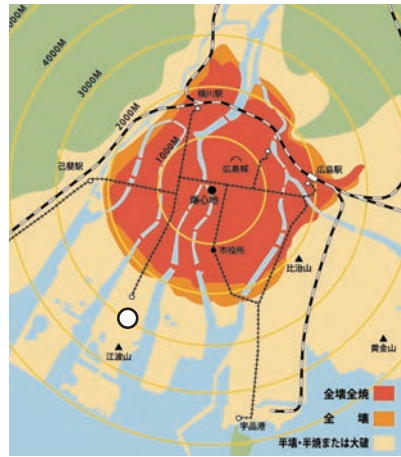
私の願った以上の仕上りにどれ程ご苦勞をかけたことかと思いがつります。

閃光

被爆体験証言者 笠岡 貞江

68回生 小川 美波

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後。自宅屋内にいた笠岡さんが見た赤い光と、爆風によって割れ、飛び散る窓ガラス。

生徒のコメント

最も苦労したのは、この場面を笠岡さんご本人が目撃していないため、何をどのように、どこまで描けば良いのか、すべて自分で考えて描かなければならなかったことです。光の色だけ「日の出のような色」というアドバイスを頂いていましたが、ガラスの破片や陰影を描くのは、手探りの作業となりました。

お話を伺いながら、原爆の強烈さを強く感じました。鋭く差す光、爆音、爆風と、投下された直後の惨劇…。それら全てを一瞬のうちに多くの人びとの脳裏に焼き付けた原爆という凶器に、私は恐怖と憎悪の念を抱かずにはいられないのです。

被爆体験証言者のコメント

光った瞬間に爆発音・爆風によって粉々になったガラスの破片が飛んで来た事、言葉で言い表すのも難しいのに絵に画いてもらえて嬉しいです。どのように出来るのかワクワクしていました。

画くのにご苦労かけたと思います。この絵の証言をする時、聞いて下さる人が恐ろしさを共感してくれることでしょうか。ありがとうございました。

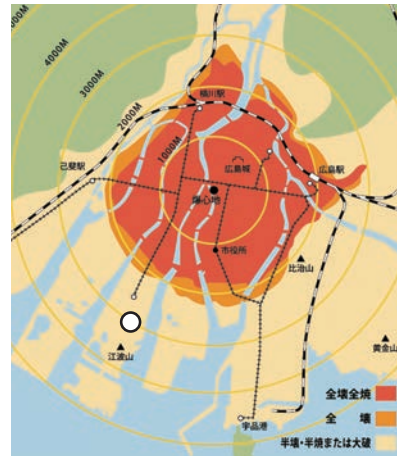


払っても寄ってくるハエ、異様な臭いに群がるウジ

被爆体験証言者 笠岡 貞江

69回生 今村 遥香

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

真っ黒焦げに焼けたお父さんの看病で、火傷しているところに(湿布代わりに)すりおろしたキュウリをのせていたら、焦げた皮膚がペロッとむけて、ウジ虫がわき、ハエがたかっている様子。

生徒のコメント

黒焦げになった人間、人間の肉、ウジ虫など、描くどころか見たこともないものを、今回描かせていただきましたが、正直、ウジ虫などの生々しい生き物を絵に表すのはとても大変でした。

しかし、証言者さんの「大人だけでなく小学生にも分かりやすく伝えるにはどうするか」と悩まれながらも必死に教えてくれる姿を見て、これから語り継がれていくのに、理解されるのにはどうしたらいいのかと必死に考えながら描きました。

この絵でこれから先の世代の人達にも戦争の恐ろしさが伝わることを願います。

被爆体験証言者のコメント

大火傷で真っ黒な体、赤身が出て悪臭がする、そこにウジがわき、その虫が人間の体を餌にしてハエになる。原子爆弾により、このようなことが起きました。

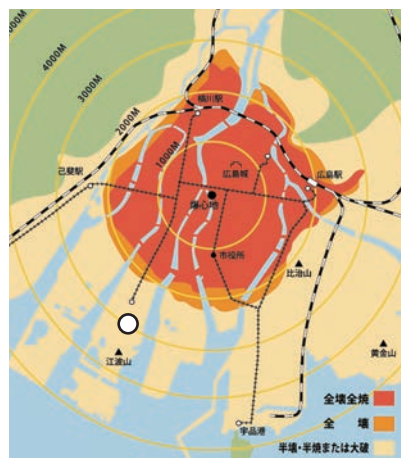
絵にはできないと諦めていましたが、描いて貰うことが出来て嬉しいです。黒光りする体、赤身に群がるウジ虫、難しかったと思います。このようだったかしらと何回も描き直してもらいました。ありがとうございました。

吹き出物の治療

被爆体験証言者 笠岡 貞江

71回生 富士原 芽依

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆時、ガラスで怪我をしました。ガラス傷が治り、翌年に体のあちこちに吹き出物ができました。その傷口から膿が出ず、右腕に3つの穴があき、そこから膿がどんどん出ました。治るのに4カ月以上かかりました。放射線のことは知らなかったのですが、お祖母さんが、毒ガスが出たネ、と言いました。原爆の後遺症だと思います。薬はなく、どくだみをもんだ汁を付けたり、干したものをお茶にして飲みました。

生徒のコメント

被爆から1年後に起きた体の異変。70年以上たった今でも腕に残る傷跡。制作を通して、あまりにも長期的な原爆の被害に核兵器の恐ろしさを生々しく感じました。腕に穴があき、そこから膿が流れ出している様子は想像しづらく、打ち合わせで何度もお話を聞き、修正を繰り返して、笠岡さんの記憶に近づけるように描きました。こんなに痛々しく、悲しい出来事がもう二度と起こらないように、核兵器のない世界を願います。

被爆体験証言者のコメント

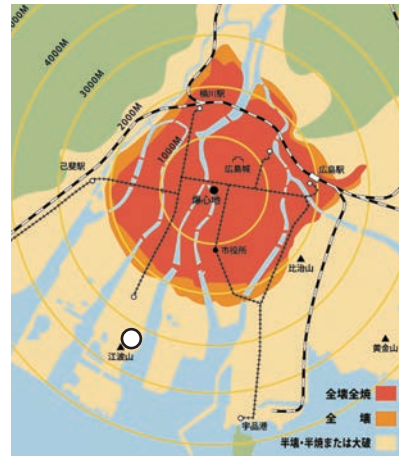
身体にできた吹き出物をどくだみ(薬草)で治療した。説明しても、現在では想像もつかない状態、治療方法です。当初のデッサンでの下書きの時も、大まかな話で難しかったと思います。「こうでしょうか?」それではない。「これでは」そうです。など、何度も描き直してもらいました。証言をするときに、相手に分かってもらえる絵になりました。ありがとうございました。

放置されたままの黒い死体

被爆体験証言者 笠岡 貞江

71回生 河元 愛香

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆当時12歳だった笠岡さんが自宅の近くで見た光景。防火水槽にもたれかかるように亡くなった真っ黒の人は同じ姿勢のまま、何日も放置されていた。無関心で通り過ぎていく人々は皆「吊ってあげる」という気持ちを無くしていた。

生徒のコメント

制作の時、笠岡さんは何度も「戦争は人の心を変えた」と仰っていました。死体を見慣れたり、吊う気持ちを持つことができなくなった人をどうすれば表現できるか悩み、自分でモデルをするなど当時の人の気持ちを考えながら描きました。二度とこのような恐ろしい景色を見ないように、人が人らしい心を持って生きることができるよう語り継いでいくべきだと思います。そしてご自身の辛い記憶を思い出しながら平和のために証言をしてくださる笠岡さんの思いを絵と共に伝え続けていこうと思います。

被爆体験証言者のコメント

生徒さんに被爆当時のことを話しました。6日の夕刻、防火用の貯水槽にすぎた黒い死体の映像は今も心に残り消えません。ここまで逃げてきた人が水を飲み、ホッとしていきを引き取ったのかと思います。その前を人が何人も通り過ぎます。何も感じない、誰も葬ってあげる気持ちはなく、何日も、そのまま放置されたままになっていました。その映像から戦争とはこんなにもむごいことだと分かってほしい。戦争をしていた頃の気持ち(心)を感じてもらえる絵になっています。難しかったです。下絵を何度も描き直し、水槽の跡が残っている現地も見てもらいました。相当なエネルギーを使ってもらいました。いろいろと有り難うございました。

お母さんは何処？

被爆体験証言者 笠岡 貞江

71回生 岸 まりも

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、両親は知人の家の建物疎開の手伝いに朝早く国泰寺町にてかけ、屋外で被爆しました。火傷をした父は自宅に連れ帰りましたが8日に死亡しました。母は似島の救護所で死亡が確認されました。他家に嫁いでいた姉に来てもらいました。小学5年生の弟は学童疎開で吉舎町(現三次市)にいました。弟は父が亡くなったということで姉が迎えに行きました。列車で広島駅まで、そこからは電車道路沿いを歩いて自宅(江波)に帰りました。弟は街の変わり果てた様子を見て我が家は親は大丈夫なのかと訊ねたけれど姉は何も答えず歩くばかりでした。家に着いて弟は真っ先に「お母さん」と呼びました。出迎えた兄は言葉もなく黙って仏壇を指差したのです。その時の弟の表情、母に会えると思っていたのにどうして、大きな悲しみは涙も出ないのです。



生徒のコメント

この絵は取り残されてしまった方々の気持ちに寄り添った絵です。8月6日の一日だけで原爆の被害が終わるわけではありません。亡くなるまで消えない傷を体にも心にもつけられた方もいます。大切な人が亡くなったのに、なぜ自分は生きているのかと疑問を感じる方もいます。それでも生きなければならなかった。原爆が落とされた後の、残された方々は家族の死をどう感じて、これからどう生きようとしていたのか、当時の人々の心情についても考えてもらえたら幸いです。

被爆体験証言者のコメント

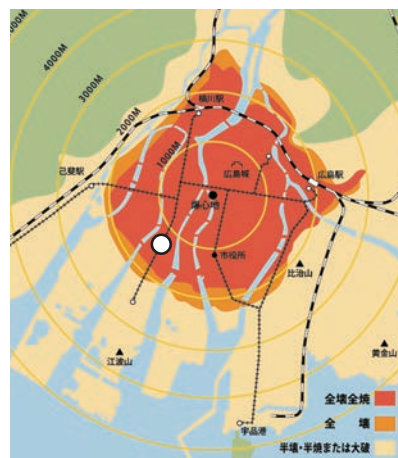
生徒さんに戦争当時の生活、敗戦後のことも話しました。今は仏壇に多くのお供えをしています。が、それはありません。家まで行って実際にどうだったかも知ってもらいました。構図を何度も試して、何度も色乗せ大変だったと思います。有り難うございました。

水を求めて

被爆体験証言者 笠岡 貞江

72回生 下向 萌加

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月14日、田舎に疎開するため焼け跡を歩いて行きました。途中、破裂した水道管から水が出っぱなしになっていました。水を飲もうと近づいた時、貯水槽にもたれて亡くなった人が目に入り、怖くなり後ずさりしました。

生徒のコメント

真っ黒に焼けた死体、爆風で吹き飛ばされ焼かれた瓦礫、どれも今の時代の人々にとっては理解しにくいものばかりでした。焼け爛れた皮膚や身体中にまとわりついたうじ虫など、実際に見たことのない光景をどのように表現するかということが難しかったです。

この絵を通して、世界中の人々に原爆の悲惨さを伝えると同時に、「平和」について考えるきっかけになってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

原爆が投下された後75年経過しているのに、当時のことは鮮明に目の前に現れます。焼け跡の瓦礫、破裂した水道管、生徒さんは話を聞いただけで、想像と感覚で表現して下さいました。難しかったです。有り難うございました。

兄妹で父親を火葬

被爆体験証言者 笠岡 貞江

74回生 田邊 萌奈美

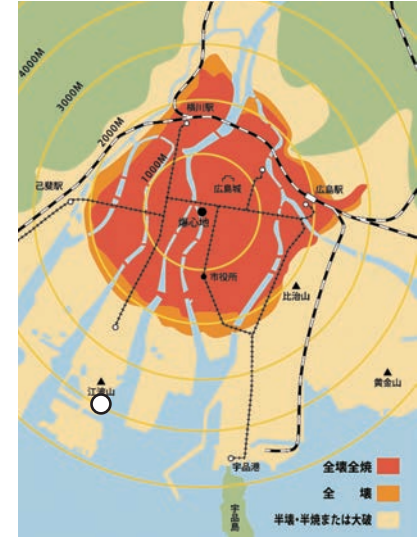
令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から1 km地点、雑魚場町で被爆した笠岡さんのお父さんは大河町の親戚の家に逃れていた。お兄さんがお父さんをリヤカーに乗せて家に連れ帰ったのは8月7日早朝で、お父さんは8日の夜に亡くなった。

当時12才の笠岡さんは、お兄さんと工面したお棺にお父さんの遺体を納め、港近くの広場で木切れを集めて火葬した。その広場では他にも多くの人が火葬しており、悪臭と煙が漂っていた。



生徒のコメント

私は、笠岡さんに火葬を行った際のことを伺った時、「疲れや非現実感から涙などは出ず、無表情だった」と言われたことがとても印象に残っています。肉親が死んでも、それを悲しみ、受け入れる時間すら与えられないのが戦争なのだと感じたからです。そのためこの絵では、そうした戦争のもつ理不尽さが伝わるよう、人の表情をあえてあまりつけずに描くことを意識しました。

この絵を見る時には、そうした部分に着目し、改めて戦争の悲惨さについて考えてほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

被爆し、大火傷を負って死亡した父親を、私と兄で港近くの広場で火葬した様子です。薄暗い夕暮れにお棺を燃やす火が絶えないよう、火の守りをしました。私が木切れをくべる様子を描いてあります。

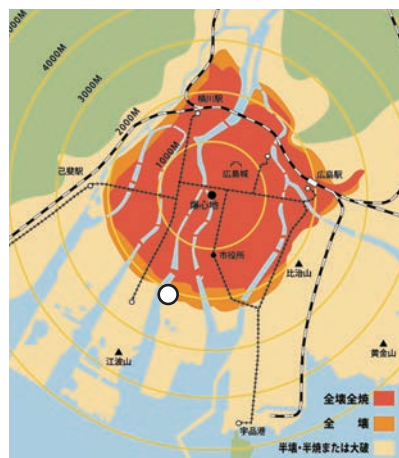
生徒さんは想像できない事ばかりで難しかったと思います。何度も修正し、何回も色を重ねて日数をかけて完成したのですね。ありがとうございました。

登校途中、アメリカ兵に出会った

被爆体験証言者 笠岡 貞江

74回生 田邊 萌奈美

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時私は女学校1年生でした。原爆で広島市内は焼野原になりましたが、私の家は爆心地から3.5kmの位置にあり火災を免れました。戦争が終わり、8月18日、友達から学校に行こうと誘われ、川沿いを歩いて一軒茶屋付近から渡し舟で対岸に到着しました。舟から降りたところでアメリカ兵に遭遇し、目が合うと手招きをされて怖かったので、友人と一緒に逃げました。

生徒のコメント

私は今回の制作を通して「終戦」という言葉について考えました。日本では8月15日が終戦記念日とされています。しかし、戦争は8月15日以降も人々の心を苦しめています。戦争で受けた傷は体だけでなく、心にも残り続けるものであり、終戦を迎えたら消えるというものではありません。この絵には目に見える傷や死体は描かれていませんが、戦争が終わってもなお心に残り続ける傷を負った方がいるということを、この絵を通して知ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

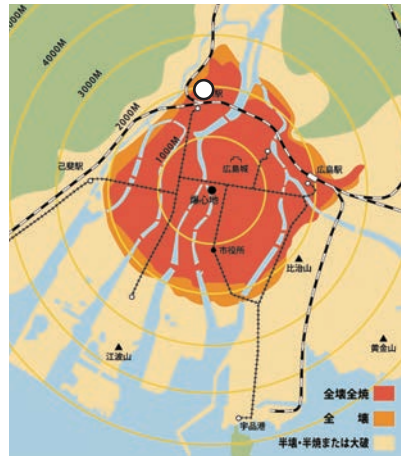
コロナ禍の影響で、直接出会って作品の進みを見るのが難しい時は、絵の写真をメールで送ってもらいました。描いてくださった生徒さんに様々な苦勞をおかけしました。ありがとうございました。

瓦礫の街

被爆体験証言者 梶本 淑子

61回生 長通 恵

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、崩れた建物から友人とともに脱出した場面。
原爆投下直後の広島風景はがらんとしていた。

生徒のコメント

今まで原爆については漠然としか知らなかったもので、梶本さんの体験を聞いて、当時の状況を詳しく知ることが出来ました。それは、想像していたよりももっと悲惨で、ひどい状況でした。

その様子を絵にするのはとても難しかったです。描いている最中はただただ必死だったのですが、描きあげて改めて自分の絵を見ると、自分が住んでいる広島がこんなにも破壊されていて、多くの人が亡くなったのだということが現実のこととは思えず、衝撃的でした。

自分の描いた絵は、真実とはまだ程遠いかもしれないけれど、何かを感じていただければ幸いです。

被爆体験証言者のコメント

高校生として大切な勉強の合間に制作してくださって、大変だったと思います。本当にありがとうございました。全く想像もつかない時代の体験をよく理解してくださって感性の鋭い人だと感心しました。

私の思い通り、体験した通りの風景(街の色、空の色、ひとの呆然とした姿)がそのままに描かれています。そしてあの時(工場から這い出た時)の、音も風の動きも重たかった時間(とき)が絵を見て思い出されました。この通りでした。

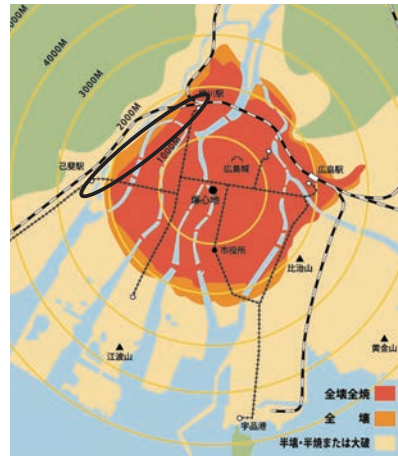
迫力のある立派な絵に感動しました。ありがとうございました。

再会

被爆体験証言者 梶本 淑子

61回生 三戸 奈津美

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆から三日が経ち、友人と一緒に自宅へ帰る途中、探しに来ていた父と再会した場面。

生きて戻ってくることができた実感と喜びを描いた。

生徒のコメント

被爆体験とは、直接被爆した人たちだけのものではなく、彼らと関わった広島全体が共有しているものなのだと思います。何が起こったのかも分からない現状の中、ただ自分の大切な人を案ずることしかできない人々は、自らが直接被爆していないとはいえ、その体験が心に深く刻み込まれたのだらうと、この絵を描く中で考えるようになりました。

また、そういった中で、自分の家族と無事に再会できたことは、とても奇跡的なことだったはずです。私は、この絵の抱き合う親子から、生きているという実感と喜びを、見る人にも感じてほしいと思います。そして自分自身の中にもそれらを見つけて欲しいです。それが平和への小さな一歩になるのではないかと、私は考えます。

被爆体験証言者のコメント

高校生として大切な勉強の合間に制作してくださって、大変だったと思います。本当にありがとうございました。生まれてもない時代の、ましてや人類の最悪の状態の描写をよくここまで描いてくださったことに感動しました。大きかった父親に抱かれたあの時の喜び、そして安堵感が絵にでていて、この絵を見るたびに父に会えるようで、嬉しい気持ちになります。

原爆投下から三日目の午後の町の風景、空の色、全くこの通りでした。迫力ある立派な絵をいただき、本当に感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

川

被爆体験証言者 梶本 淑子

63回生 上田 桃子

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、逃げる途中に見た、川に流されている人と岸によじ登ろうとする人のいる光景。

生徒のコメント

見たことのない光景を描くのは難しく大変でした。どのように描けば、梶本さんが証言活動でお話される時に、聞いている方々が原爆の恐ろしさや怖さを視覚から感じとることができるのかを考えながら取り組みました。あの時、「生きたい」「助けて」と上に手を伸ばした人々が大量いたことを多くの人に知ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

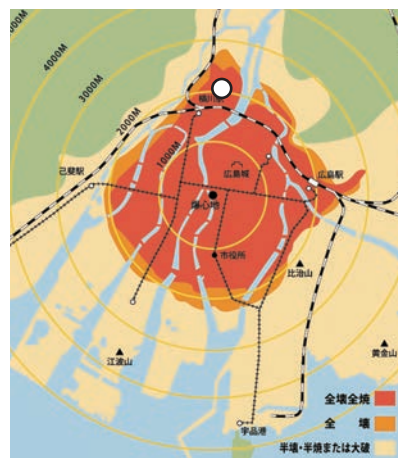
想像もつかない最悪な風景についての体験をよく聴き、理解して下さい、感性の鋭さに感心しています。川の色に苦労されたと思いますが、立派な絵ができました。ありがとうございました。

焼けた赤ん坊と母親

被爆体験証言者 梶本 淑子

62回生 平野 弘美

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆によって崩壊した町を、真っ黒に焦げた赤ん坊を涙しながら抱え、徘徊する母親。失った腕を抱えて歩く中学生。

梶本さんが見られた原爆投下の悲惨な状況を描いた。

生徒のコメント

理不尽に人が傷つき、殺される様を聞いたり、実際に描いたりするのは辛かった。特に黒焦げの赤ん坊を抱いた母親のことを聞いた時は胸が痛んだ。

罪のない命をたくさん奪った原爆による悲劇を二度と繰り返してはいけないと、改めて強く思った。

被爆体験証言者のコメント

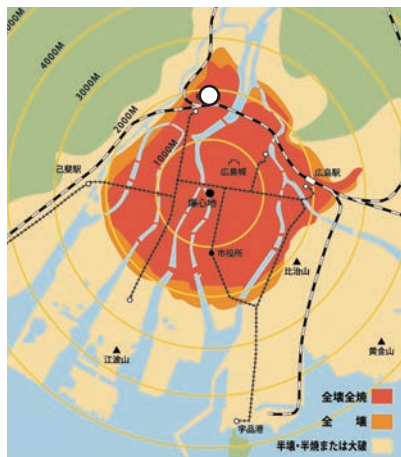
人間の最悪な凄まじい光景がよく描けていて、感動です。想像できない時代の想像できない光景が難しかったです。ありがとうございました。

這い出てみると

被爆体験証言者 梶本 淑子

62回生 松島 有希

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

生徒動員のため工場に向かっていた梶本さんは、その工場の中で被爆された。潰れた建物から必死で這い出ると、広島は街は一瞬にして瓦礫となり、友人は手足に重傷を負い苦しんでいた。

生徒のコメント

自分と同じくらいの年齢の頃、このような体験をして本当に辛かったらうなどと、描いているうちに改めて感じました。

このような体験をする人が二度と現れてはいけなくて強く感じるようになりました。

被爆体験証言者のコメント

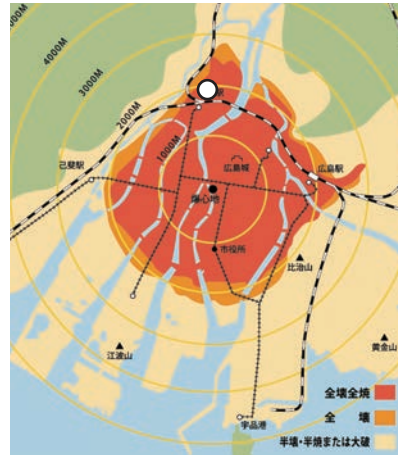
人類最悪の状態の光景をよく理解して下さって、迫力のある立派な絵に感動です。この通りの風景でした。思い出します。ありがとうございました。

建物の下敷きになった友達と私

被爆体験証言者 梶本 淑子

68回生 高橋 舞香

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆によって倒壊した建物の中から抜け出そうとしている場面です。足だけ見えているのが梶本さんの友達で、木材をどかそうとしているのが梶本さんです。

生徒のコメント

私は広島为学校に小中高と通ってきたので、当然のことながら被爆者の方々からの証言を聴かせて頂いたり、平和学習で原爆について学んだことはあります。しかし、どれも現実から遠いところで起きた「歴史の一事件」というくらいにしか感じていませんでした。

ですが、今回、梶本さんに一対一で証言していただき、また、被爆した後の生活について教えて頂いた上で、それを絵にしてみても、これは単に「歴史の一事件」にはいけないなと感じました。

そして、原爆の絵の活動をきっかけに、ささやかながらも原水爆の使用に対して抵抗していきたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

戦争、原爆を知らない時代の人に、地獄の様な情景を話しても理解できるだろうかと心配しましたが、何度か話し合っているうちに私の体験の場面が出来ました。感性のすばらしさに驚きです。

本当にこの通りの体験でした。あの時の恐ろしかった事が思い出され涙が出そうです。すばらしい画が出来たことと私の体験を伝承出来たことをうれしく思っています。

大芝公園へ負傷した友人を運ぶ

被爆体験証言者 梶本 淑子

68回生 出上 達也

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)

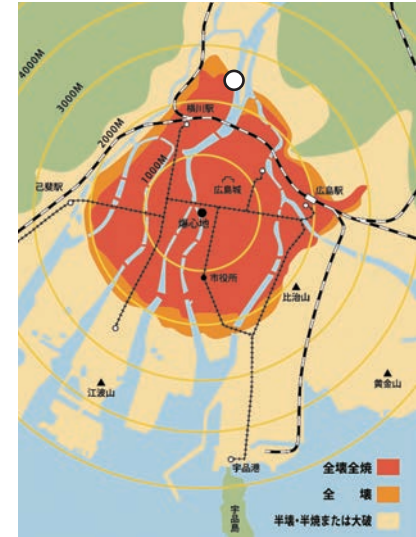


描いた場面

梶本さんが被爆した場所から友人と建物から這い出した後、友人と梶本さんを含めた4人で、負傷した友人を担架で運んでいるところ。

大芝公園には、生きてるか死んでいるか分からない被爆者が大勢おられました。

原爆が投下された後の昼ごろの天気は快晴で、公園の木々の葉も生い茂っていました。その中で、疲れ切っている4人は負傷した友人を助けようとしていたのです。



生徒のコメント

僕はこの絵を描くうえで証言者さんから話を聞いて描くとやはり、現実味があり、かなり詳しいところまでお話されるので、今まで気づけなかったことや初めて気づいたことが多かったです。この絵で苦労したことは、周りにいる被爆者たちです。一人一人のポーズを友達にってもらったりして描くことができました。僕は油絵が苦手だったのですが、苦手なりに一生懸命描いたので、僕と梶本さんの伝えたいメッセージと、原爆の悲惨さが伝わればよいなと思っています。

被爆体験証言者のコメント

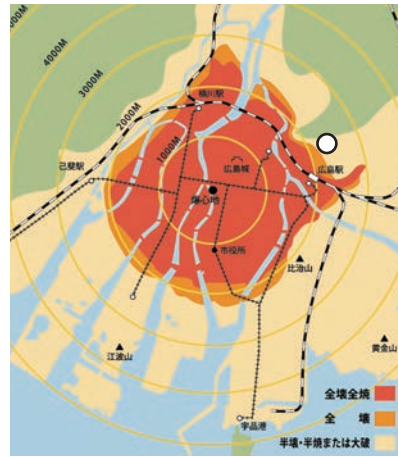
平和な世の中に生まれ育っておられる人に地獄の様な風景を話しても理解できるだろうかと心配しましたが、何度か話し合っていると、あの日の大芝公園が思い出され怖くなる画が出来て、感性の豊かさに驚いています。二度とこの様なことが起きないことを願っています。また、立派な画が出来てうれしいのと、私の体験を伝承出来たことを喜んでいます。

地獄と化した広島への街

被爆体験証言者 梶矢 文昭

74回生 住吉 美春

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日の夕方18時から19時頃、広島駅の北に広がっている東練兵場に多くの人が逃げて来ている場面。大きな炎に飲み込まれた広島からまだ、助けを求める人々が東練兵場に押し寄せてくる。辺りには負傷した人々があふれており、苦しみもがいている人、家族を探している人、放心状態で燃える街を呆然と眺めている人、倒れて動かなくなった人など様々である。

夕日に染まった空やこの場所からのシンボルである広島駅や中国新聞社、原爆ドームなどの建物が残っていたが、もはやこの猛火の中でその姿を捉えることは難しい状況だった。

生徒のコメント

最初は人物をこれほど目立たせて前に出すつもりはありませんでした。しかし、梶矢さんのお話を聞いているうちに、幼い頃の梶矢さんに、被爆した人々の姿は強烈なインパクトを与えたのだということを感じ、やはり人物にも焦点を当てるべきだと思い直しました。

私は、実際の火事や焼けた人を見たことがないので、それがどのような光景なのかイメージすることに苦労しました。自分もこの場に一人だと思って、炎に飲み込まれる広島を見てみてください。実際にこの絵のような光景を目にすることのない平和がこれからも続いてほしいです。

被爆体験証言者のコメント

8月6日も夕刻になって、炎上していた火の勢いも少し衰えを見せ始め、避難していた人々も山を下り始めた。私も、そこで出会った近所のおばさんと山を下り、東練兵場へと向かった。東練兵場とは当時広島駅北側に広がっていた兵たちの訓練場で、そこに被災者が逃げていた。うめく人の声、「水を、水をくれえ」という声が一面に広がっていた。

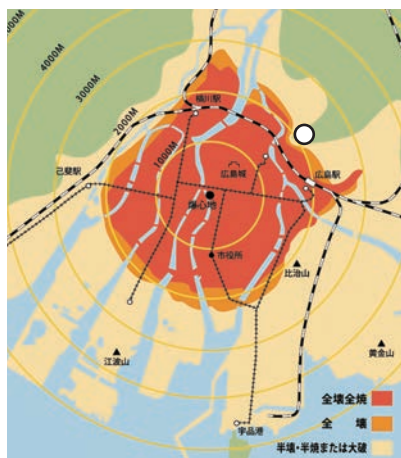
何とか動ける人は山すそ側に集まり、傷や火傷の痛みを耐えながら、まだ炎上し続けている市街や目の前の「まるで地獄のような状況」を呆然と見ていた。夕闇の迫る中、その様を実によく描き出してくれた。似島や原爆ドームなどを描き加えている着想にも感心している。

8月6日、炎上していく広島市の街

被爆体験証言者 梶矢 文昭

74回生 寺西 栞理

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日の昼頃、逃げた先の二葉山の中腹から見た場面。そこは逃げてきたたくさんの被災者であふれていた。防空壕に入りきれなかった人々は、防空壕の外側から広島市の街を見下ろしている。広島市の街は辺り一面が燃え、黒煙を巻き上げている。それはまるで「火の海」のようだった。

生徒のコメント

今回私が描いた防空壕は、これまでの原爆の絵の中でも珍しい構図だと思います。梶矢さんの被爆体験を伺い、そのお話を元に絵を描いていく作業はとても難しく、たくさんの資料を活用しながら一カ所ずつ丁寧に描きました。「煙はどれくらい昇っているのか」「人々はどのような様子で避難していたのか」など考えながら描くことを意識しました。当時の人々の様子を感じていただけたら幸いです。

この原爆の絵の取組みは、あと何年できるか分からないと聞きました。原爆の恐ろしさ、酷さを絵で伝えるという貴重な経験ができたこと、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

被爆体験証言者のコメント

二葉山の裏手に逃げていく被災者の流れに混じって懸命に逃げた。少し開けたところに着いたが、そこはもう被災者であふれていて、わずかな地面と山に掘られた防空壕があった。血を流している私を誰かが防空壕の中に連れていって治療をしてくれたが、ヨードチンキをペタペタと塗ってもらっただけだった。

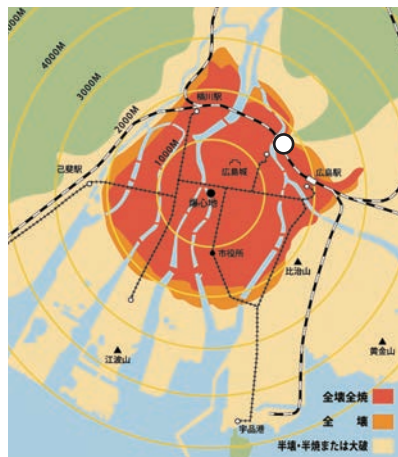
眼下に見える広島市の街は炎と黒煙の中にあった。その山での状況と、炎上していく街の様子を良く描いてくれている。山に逃れた被災者の様子について、真摯に追求してくれている。

白島河岸と被災者の流れ

被爆体験証言者 梶矢 文昭

73回生 吉田 向日葵

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日午前9時半頃、饒津神社前の避難者の列の様子。猿猴川には死者が流れ、川の向こう側の白島九軒町一帯が燃え始め、避難者が雪崩のように河川敷へと逃げています。饒津神社側を逃げる人々も、被災した我が身の痛みと苦しみの中で、山の方へ、戸坂や可部の方へと懸命に逃げていった。

生徒のコメント

原爆の絵を制作する中で、被爆体験の詳細を聞き、被爆後の悲しみや苦しみ、梶矢さんの想いに触れることができました。また、この絵では多くの避難者を描く必要があったため、その一人ひとりの動きや表情を表現することが大変でした。痛い時、苦しい時の表情や、それぞれの人の状況や心情を想像しながら描いていくことに苦労しました。

この経験を通して学んだことを次の世代に受け継いでいけたらと思います。

被爆体験証言者のコメント

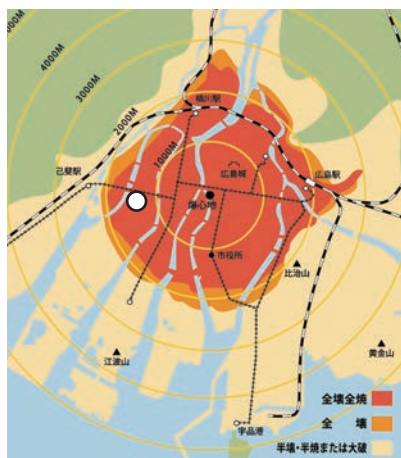
倒壊した家屋の下敷きになって、何とか抜け出した私は、目の前を長い長い列となって逃げている被災者の中に混じって懸命に逃げていった。饒津神社横の川に沿う道に出た時、道のそばの家から炎が噴き出してきた。対岸の川へ下る石段には、人が雪崩のようになって川原へと降りていた。川には何体も何体も浮き沈みしながら人が流れていた。私は怪我や火傷の被災者の中に混じって、逃げ遅れまい、と命がけでついて逃げた。吉田さんは回を重ねるごとに迫真性を増していった。炎を上げ始めた町、懸命に逃げていく人々。よく描いてくれた。

避難する家族と7歳の私

被爆体験証言者 川崎 宏明

70回生 三坂 日奈子

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

両側の家々は倒壊し、瓦やガラス片の飛び散っている道路を、市内西部の安全な場所を求めて、無我夢中で避難しました。場所は現 観音小学校(当時 広島二中) 近く。

生徒のコメント

川崎さんから初めてこの絵の場面についてのお話を聞いた時、本当にこのような恐ろしいことが広島で起こったのかと、想像するのが難しかったです。崩れた建物など、実際に見たことがないものを描くことも苦労しました。中でも、人々の表情を描くことに時間がかかりました。苦しみ、悲しみ、痛み、何が起こったのかさえも分からず、呆然とする気持ち。実際に自分がこの場所に居たらどう感じるのか、考えながら描きました。

証言者の川崎さんは、打ち合わせの度に優しく指摘をしてくださり、熱心に制作に関わってくださいました。絵のための資料もたくさん用意してくださり、本当に感謝しています。

この絵を通して、たくさんの人に、73年前、広島で何が起こったのか、知っていただけたら幸いです。

被爆体験証言者のコメント

三坂さんの求めに応じ、何度も放課後の基町高校4階の美術室に伺いました。(そこにはいつも何人かの生徒さんがキャンバスに向かっていました。)

三坂さんは口数は多くありませんが、鋭い質問をし、画いては消し、何度も修正してくれました。

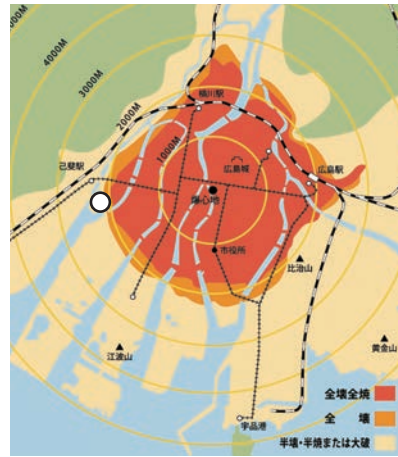
この絵が完成したのは、三坂さんの豊かな想像力と巧みな創造力に加え、先生方の適切なお指導の賜物と思っています。有難うございました。

避難する人と力尽きた人

被爆体験証言者 川崎 宏明

71回生 小野 美晴

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

杖をついた祖父、私の手を引く祖母、1歳の弟を背負い4歳の妹の手を引く母の六人が大勢の人に混じって避難しました。場所は現在の太田川放水路の川底にあたる荒地です。道の両側や荒地には大勢の人が力尽き、座り込んだり、横たわったりしています。横たわっている人の中には既に息絶えた人もたくさんいた筈です。荒地の一角に横たわっている一人の女性とその横に途方にくれている小さな男の子と女の子の姿が気になりました。三人はどうなったのでしょうか？

生徒のコメント

苦労したことは一人一人のストーリーを考えることです。考えるときに、まず自分の身近にいる人に例えました。もし祖母が…、母が…、姉が…、まだ小さいところが広島で原爆にあったとすれば…。考えれば考えるほどどうしようもない深い悲しみが胸がいっぱいになっていきました。多くの人々の未来は、たった一つの爆弾によって狂わされていったという事を改めて感じ、この悲しみを忘れたくないと思いました。

被爆体験証言者のコメント

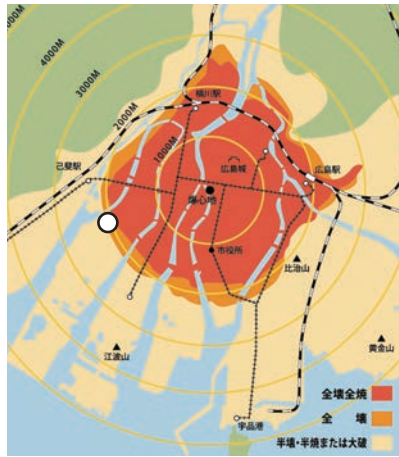
小野さんは当初、大勢の避難者を描くのに苦労した様子でした。しかしある時から積極的な動きが出始めました。それはキャンバス上の一人一人の人物に「生活上の、あるいは被爆時のストーリーを作り」「その人なら今、どんな行動を取るだろうか、どんな気持ちだろうか」を考え、それを絵にする方法を採用した為です。画面手前の母と幼い二人の子ども、その隣で横たわっている一人の女性…絵に魂が吹き込まれています。特に母と幼い二人の子どものうち、男の子がキリッとした眼差しで一点を見つめているのは核兵器に対する小野さんの無言の抗議なのかも知れません。小野さん有難う。

少しでも遠くへ

被爆体験証言者 川崎 宏明

72回生 丸川 裕世

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時小学一年生だった川崎さんは、自宅で原爆の被害に遭われました。この絵は、原爆投下後間もなくして西の山へと避難し始めた川崎さんとそのご家族が川土手から最初の橋(西大橋)へ到着した場面を描いています。そこでは、三方向からの人の流れが合流しており、どの方向から来た人も、服がぼろぼろになっていたり、血や火傷で皮膚が赤くなっていたりと、まるで原爆投下直後の広島の一種の縮図のように、その脅威を物語っています。

生徒のコメント

川崎さんと初めてお会いした際に言われていた「絵は万国共通の言語だと思ふ」という言葉に感銘を受けました。国内外の一人でも多くの人に川崎さんの記憶の中の映像を想像してもらえるように、当時の橋と似たつくりをしている橋を取材に行ったり、一人ひとりの人間の動きを撮影したりして、写真で確認しながら制作しました。

また、今までの川崎さんの証言によって描かれた場面の中間の場面を描かせていただいたので、先輩方の作品と並べて一つのお話として繋がるように、バランスにも気をつけました。

被爆体験証言者のコメント

世界中に猛威を振るうコロナ禍の中、丸川君が力作を完成させてくれました。ありがとう。彼と現地に行ったり、橋の構造を見たりしましたが、「感」の良さ、理解の早さに驚くと同時に大変助かりました。

絵は万国共通の言語です。この絵が世界中の人々に「核兵器の恐ろしさ」「戦争の悲しさ」を伝えてくれることを望みます。



炎上する 広島 の街

被爆体験証言者 川崎 宏明

74回生 三澤 仁実

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日午前11時頃、爆心地の西方およそ3kmの地点。6人の家族で避難した旭山神社境内から見下ろした広島 の街。右手の広島湾は今と変わらず波がキラキラと光り、鳥や動物たちが生き生きと生活していましたが、左手の市街地からは黒煙が立ち上っていました。この黒煙の中は、痛みや苦しみに満ちており、多くの人々がこの煙の下で苦しみながら亡くなりました。

生徒のコメント

原爆の絵を描く前まで、私は「原爆は昔の話だ」と、今とは切り離して考えていました。しかし、川崎さんと何度も会って話をしていくうちに、その考えは間違っていたのだと気が付きました。

私はこの絵を、原爆投下前の地図を元にして描きました。描いている最中、地図上に不思議に思った土地がありました。広島市内を横断するように、幅広く長い、空白の土地がありました。私は初め、それは印刷ミスかなと思い、ここに何があったのですかと川崎さんにお聞きしました。すると、その地図上の空白の土地は、広島市内が空襲を受けた時に火災が広がらないように、建物を予め壊しておく「建物疎開」をした跡なのだと言われてもらいました。

「建物疎開」の後には瓦や木材などの瓦礫が出るため、中学生がその後片付けをします。8月6日も建物疎開の片付けをしていた多くの子どもたちが、爆心地から800m以内の距離で被爆し、何千人も亡くなりました。その子どもたちが瓦礫を片付け整備した土地が、今の平和大通りです。

原爆が落とされた日に起こったことは決して昔のことではありません。私たちの日々の生活の下には、8月6日の夕ご飯に使うはずだったしゃもじや、夜寝る時に使うはずだった布団、それを使うはずだった多くの人達、そしてこの多くの人達が将来創っていくはずだった希望が眠っています。今、私たちが生きている時間は多くの人たちが流した涙によって守られています。

被爆体験証言者のコメント

原爆の絵の制作開始直後のある日の放課後、三澤さんと私は旭山神社に出かけました。しかし、眼下には高層ビルが立ち並び、広島湾はもちろん広島市街地も十分に確認できませんでした。そのため三澤さんは地図を参考に、広島湾の島々の位置や輪郭を確認し、被爆直前の広島市街地を描き込み、その上から黒煙を描き込むという、大変手間のかかる作業の後、やっと完成したのがこの絵です。

三澤さんの熱心さには頭が下がります。コロナ禍の中、黙々と絵筆を握って描いてくださって、本当にありがとうございます。また、ご指導いただいた橋本先生、福本先生にもお礼申し上げます。

死んだ我が子を背負う若いお母さん

被爆体験証言者 岸田 弘子

68回生 津村 果奈

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

避難の列の中に、若いお母さんがおられました。血まみれの顔で、誰が見ても既に死んでいる子どもを背負っているのです。「誰か、この子にママ(ご飯)を食べさせて…。水を飲ませてやって下さい」と一人ひとりにすがるので。

でも誰にもどうしてあげることもできません。自分のことを守ることで精一杯だったのです。

生徒のコメント

昨年描かせていただいた原爆の絵の中にも、母親と赤ちゃんのいる場面があり、その絵では「亡くなった母親にすがりつく赤ちゃん」を描きました。今回の絵では、それとは反対に「亡くなった赤ちゃんを連れた母親」を描かせていただきました。2枚の絵の親子はどちらも、一瞬にして起きた相手の死を受け入れることができない状態です。

この絵を描いて、何の罪もないたくさんの親子もまた原爆の犠牲になったということを改めて知り、深い絆で結ばれた仲を一瞬にして奪った原子爆弾への怒りを覚えました。もう二度と、このような悲しい光景を生んではならないと強く思います。

被爆体験証言者のコメント

この若いお母さんの声なき叫びが聞こえます。「目を覚ましてよ。起きてよ」と私の心が痛み続けています。二度とこのような苦しみは許してはなりません。

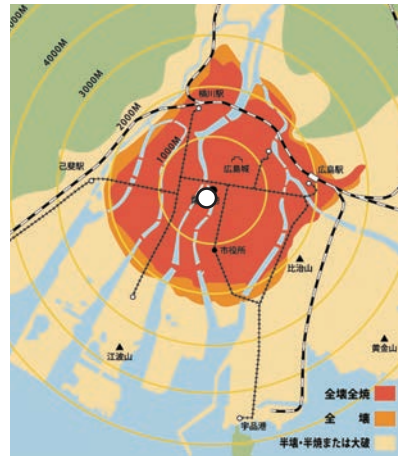
「原爆の絵」の作品を通して、生命の尊厳、真の平和とは何か?あらためて考える機会となりました。凄い作品にして頂き、誠にありがとうございました。

被爆後の原爆ドーム

被爆体験証言者 岸田 弘子

68回生 津村 果奈

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆の投下により、建物は一瞬にして破壊されました。中にいた人は全員即死といわれています。爆風がほとんど真上から働いたため、3階から1階まで床が抜け、壁の一部だけが残りました。一番上のドームの鉄枠の形からいつしか「原爆ドーム」と呼ばれるようになりました。

生徒のコメント

被爆直後の、一瞬にして変わり果てた原爆ドームを描くことで、核兵器の威力や恐ろしさを表現できるよう意識して描きました。

ほんの何秒かの中で、青空が暗く重苦しい空に変わり、美しい建物がこのように悲惨な姿になってしまったという事実を、被爆前の絵と比べて感じてほしいです。

被爆体験証言者のコメント

1945年8月6日朝8時15分の記憶を決して風化させてはなりません。一瞬にして人々の生活を一変させ、多くの人びとの苦しみを生んだ原爆被害。素晴らしい作品に感謝します。

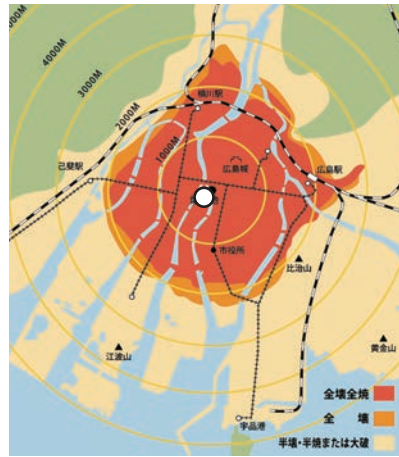
このドームが平和の大切さを訴え続けてくれることと思います。すべての子供たちに未来を築くため伝えてまいります。「原爆の絵」という作品を通しての出会いに感謝です。有難うございました。

被爆前の産業奨励館

被爆体験証言者 岸田 弘子

美術科教員 福本 弥生

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1915年(大正4年)8月「広島県物産陳列館」として開館し、物産の展示、即売、美術展覧会や博覧会などが行われていた。この建物は1933年(昭和8年)には「広島県産業奨励館」と改称され、戦時中は官公庁などの事務所として使用された。優雅な姿が広島を誇りとして存在していた。

制作者のコメント

現在は原爆ドームとして世界中の人々に知られているこの建物が、原爆投下前はとても美しい姿をしていたことはあまり知られていないように思います。今、平和公園になっている場所にも、たくさんの民家や商店が立ち並び、多くの人びとが生活を営んでいた場所でした。

そのような人たちの命や生活の全てを一発の原子爆弾が奪ってしまったということを私たちは忘れてはならないし、原爆のもたらす甚大な被害を知らない多くの人たちに伝えていかなければなりません。

この絵を描くことで、原爆被害の伝承の一端を担うことができ嬉しく思います。

被爆体験証言者のコメント

広島を誇りとして存在していた建物を再現して頂き、一層悲惨さと呼び起こします。

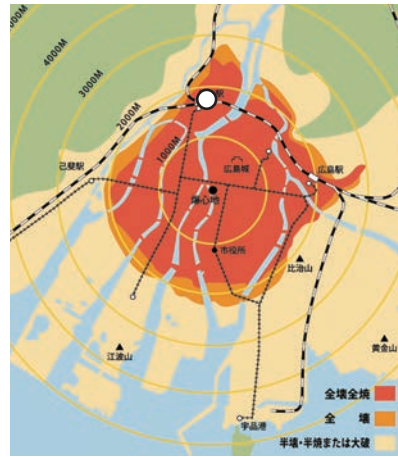
「絵」を通して記録が残され、命の尊さが世界中の人々の心に届くことを祈ります。「絵」が持つ力、「問いかける力」に感動です。

原爆投下後避難する行列

被爆体験証言者 岸田 弘子

美術科教員 宮本 朋子

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆後、倒壊した自宅から外に出たとき、通りには被爆者の流れがあった。「いつもの避難訓練とは違う、大変なことが起きたんだなあ」と思った。裂けた衣服や火傷した人、すべてが灰をかぶったように、皆、頭も顔も灰色、北へ北へと人の列は続いた。瓦礫の山を踏みながら、足はガラスが刺さっていても痛みを感じなかった。

制作者のコメント

制作当初は、家から出た時に被爆者たちの行列を目にした岸田さんの目線で描いていましたが、岸田さんから被爆当時の状況や避難した時の話を聞き、行列の中にお母さんと弟さんと一緒に避難する岸田さんの姿も描きました。

避難する人々を描くにあたって、被爆した状況が一人一人違い、怪我の具合や衣服のやぶれ、汚れなど、細部を設定して描くことがとても難しかったです。行列の中にいる人々にもそれまでの日々の生活があったことを想像して描き、絵を進めていく中で少しずつ具体化していきました。

この制作を通して、自身の想像を超える出来事を描くことの難しさを改めて感じました。

被爆体験証言者のコメント

原爆の悲惨さを伝える作品が見事に表現され、「ヒロシマの心」を継承し伝達する効果を大きくしてくれます。

あの日を境に、大切な人や、すべてのものを奪われ、自らも傷つき、人々はどのように生き抜いてきたのでしょうか。この絵と対話し、「平和の心」が世界へ届きますように祈ります。

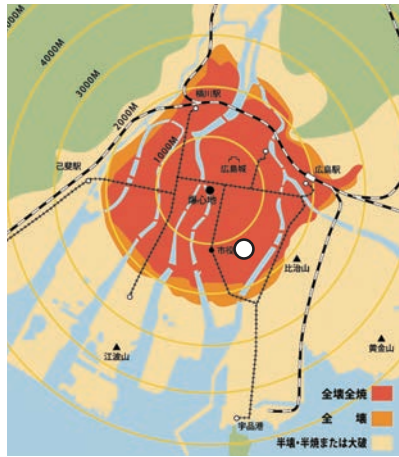
感謝の心でいっぱいです。有難うございました。

被爆

被爆体験証言者 北川 建次

60回生 加塩 紫莉

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後の竹屋小学校を描いた。空は真っ黒で、周囲の状況がまったく見えない中、火事による光でのみあたりが照らされていた。

生徒のコメント

崩れた木造の校舎というものを実際に見たことがなかったので想像しにくい場面だった。画面もほとんどが暗く、校舎の瓦礫の質感を表現するのがとても難しかった。

被爆体験証言者のコメント

実体験がなく想像の世界だけでよくこれだけの絵が描けたと感心している。目茶目茶に壊れた校舎の様相がよく表れている。細かな点では想像の世界なので、あの時の実態と合わない点もあるが、豊かな感性で被爆直後の恐ろしい様相をよく示していると思った。このあと、紅蓮の炎が襲いかかってきて何もかも焼き尽して廃墟になるのであるが、その直前の様子がよく表現されている。多くの友や先生を失った悲しい惨状の場面で、62年経った現在も涙があふれ出してきて止まることを知らない。

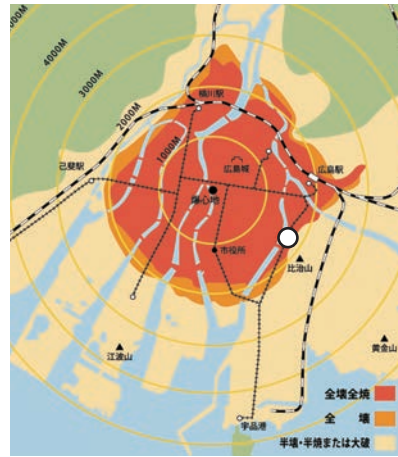


鶴見橋

被爆体験証言者 北川 建次

60回生 脇 孝子

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原子爆弾が投下されて数日後の画面を描いた。空も晴れていて川はとても澄んでいるが広島はなくなっていて、むなしさだけが残っている雰囲気である。鶴見橋の崩壊によって原爆の恐ろしさを表した。

生徒のコメント

北川さんのイメージに少しでも近づけるように考えながら描いていくことが大変だった。

資料も参考にしかないなかで、自分の頭に浮かんだことを表現していくことに苦心した。

被爆体験証言者のコメント

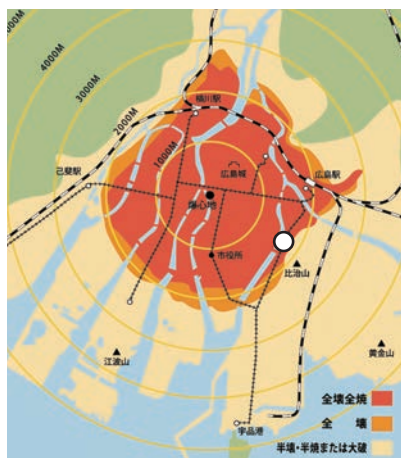
おびたしい人々を失った、見るだに悲しい広島市街の焼け跡であり、廃墟である。母と弟の遺骨のあった、友人や先生のおびたしい遺骨のあった涙のあふれる焼け跡である。原爆の爆風と引き潮で流された鶴見橋、多くの方が亡くなった向こう岸からこちらへ逃げた。まだ、青々とした柳が焼け焦げた悲しい広島を中心部をよくこれまで感性豊かな想像力で再生してくれたと感謝の念にたえない。空の青さと山の緑は昔のままに私たちを暖かく包んでくれ、「生きよ」と力を与えてくれる気がした。絵もまた若々しく未来に向かって羽ばたいている。

引き潮に吞まれゆく人々

被爆体験証言者 北川 建次

64回生 北岡 京子

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

柳の木は燃えて葉が落ち、橋は崩れ、川に死体や瓦礫が流れている。

生徒のコメント

鶴見橋も現在の橋とは違っているので、当時の橋がどうなっていたのか、資料を探したりするのが大変でしたが、現地へ行って現在の鶴見橋や柳の木を見に行くなどして描きました。

今までは被爆体験を聞いただけだった私が、今回は伝える側として役に立てて良かったと思います。

被爆体験証言者のコメント

いつもしみを取ったり、泳いだりして遊んだ懐かしい京橋川が見るも無残な恐ろしい川に変わり果て、悲しい川となった。木造の鶴見橋も爆風で川の中へ落ち、ほこりまみれで死体や家屋の残骸があちこち散乱していた中を泳いで渡った。

今も残る被爆柳が枝葉を引き裂かれ、青々としていたのが心に残る。このあと引き潮になり、更に恐ろしい光景が展開された。おびたしい死体や家屋の残骸が上流から流れてきて、まだ生きている人も巻き込んで阿鼻叫喚の地獄の川となった。

変わり果てた広島の繁華街、新天地

被爆体験証言者 北川 建次

64回生 山中 亜美

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

北川さんが竹屋小学校から自宅(現在の新天地)へ帰ろうとしたとき、火が燃えているのを見て呆然と立ち尽くしているところ。

生徒のコメント

実際に見たことのないものばかりで、多くの資料を参考にしました。特に瓦礫が散乱しているところや火を描くのは大変でした。また、火が燃えているところは明るくなり、他は暗くなっていたということ表現するのも難しかったです。

被爆者の方のお話を聞いてそれを絵にするという貴重な体験をして、改めて平和であることの大切さ、原爆の恐ろしさなどを知ることができました。また、今まで平和学習などでお話を聞いたことはありましたが、一対一でお話を聞くことができてよかったです。

このような戦争が起こらないように、この世界が笑顔であふれるように、平和活動をしていきたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

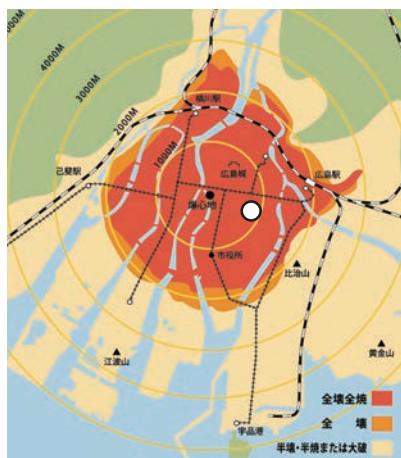
爆心から外へ外へと逃げる人と反対に、我が家はより危険な爆心地の方向にあった。行けども行けども真っ暗でおびたしいけが人ややけどの人々、壊れた家屋。我が家の方角は既に火の手に包まれ、広島一の歓楽街であった八丁堀・新天地の大きな建物が次々と炎に包まれ、火が私の方に迫ってきた。我が家はどうなったか行くすべもなかった。

新天地の惨状

被爆体験証言者 北川 建次

66回生 神垣 優香

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

北川さんが竹屋小学校から自宅へ戻ろうとしたところ。当時の新天地は広島一の繁華街で、多くの劇場やお店が立ち並んでいました。左奥に見えるのが新天座で、右奥が花月劇場です。原爆によって建物は瓦礫と化し、一面が火の海になりました。そのため北川さんは、炎から逃れるほかありませんでした。

生徒のコメント

見たことがないものを描くということは、予想以上に困難なことでした。それを描くために多くの資料を参考にしましたが、それを集めることにも苦労しました。炎や瓦礫などは私たちの日常とはかけ離れており、それらが描けないことで悩むことがあると、平和な日常と当時の悲惨な様子の間にある大きな壁を感じました。

いずれ、戦争を知らない世代が世界を動かしていくかもしれません。その時、戦争の恐ろしさを知らないのに、戦争に対して肯定的になることは避けるべきだし、何より悲しいことだと思います。そのような未来にしないためにも、私たち若い世代が平和について深く関心を持たなければならないと痛感しました。

私が制作した絵が、北川さんの証言活動の力になれば嬉しいです。またその証言活動を通して、世界が少しでも平和に近づけたらと切望します。

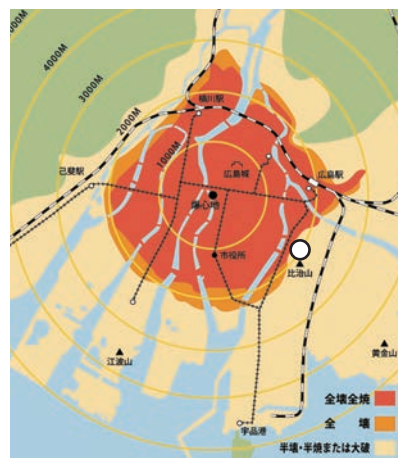


被爆楠と比治山に逃げ込む人々

被爆体験証言者 北川 建次

67回生 中川 佳乃子

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、北川さんが比治山に逃げていく時に見た光景。



生徒のコメント

先入観や主観に固執せず、北川さんの見た光景をありのままに描こうと思いましたが、戦争が生み出した恐ろしい惨状を想像して描くことは難しかったです。

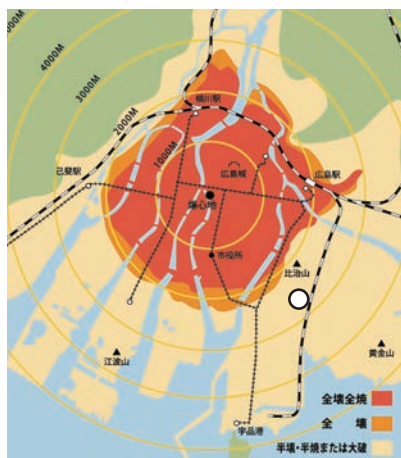
被爆者の方のお話を元に絵を描いたことは、一生のうちで忘れられない貴重な体験となりました。平和とは、一体どういうことなのかを、改めて考えさせられました。

被爆した負傷者が逃げ込んだ 旧陸軍被服支廠の倉庫

被爆体験証言者 切明 千枝子

73回生 岡田 友梨

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後、旧陸軍被服支廠が臨時救護所となり、多くの負傷者が收容されていた様子。地元の学生や被爆を逃れた兵隊たちが負傷者を運んでいた。建物の前では亡くなった人々が焼かれ、遺体の焦げる臭いが立ち込めていた。

生徒のコメント

この絵を描かせていただく前は旧陸軍被服支廠についてほとんど知らなかったため、今回の制作の中で初めて知ることが多かったです。実際に近くでこの建物を観察すると、その大きさや存在感に驚きました。様々な角度からスケッチしてみましたが、その複雑な構造を理解することや、その大きさをどのように表現するかということが難しかったです。また、その凄惨な様子を、快晴の明るい青空の下でどう表現しようかと苦労しました。

被爆体験証言者のコメント

1945年8月6日、広島は一発の原爆によって火の海になり、多くの方々が無惨な死を遂げました。あの日、被爆して火傷や傷を負った市民たちが逃げ込んだのが、当時の陸軍被服支廠の赤レンガ倉庫でした。その時の惨状は、写真が残されているわけではありません。そこにいた私たちが記憶しているのみです。それを今、生徒さんたちが絵として残して下さいになり、ありがたく思っています。闇から闇へ消してしまってはならない事実を絵にしてくださって感謝しています。

全身火傷で学校へ戻ってくる下級生たち

被爆体験証言者 切明 千枝子

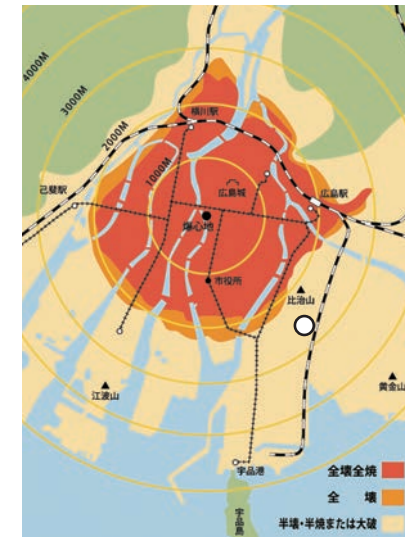
73回生 岡田 友梨

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日原爆投下直後に、被爆した比治山橋東詰から女子専門学校に戻った切明さんは、学校の中で割れた窓ガラスなどを片付ける作業をしていました。昼近くになって、建物疎開の後片付けのために広島市中心部で被爆した下級生たちが帰ってきました。彼女たちは、誰か判別ができないほどに顔が腫れあがり、髪の毛がチリチリに焼けていました。皮膚が剥け、手の指や足首からは真っ黒になった皮膚を引きずっていました。



生徒のコメント

全身火傷を負った下級生たちの皮膚の様子はもちろん、その苦しさや悲しさ、羞恥心などがごちゃ混ぜになって混乱した心情を、どのような表情で表現しようかと悩みました。その下級生たちや、彼女たちの様子を見た切明さんを含む生徒たちの気持ちはどれほどのものだったのだろうと考えると、胸が苦しくなります。

被爆体験証言者のコメント

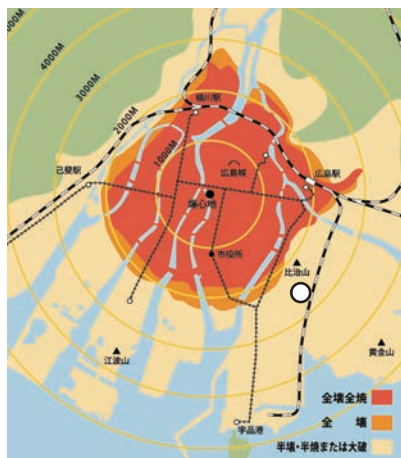
1945年8月6日、広島は一発の原爆によって火の海になり、多くの方が無惨な死を遂げました。その時の惨状は、写真が残されているわけではありません。そこにいた私たちが記憶しているのみです。それを今、生徒さんたちが絵として残して下さることになり、ありがたく思っています。闇から闇へ消してしまってはならない事実を絵にしてくださって感謝しています。

物理化学室で被爆女生徒を手当てする様子

被爆体験証言者 切明 千枝子

73回生 西岡 優

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された8月6日に、女子専門高等学校の物理化学教室にて、建物疎開作業中に被爆した女学生を物理化学教室の机の上に寝かせ、薬や新しい油が貴重なために手に入らなかったため、使い古しの油を生徒たちの体に塗っている様子。

生徒のコメント

原爆の絵を制作するに当たって、実際に見たことも体験したこともないことを描くのは初めてで、本当に上手くいくのか不安でたまりませんでした。描いている中で、原爆の悲惨さを改めて痛感し、この絵を描くことによって、今後この絵を見る人たちに当時の惨状を知っていただき、平和の大切さを訴えることができればいいなと思います。

被爆体験証言者のコメント

私の母校、県立広島第二高等女学校の下級生が建物疎開の後片付けに動員されて、広島市役所の裏の街で被爆。全身大火傷で、何人かは宇品町の学校へ戻って来ましたが、物理化学実験室の机をベッドにして、そこに寝かせて介護をしましたが、苦しみ、もがきながら全員亡くなりました。

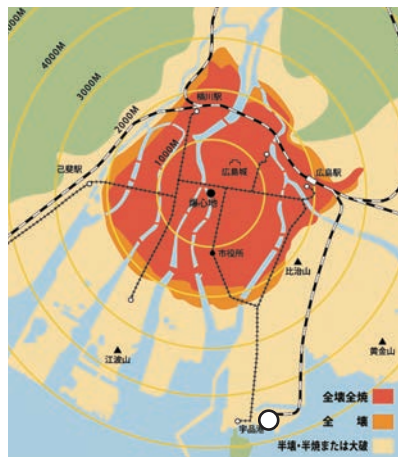


出征兵士の見送りと別れ

被爆体験証言者 切明 千枝子

73回生 原田 華

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1937年(昭和12年)当時小学2年生だった切明さんは、日中戦争のため出征する兵士たちを宇品港(現:広島港)へ、手作りの国旗を持って見送りに行った。人ごみの中、兵士を見送っていた切明さんは、突然誰かに頭を触られた。驚いて顔を上げると、目の前に軍服を来た叔父がいた。その後、叔父と会うことは二度となかった。

生徒のコメント

多くの人を画面の中に収めること、一人ひとりの人物の表情を描くことが大変だった。切明さんの叔父さんはあの一瞬の間に一生分の愛情を切明さんに注いだのだらうと思いながら描いた。

被爆体験証言者のコメント

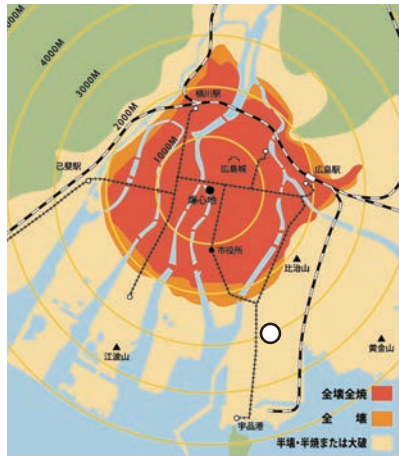
1937年7月7日、日本と、当時支那と呼んでいた中国との戦争が始まり、広島宇品港から多くの兵士が中国大陸の戦場に出征してゆきました。私の叔父もその一人でした。たまたま宇品港へ出征兵士を見送りに行った時、叔父がその隊列の中において、私を見つけて頭をなでてくれたのです。忘れ難い思い出です。叔父は帰っては来ませんでした。

お母ちゃんを探して!

被爆体験証言者 切明 千枝子

75回生 福本 悠那

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下から一週間後、陸軍共済病院へ収容された叔父さんを探しに行った時、一人の幼女がもんぺの裾を掴んで「お母ちゃんを探して!」と頼んできました。その女の子は名前も知らない子どもで、叔父さんを探さなければと焦っていた切明さんは、「お母ちゃんを見たら、あなたがここにいると言ってあげるから離して」と嘘をつきました。それでようやく手を離してくれました。次の日に気になって、またそこへ行きましたが、その子はいませんでした。

生徒のコメント

見たことのない風景を、証言者さんのお話や資料を元に描くのはとても大変でした。生きているのか亡くなっているのか分からないような姿の人たちに囲まれ、「お母ちゃんを探して」と必死に訴える幼女と、焦る切明さんの表情を描くのが、とても難しかったのですが、最終的にはこの絵を見た方に伝わるような絵になったのではないかと思います。

被爆体験証言者のコメント

スマホも無い当時、カメラはあっても報道関係者以外はフィルムが入手できない時代でしたので、私の記憶だけによって、生徒さんに制作していただきました。私の思いや願いのこもった素晴らしい作品にして頂きありがたく思っています。被爆して亡くなった人への供養にもなると感謝の気持ちでいっぱいでございます。

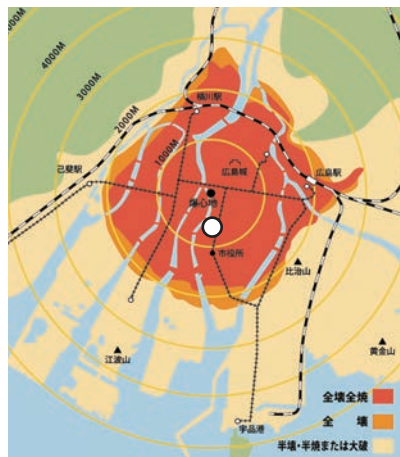


つまずいたのは炭化した幼児だった

被爆体験証言者 切明 千枝子

74回生 山口 伶

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

はっきりした日時は覚えていませんが、原爆が投下された1か月後ぐらいだったと思います。焼け跡に転がっていた、たくさんの被爆者のご遺体も片付けられて、瓦礫だけが残っている状態でした。場所も町名は不明ですが、現在の大手町が鷹野橋電停付近です。炭化した幼児は瓦礫の一部だと思われて片付けられなかったのでしょう。

生徒のコメント

「炭化した幼児」と聞いた時、まず「人が炭になる」ということを信じるのが難しく、戦時中の悲惨な状況を新しい形で知ることになりました。切明さんと打ち合わせを重ねる中で、炭化した幼児の姿が少しずつ鮮明にイメージできるようになり、その幼児に出会った切明さんの合掌する背中が語るもの悲しさを表現できるように描いてゆきました。

被爆体験証言者のコメント

スマホも無い当時、カメラはあっても報道関係者以外はフィルムが入手できない時代でしたので、私の記憶だけによって生徒さんに制作していただきました。私の思いや願いのこもった素晴らしい作品にして頂きありがたく思っています。被爆して亡くなった人への供養にもなったと感謝の気持ちでいっぱいでございます。

8月6日の空

被爆体験証言者 國重 昌弘

64回生 坂本 茜

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時14歳だった國重さんが練兵場で被爆された時の様子。原子爆弾が炸裂して、青い夏の空に、白く巨大なきのこ雲が現れたところ。



生徒のコメント

見たことや体験したことのない風景を想像しながら描くことは大変でしたが、油絵ならではの雲の色の鮮やかさや迫力を少しでも出すことができてよかったです。國重さんが実際にご覧になった空に近づけていけばいいと思います。

この絵を制作したことで、原爆というものがもたらした被爆者の方々への辛さや悲しみの大きさを改めて感じました。

被爆体験証言者のコメント

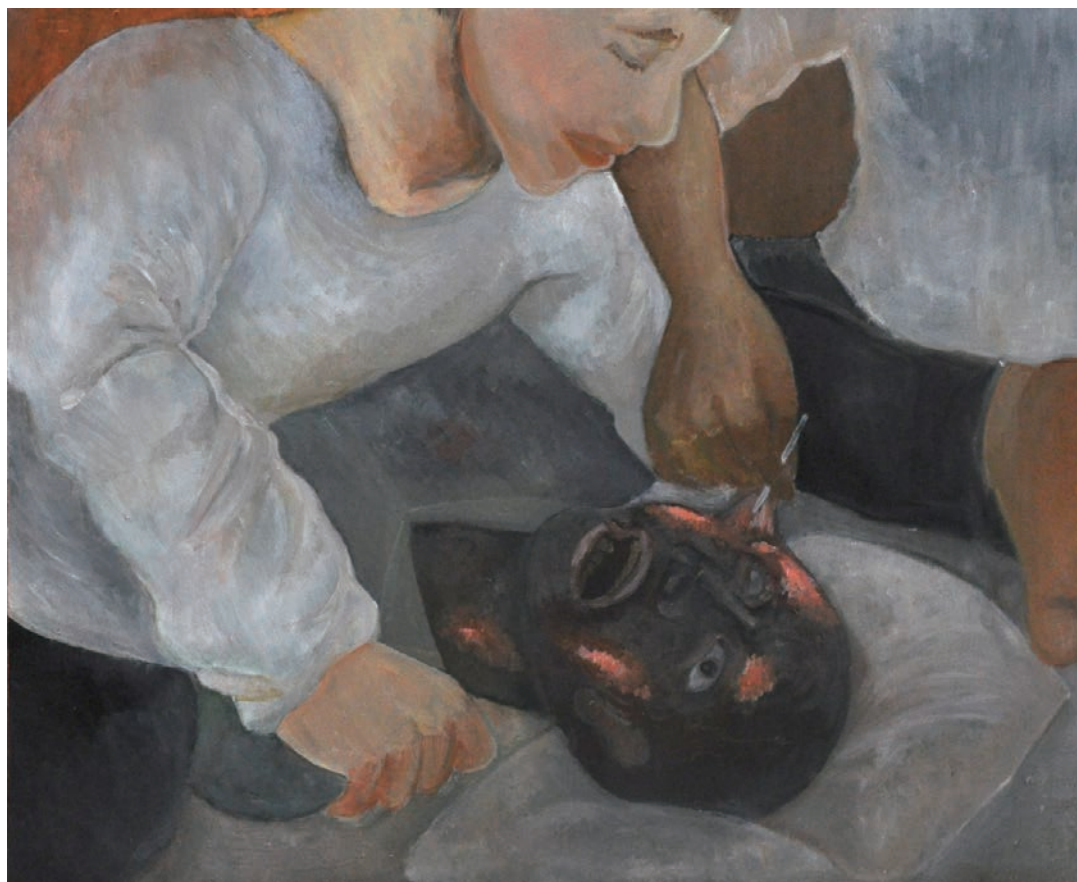
顔と左腕を焼かれて、言葉にならないほどの痛さに襲われたにもかかわらず、その原子雲に一瞬にして目を奪われた。雲が消えた後、真夏の太陽に照らされて、焼かれた顔と左腕の痛みは何倍にもなった。近くにあった倒壊した家の日陰に走り込み、じりじりと照りつける太陽から逃れた。

叫び、苦痛、そして怒り

被爆体験証言者 國重 昌弘

63回生 野邑 遥香

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆で火傷を負い、命からがらに帰宅した國重さんが母親に押さえつけられ、ケロイドになるのを防ぐために火傷した皮膚を父親にピンセットで剥いてもらうところ。

生徒のコメント

國重さんだけがその目で見て、感じた苦痛を証言からイメージし、絵に描き起こすのにとっても苦労しました。

この絵を描いて、私たちの世代が体験したことのない「戦争」というものがより具体化できたと思います。

被爆体験証言者のコメント

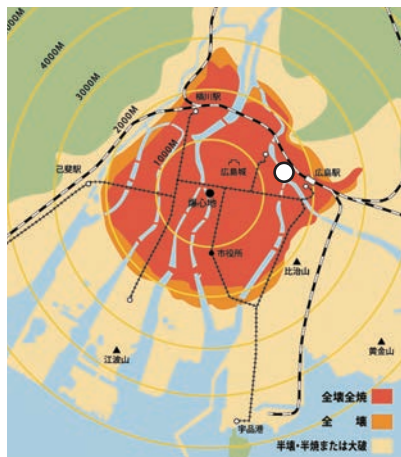
下絵が仕上がったのを見て、思わず顔をそむけた。私がお願いして絵にしていたのに、私自身がその絵をじっと見るできない仕上がりになっていました。あの痛さが今でもよみがえってきます。

枕木の火

被爆体験証言者 國重 昌弘

64回生 三島 悠希

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

國重さんは広島駅の近くにある東練兵場で被爆されました。そこから廿日市にある自宅に向かう途中で鉄橋を渡った際に、線路の枕木の端が一本ずつ燃えていた様子。

生徒のコメント

原爆が落とされたことにより、線路におかれた枕木の一本一本の端が燃えていたと聞いて、どのように燃えていたのかということがなかなか想像できなくて少し苦労しました。

本来、このように枕木が燃えることはありません。広島市内では他にも物の一部分だけが燃えた地域もあったそうですが、ここまできれいに一本一本に火がついたのも、それだけ原爆の熱線が強かったからなのだろうと思います。

原爆はこのように奇妙な現象を起こしました。また、その後も人々に様々な影響を与えることになったと考えると悲しくなりました。一人でも多くの方に、原爆とはどのようなものなのかということを知ってほしいと思いました。

被爆体験証言者のコメント

向こう岸へ渡りたいが近くに橋がない。この鉄橋を渡るしか方法がないのだが、鉄橋は燃えている。一刻も早く家に帰りたい一心で、煙の渦巻く中を急いで渡った。

重症者を運ぶトラック

被爆体験証言者 國重 昌弘

67回生 宇都宮 未来

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

大火傷を負いながら自宅に帰ろうと歩いていた。そこに救護トラックが一台。乗せてくれと頼んだが、「お前の火傷ほどでは乗せられない」と断られてしまった。しかし、走り出したトラックに無理矢理飛び乗った。

右のおばあさんに「ちょっと寄ってください」と言った。「イタイ、イタイ、イタイ」見ると、おばあさんのひざが割れている。

左のおじいさんに「ちょっと寄ってください」と言った。「イタイ、イタイ、イタイ」見ると、おじいさんの頭が割れている。

トラックが揺れるたび、うめく人々。私は体を小さくしてじっと耐えていた。

生徒のコメント

國重さんの記憶や感情を、一度自分を通してキャンパスに描いていくことは、大変難しく、責任が重いものだと思います。実際に経験したことのないものを想像して描いていくことは初めてで、その中で初めて原爆の恐ろしさを身近に感じることができました。

この絵を描くことで、國重さんや、その被爆体験を語り継ぐ伝承者の方々のお手伝いできれば良いと思い制作しました。この絵が戦争、原爆の愚かさ、非道さを伝えることができたら良いと思います。自分のできることで、原爆を伝えてゆくことが大切なことなのだと思います。

被爆体験証言者のコメント

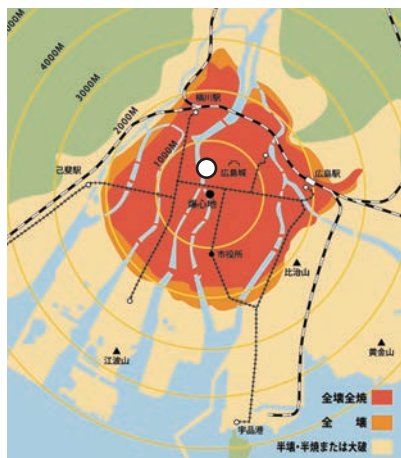
第一に、宇都宮さんに、このような楽しさのない、厳しい絵をお願いしたことを申し訳なく思っています。しかしこの絵が、何万人、何十万人の人に核兵器の厳しさ、恐ろしさを訴えることができる一助になると考えていただき、ご理解いただきたいと思います。

爆風で下敷きになり焼かれた軍人の骸骨 (広島第一陸軍病院第一分院内)

被爆体験証言者 國分 良徳

67回生 竹本 茜

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月10日、叔母に頼まれて爆心地から近い彼女の家の様子を見に行く途中、広島第一陸軍病院の傍を通った。すると、原爆が落ちたことも知らないまま病室で被爆し、骸骨となってベッドに横たわる将校たちがいた。

生徒のコメント

今まで原爆について様々な話を聞いてきたが、まさか骸骨の姿で死んでいる人たちがいたとは知らなかった。皮膚がむけてドロドロになり、出血で真っ赤になった人の話はよく聞かすが、今回、國分さんの話を聞いて、骸骨の白という骨の色が印象深く感じられた。また、制作を通してあらためて命の尊さを知ることができ、今、普通に暮らしていることの有り難さを感じることができた。

被爆体験証言者のコメント

8月10日、西練兵場を横切り、陸軍病院第一分院の東南の角にさしかかった時、焼け焦げたベッドの上で骸骨が並んでいた事が目に焼きついて、今も忘れられません。

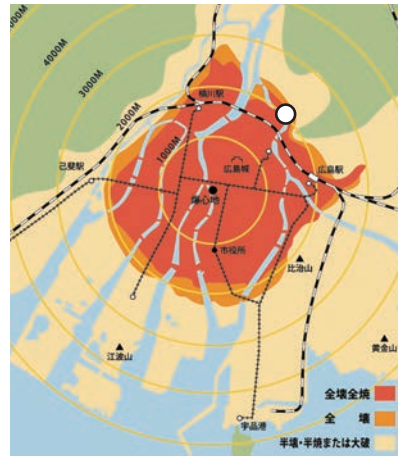


被爆して避難した河原での出来事

被爆体験証言者 國分 良徳

67回生 棚田 優希

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後、避難した河原の様子。第十一連隊歩兵隊が避難してきており、東練兵場に避難しようとしていたが、橋が燃えていたため河原に来ていた。元衛生兵の父親が、持って逃げていたヤカンの水を兵隊たちに飲ませていた。対岸では神社や食料配給所が燃えていた。

顔に包帯を巻いている将校は、地面に軍刀を突いて立ち上がっており、当番兵がしきりに「上官殿、座ってください」と頼むのを「俺はこれでいいのだ」と聞き入れなかった。

生徒のコメント

当然のことながら、黒焦げの人間を見たことがないので、「リアル」に描くのに苦労しました。

トラウマの追体験という意味で、見た人が心の底から「怖い」「気持ち悪い」「もう見たくない」と思うような絵を描くことに努めました。同時に、目をそらしたくてもそれが現実であったことを知ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

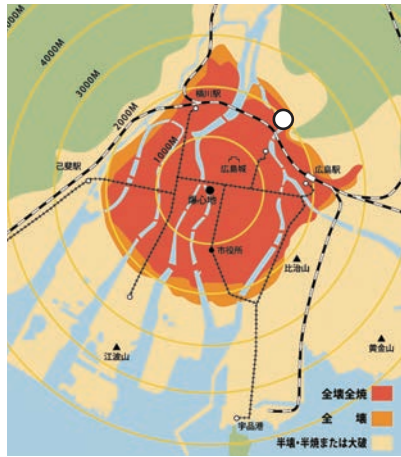
被爆した寺で、即死して外に出せなかった母と妹、弟を残して避難して来た河原で、持って逃げたヤカンの水を、父と私で兵隊たちに飲ませている姿が良く画かれている。

お寺を襲った炎の竜巻

被爆体験証言者 國分 良徳

69回生 今村 遥香

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

河原の土手から國分さんとお父さんがお寺の方を見ると、寺も神社も、イチョウ、クスノキ等の森が一体になり、火災が竜巻になり、天に吸い込まれている様子を絵にしました。二人はその後、河原に戻って、寝転んで休んでいました。

生徒のコメント

「炎の竜巻」が難しかったです。観たこともないものを「描く」というより、「雰囲気」作りが一番大変でした。資料を探してもピンとくるものがなく、國分さんが見た様な情景にするのに、すごく時間がかかりました。原爆の悲惨さを絵で表現するのに、どれだけの知識と技術が必要か、改めて考えさせられました。

また、この炎の中に、國分さんの家族がいる、と考えたら、何とも言えない気分で、この絵で戦争のむごさを伝えたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

一年生の時から、画に取り組んでもらって、大変だったと思います。



4人が座り酒を飲んでいた石段

被爆体験証言者 國分 良徳

73回生 川崎 あすか

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月8日の夕方、原爆で奥さんを亡くした近所の人
が、酒造店の焼け跡の酒樽から汲んできた酒を父
と近所の人に「飲みましょう」と勧めた。4人は神社
の石段に座り飲み始めたが、父ともう1人は少し
飲んで味の違和感に気づき飲まなかった。酒が
好きな残りの2人は美味しいと飲んでしたが、夜中
に下痢が止まらなくなり、翌9日、臨時救護所に収容
され、2人ともその日のうちに亡くなってしまった。
後から考えると、放射能を含んだ黒い雨が酒樽の
中へ降り込んだのだと思った。酒を持ってきた人
には3人の子どもがいたが、両親とも亡くなったので
子どもたちが可哀想だった。



生徒のコメント

この絵は、私がイメージしていた「原爆の絵」とは違い、一見、ただ酒を酌み交わしているだけの場面のように見えます。しかし、この絵の本当の怖さや恐ろしさは、この後に起こる出来事を知って初めて分かります。死と隣り合わせだった國分さんや、國分さんのお父さんの状況や、亡くなった方それぞれの心情を想像すると、胸が痛みます。

この作品が、絵を見た人が原爆の本当の恐ろしさや新たな一面に気づききっかけとなれば嬉しいです。私自身も、原爆の絵の制作を通して学び、考えたことを、胸にとどめて生きていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

夕方、近所の人が、近くの酒造店の焼け跡の酒樽から汲んできた酒を、父や近所の人に「飲みましょう、飲みましょう」と勧めましたが、父は飲みませんでした。飲んだ2人は、翌9日、救護所に収容されましたが死亡しました。

両手に瓶を持ち帰りながら見た原爆ドーム

被爆体験証言者 國分 良徳

73回生 河崎 奏斗

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月10日、國分さんが叔母から、被爆死した母や叔母の生まれた家がどうなっているか確認してくれるように頼まれて、そこへ行った。その途中、2本のサイダー瓶を拾い、その後原爆ドームを見上げた時の姿。



生徒のコメント

原爆の絵を制作したことで、戦争や原爆の悲惨さや恐ろしさをあらためて知りました。自分の絵が、國分さんが実際に見られた風景を正確に再現できているかは分からないけれど、國分さんの証言活動の役に立てれば良いなと思います。

被爆体験証言者のコメント

家の瓶は、原爆により壊れたり溶けたりして無くなっていましたので、食堂の空き地にあった木箱のケースの中に空のサイダー瓶があったので、容器にするため2本持って帰りました。

爆風で崩れ落ちた広島城天守閣

被爆体験証言者 國分 良徳

72回生 河本 羽菜日

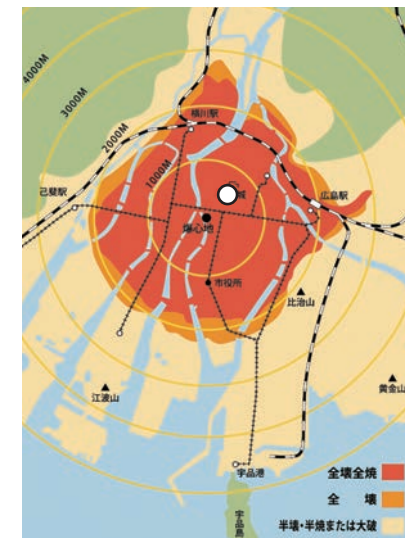
平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後、國分さんが広島城を現在の県庁側から見ている様子。

広島城の天守閣は崩れ、周りの建物や木々は焼けてしまい、辺りが見渡せる。



生徒のコメント

最初、構図を決める時に、どの位置から広島城を見ているかが分かっているけど、同じ位置から見ても今は木々が生い茂っていて、当時建物が崩れていた様子が想像しにくかった。

当時の資料を探すのもかなり大変で、何枚もの写真資料を照らし合わせて当時の情景を描いた。当時の被害の大きさがよく分かる場面だと、描いていて感じた。

被爆体験証言者のコメント

広島城では、小学校1年生くらいから、お城の堀の蓮の花を取ったり、トンボを捕まえたりしました。父と天守閣に登った時、「兵隊が帽子を飛ばし、怪我はしなかったが屋根から下まで落ちたことがあったので、用心せよ」と言われたことがあった。

黒焦げの焼死体が寄りかかっていた石灯籠

被爆体験証言者 國分 良徳

73回生 吉川 春音

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月8日の午後、寺の横にあった神社の石灯籠に寄りかかっていた黒焦げ焼死体。近所の人は、花屋をしていた人に体形が似ていると話していたが、死体処理の兵士が運んでいった。



生徒のコメント

自分が見たことのない光景を描くのはとても難しく、大変でした。

また、この絵の制作を通して、原子爆弾の恐ろしさとあらためて知り、戦争は二度とあってはならない事だとあらためて思いました。

被爆体験証言者のコメント

碓神社の石灯籠の前の桜の木は、蝉を捕ったり、花見をしたり、木登りをしたり、長い付き合いの木でした。この木の下で石灯籠を背に寄りかかった焼死体がありました。近くで花屋をしていた男の人に体形が似ていると話していました。

「無念残念」と軍刀を握っていた将校

被爆体験証言者 國分 良徳

73回生 大槻 拓真

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日原爆投下後(午前8時15分)の約20分ほど後、二葉山と饒津神社を望む太田川の河原。

兵隊さんが朝の体操をしていた時に原爆が投下され、その後続々と全身に火傷を負った人が数多く集まり倒れ伏していく中、将校さんが日本刀を突いて立ち続けた場面。

体操の際、部下の兵士も含め上半身裸だったため、半身に大火傷を負っているのにも関わらず、部下の「上官殿、座ってください。座ってください。」という呼びかけに「俺はこれでいいのだ!」と言い張った。部隊の上に立つ者としての意地と責任を帯びたその行動に國分さんは感動を覚えたという。



生徒のコメント

将校さんの威厳ある立ち居振る舞いを表現するのは難しく、そのため、國分さんにこれで良いと言っていただけ時は嬉しかったです。

原爆投下直後の場面の再現という、非常に貴重な経験をさせていただき、とても有り難い気持ちでいっぱいです。この絵を見て、原爆や平和について感じていただければ幸いです。

被爆体験証言者のコメント

高校生と共に、これまでに何度か「原爆の絵」を制作しましたが、92歳になり最後の「原爆の絵」の制作と思い参加しました。

約 250 名の死体が焼かれた場所

被爆体験証言者 國分 良徳

74回生 島田 湊緒

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後日、中区白島九軒町京橋川付近(今の白潮公園あたり)の河原での火葬の様子です。1mほど掘られた土の中で250名ほどの死体が2人ずつ火葬されました。周りには兵士がいて薪をくべています。その様子を見ているのが、國分さんと國分さんのお父さんです。



生徒のコメント

私は白島町の河原で火葬が行われている場面を描きました。白島町では約250名もの死体が火葬されたそうですが、他の場所でも火葬が行われていたことを考えると、原爆による死者数の多さをより実感させられました。原爆投下後、死者たちがどのように火葬されたのかを知る人はそんなに多くないと思います。國分さんの証言と私の絵で、少しでも多くの人にそれを知ってもらえたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

高校生と共に、これまで何度か「原爆の絵」を制作しましたが、92歳になり最後の「原爆の絵」の制作と思い参加しました。

被爆火傷した妹を介抱する姉

被爆体験証言者 國分 良徳

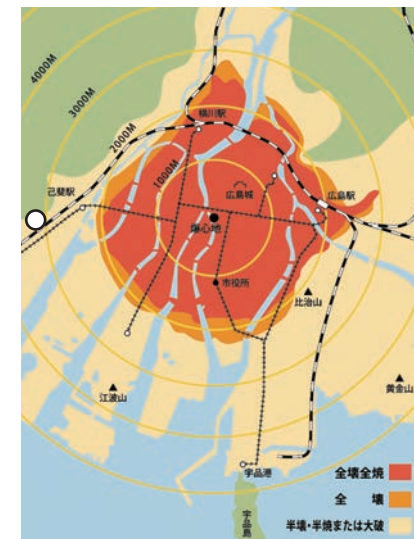
74回生 藤本 透子

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時女学校2年生だった國分さんの妹は、爆心地から900mの場所で被爆しました。原爆投下から2日後の8日になって、爆心地から3.7km離れた町に住んでいる人から「妹は自宅に避難しているが、全身火傷をしている」との知らせを受けた姉がそこまで出向き、介抱している様子です。



生徒のコメント

私が描いた場面は、國分さんが実際に体験されたものではなく、國分さんのお姉さんが体験されたものだったので、お互い分からない部分が多く、白黒の写真や数少ない資料を元に想像で補っていく作業が大変でした。

原爆の絵の制作では、「原爆による死者は〇人だった」「放射線の影響は爆心地から半径〇kmに及んだ」などと、被害の規模の大きさに焦点が当てられていた、今までに私が受けてきた平和学習とは違い、「一人」の人間が見た「ひとつ」の場面に焦点が当てられていたので、その悲惨さがよりリアルに伝わってきて、この出来事を繰り返してはならないと改めて感じました。

被爆体験証言者のコメント

高校生と共に、これまでに何度か「原爆の絵」を制作しましたが、92歳になり最後の「原爆の絵」の制作と思い参加しました。

御幸橋より 波に漂う屍

被爆体験証言者 河野 キヨ美

69回生 石田 菜々子

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

芸備線矢賀駅より入市。たくさんの死体を跨いで歩きました。比治山橋の両側に、川から引き揚げた死体はずらりと並び、蕙(むしろ)がかけてありました。蕙の下からは呻き声や「水を下さい」という声が出ていた。

姉の勤める日赤病院内は大勢の血まみれの怪我人がのたうち回り阿鼻地獄だった。宇品の姉を探すために渡った御幸橋から見る川面には、俯いたり、仰向いたりした水死体がたくさん波にゆらゆらと漂っていて、物言わぬ人々の酷い哀れな姿は、今も目に焼き付いている。



生徒のコメント

川に漂う死体というのは、当たり前ですが見たことがないので、絵を描いている際に想像した時は、正直恐ろしいと思いました。その恐ろしいと思った光景が、約70年前には実際に存在していたと考えた時、頭がついていなくなりました。

この絵を通して少しでも「原爆」について深く考えていただけたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

日々の学習のかたわら、大変な作業をして頂きありがとうございました。

石田さんには私の申し入れを忠実に表現して下さい、予想以上の作品になりました。

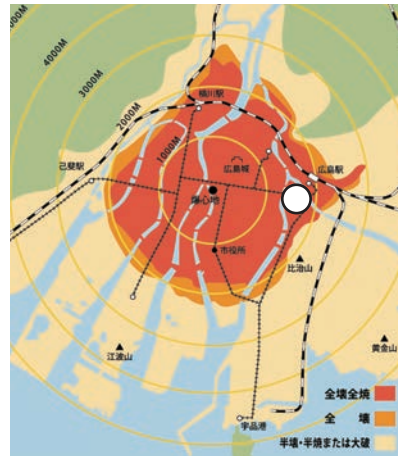
石田さんの努力と先生のご指導に心から尊敬し、感謝申し上げます。

道に転がる屍

被爆体験証言者 河野 キヨ美

71回生 門脇 友春

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月7日、姉二人を探し入市する。矢賀駅から母と一緒に4、5時間歩いて市内に辿り着く。道路一杯に足の踏み場のないほど沢山の死体が転がる場所があった。

爆風や熱線を受けた人間の体は大きく膨らみ焼け爛れていて、男女の区別もつかなかった。茶褐色の死体は仰向けに倒れていて、その眼球は流れ出て、舌も三角状の炭になっていた。内臓も流れ出て黄色に…。一人一人名前があったであろう死体を跨ぎ、躓きながら、母親にしがみついて歩いた恐怖におののいた記憶です。

生徒のコメント

私は原爆の絵の制作に携わり、今まで知り得なかったような、原爆が投下された当時についての深い話を聞かせていただきました。何度修正を繰り返しても、証言者の方のあの日見たままを描くことは大変難しいことです。しかし、この絵を見た方が、少しでも原爆のことについて考えるきっかけになればと思います。

原爆の絵の制作に参加することで、「今の広島に生きる私達も、決して核兵器や戦争と無関係ではない」という当事者意識を持ち、成長することが出来ました。この取り組みをこれからもつなげていきたいと思っています。

また、たくさんの貴重なお話を聞かせてくださった河野さんのお話を忘れず、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。一年間ありがとうございました。

被爆体験証言者のコメント

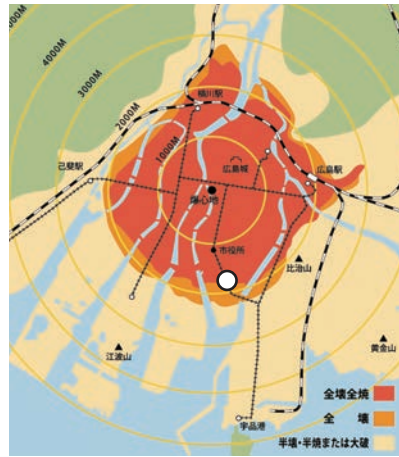
平成生まれの門脇君に、大変残酷な場面をお願いして申し訳なく思っています。途中、私が入院したり、難聴のため電話がよく通じなかったりして、門脇君の意欲を削いだと思いますが、いつも明るく博識な門脇君と楽しくお話をさせて頂きました。これからも、大変だと思いますが、若い人々にヒロシマを伝え続けて頂きたいと願っています。

忘れられない～あの眼

被爆体験証言者 兒玉 光雄

64回生 富田 葵天

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

倒れた長い屏に腰まで挟まれ、髪を振り乱しながら助けを求めている婦人に足をつかまれ、その手を振り払った場面。

生徒のコメント

原爆が落ちた直後の状況は、焼けただれた皮膚を引きずる人々を想像する人が多いと思いますが、熱線で焼かれた人の他に、その爆風で倒壊した建物の下敷きになって命を落とした人も多くいました。

兒玉さんは「足をつかまれた手を振り払った時の女性の眼が頭から離れない」と話してくださいました。私は、その時の兒玉さんの心情を想像すると同時に、女性の心情も想像しながら、特に女性の感情がどんな表情にすれば表現できるのかを何度も描き変え、悩みました。

原爆によってもたらされた想像を絶する情景は、実際に体験していない私達はその全てを分かることはきっと出来ません。しかし、私は核への関心が高まっている今、この原爆の絵を通して次の世代へ原爆の悲惨さを伝えていくための手助けとなれるように努力しました。

被爆体験証言者のコメント

煙と炎が追ってこない南方面を目指し、日赤病院前の大通りに出ると、火傷をした多くの被災者の行列に合流。

飛び出た目玉を左手に受けて、とぼとぼ歩く青年をかばうように進む時、突然に私の足を掴んで助けを求める婦人の手を、私は無情にも払いのけました。

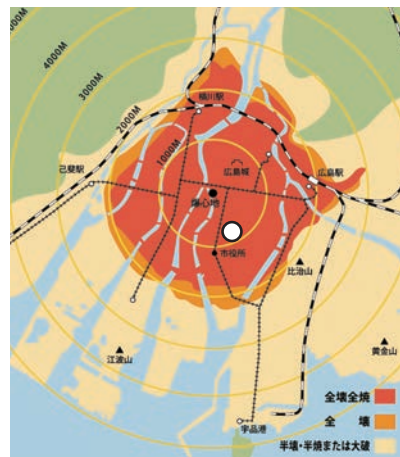
倒れた重い屏は婦人の腰を挟み、身動き出来ません。傍らを通る兵隊の群も救助せず、被爆者の行列も我が身をかばうのに精一杯です。私も友人を助けながら見知らぬ被災者を置き去りにしたことは、今でも呵責の念にさいなまれて、婦人の懇願する様な目が今でも忘れられません。修羅場で自分だけが助かった悔恨の気持ちが今も消えません。

倒壊校舎からの脱出

被爆体験証言者 兒玉 光雄

64回生 花岡 美優

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

倒壊校舎から脱出して、材木に挟まってしまった友人を助け出そうとしている場面。

生徒のコメント

証言者の方の中にある、記憶の中のワンシーンをできるだけ絵で表現しようと試みたのですが、見たことのない情景を、言葉だけを頼りに絵にするとするのは、とても難しかったです。

被爆体験証言者の方々の高齢化に伴い、体験者の方から直接当時の様子をお話して頂けるのは、もしかすると私たちの世代で最後かもしれません。原爆について、被爆三世の私たちでさえピンとこない存在となりつつあります。そうなる、私たちの次の世代の人たちはどうなるのでしょうか。平和意識の高い広島で生まれ育ち、小さい頃から平和学習などをしてきた私たちには、原爆が投下された当時のことを次の世代の人たちへ語り継いでいき、平和意識の輪を広げていく義務があると思います。その為に、今回制作した絵が少しでも役に立てたら、と思います。

被爆体験証言者のコメント

爆心から800m余りの古い木造平屋校舎内で被爆。その瞬間に直撃弾が教室に命中したのかと思い、机の下に伏せました。私は奇跡的に倒壊校舎の下から垂木や板を折って脱出しました。外は真っ暗闇。太陽はおぼろ月の様です。校舎の下では級友が腕や脚を挟まれて救助を求めています。夢中になって数人を引っ張り出しました。

やがて黒い闇のとばりが消える頃、近くのビルの窓から炎が吹き出て、遠くに見える福屋や中国新聞社も炎に包まれました。校庭のユーカリの樹は幽霊のようです。

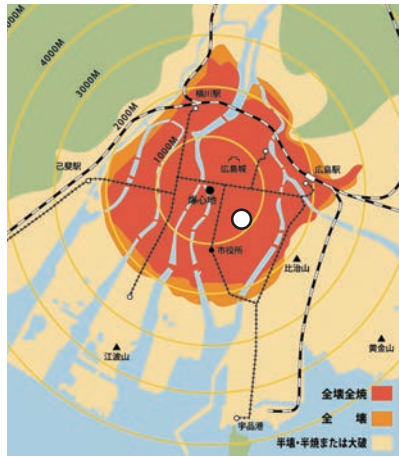
その時初めて広島市内が消えていることに気がきました。その頃の私は嘔吐を繰り返し、弱り果てていました。

プールサイドの惨劇

被爆体験証言者 兒玉 光雄

65回生 室星 理歩

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

広島一中1年生300名の半数の生徒が、爆心地から1100m辺りで建物疎開作業中に被爆しました。全員重傷の火傷を負い、熱さと苦痛に耐えかねてプールに入る者や、破れた水道の水を取り合って顔にかける者、物陰で横たわり苦悶する者たちの姿は見るも悲惨でした。また、背中からくすぶる煙に水をかけてやる者、土手の芝生には難を逃れてきた半裸の女学生の姿もありました。焼かれてたかれた姿にはセーラー服の襟だけが残り、そのおかげで女性と判別できます。

暗い埃の闇が収まり太陽が戻ってくると、遠くの福屋と中国新聞社が見え、その窓から一斉に炎が吹き出しました。



生徒のコメント

見たことのない、しかもとても悲惨で恐ろしい場面を描くのは、とても大変なことでした。証言者の方が、忘れられないくらい強く覚えていることを、そのまま絵で表現するというのは難しいことでした。当時の服装や人のポーズなど、細かいところに必死になっていると、どうしてもその瞬間の迫力や重々しい雰囲気を忘れがちになってしまいます。しかし、その度に証言者の方の当時のお話を聞かせていただき、資料を見せていただくことで、描き進めていくことができました。

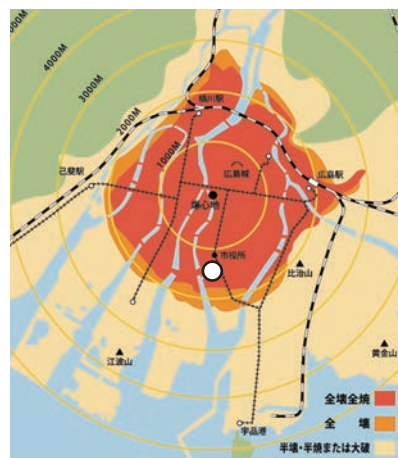
私はこの制作を通して、伝えることの大切さを学びました。私は戦争も原爆も体験していませんが、体験した人の話を聞き、その話とともに伝わる思いを受け取ることはできます。何かを伝えるために表現として、それをたくさんの人に受け取ってもらうことは、私たちのような世代にとって重要なことだと思います。私はこの貴重な体験をこれからも大切にしていきたいと思います。

人間檻樓(らんる)の群れの中に

被爆体験証言者 児玉 光雄

68回生 津村 果奈

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

私は、爆心地から800m余りの木造平屋校舎内で被爆。辛うじて倒壊校舎を脱出し、学友の救助に尽くしたが、火が回ってきたので校舎を離れ、東方に向う。しかし火のトンネルに阻まれ日赤病院前的大通りに迷い出る。御幸橋方面に続く電車通りに出ると、爆心地方面からボロ布を纏ったような悲惨な姿をした被爆者の大行列に遭遇する。日赤病院に入れず溢れた被爆者の群れは、一様に両手を前に突き出し苦痛の唸り声と、「水」「ミズ」の呻き声。その行列の中に、左目が飛び出し眼球を左掌に抱えた青年を見て寄り添って歩いた。道端には瀕死の重傷の母親が、乳飲み子を抱きしめ、夾竹桃の枝を握りしめ苦痛に耐えわが子を守ろうとしている姿を見る。傍を通る傷ついた兵隊の群れは、銃剣を杖代わりに、市民を助ける義務も忘れ逃れていく姿を見て「日本は負けた」と思った。

これらの行列はやがて御幸橋西詰めにかかると、火傷の熱さに耐え切れず川に入る者、臨時救護所に駆け込むもの、そして軍隊から救護にきたトラックに乗って島に避難する者などに分散し、御幸橋を渡る被爆者は僅かになった。

生徒のコメント

初めて児玉さんのお話を聞いた時に、目玉が飛び出た青年や、皮膚がボロ布のようになった人の話を聞いて、70年前にこの広島で本当にこのように悲惨なことが起きたのだと衝撃を受けました。この作品は、少しでも当時の現状に近づけることを目的として制作しました。そのために、今まで恐くてあまり見ることができず目を背けていた、やけどの写真資料を見て描きました。そのことで、今まで想像もしたことがなかった、怪我の痛みや表情など、その人の内面を考えてみることができ、当時の状況が身を持って感じられました。この絵が、一人でも多くの人に原爆の恐ろしさ、平和の大切さについて考えてもらうきっかけとなれば幸いです。

被爆体験証言者のコメント

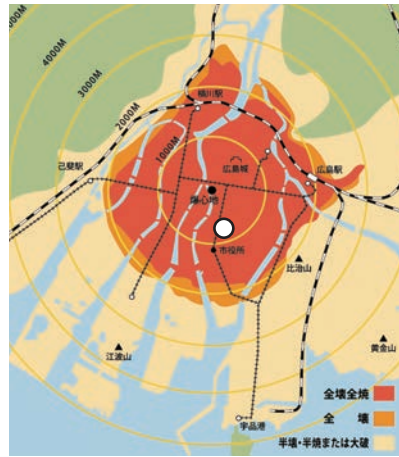
眼球が飛び出した青年の姿、ボロ布のようにたれ下がった皮膚を見て、最初は驚きながらも、次第に被爆状況を納得していく女高生を見て、被爆の状況を伝えるのは良い方法だと感じるようになった。しかし一方つらい気持ちによく耐えて真正面から取り組んでくれた姿勢に感謝しています。

「友達を助けてくれ!」「火が廻って来たぞ、逃げろ!」

被爆体験証言者 兒玉 光雄

70回生 宮本 陽菜

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から800m余りの処にあった木造平屋の広島一中校舎は、一瞬にして倒壊し、多くの生徒達は倒壊校舎から脱出することが出来ませんでした。私は奇跡的に大きな怪我もなく抜け出す事ができ、近くにいた数人の友人を助け出しました。薄明かりの中、倒壊したトラス(三角形の屋根の骨組み)と柱の間に脚を挟まれて空中にぶら下がり助けを求めている友人の悲鳴が聞こえ、彼を助けようと試みましたが、一人では脚を外す事は出来ません。誰か助けを求めようとあたりを見渡すと、窓際の席にいた友が、頭から顔にかけて無数のガラス片が刺さり血みどろの頭にゲートルで止血して呆然と立っています。私は宙吊りになった友を「助けてくれ!!」と必死で叫びましたが、彼は「火が廻って来たぞ、逃げろ!」と口から血を吐きながら恐ろしい顔で叫びました。倒壊校舎の下では脱出できないことを悟った生徒達は煙の臭いを感じて死を覚悟したように「天皇陛下万歳!」「広島一中万歳!」と叫び、それはやがて「君が代」の合唱から校歌「鯉城の夕べ」の合唱へと変わっていきました。私は助けられなかった友達に掌を合わせて「申し訳ない、許してくれ!」と涙ながらに詫びつつその場から逃げるしかありませんでした。

生徒のコメント

今回、証言者さんのお話を何度も聞き、それを絵に表す、という貴重な体験をさせていただいて、原爆の恐ろしさや被爆者の想いをあらためて痛感することができました。

原爆の絵の制作にあたり、何よりも原爆の絵を優先し、どんなに苦しい事も明確に教えてくださいました兒玉さん、時に厳しく指導、アドバイスをしてくださいました先生方、最後まで見守ってくださいました周りの方々、本当にありがとうございました。今回の経験をこれからも生かしていきたいと思えます。

被爆体験証言者のコメント

想像することも困難な原爆投下直後の修羅場の説明を、懸命に耐えて理解しようと努めてくれた事に感謝します。私が言葉で言い表すのが難しい状況を、立派な絵に描いてくれて有り難うございます。

倒壊校舎と共に生きたまま焼かれていった、多くの友達の冥福を祈ります。

延命地蔵の前で休む真っ黒なおじさん(西国街道にて)

被爆体験証言者 近藤 康子

69回生 川崎 友貴

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日の夕方、黒い雨が降る中、爆心地から3.5kmの西国街道にて、火傷で体がパンパンに膨らんだおじさんが、お地蔵様がある石段に座って、近藤さんに「水をつかあさい(水をください)」と言っているところ。



生徒のコメント

私は「原爆の絵」の制作を通して、自分が実際に経験していない場面を想像して絵にすることは、あらためて難しいと思いました。写真や資料を集めたり、見たことがないものを想像して描くことは思っていたよりスムーズにいかず、苦しかったこともありましたが、この「原爆の絵」の取り組みによって、当時の悲惨さや平和の大切さが伝わると嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

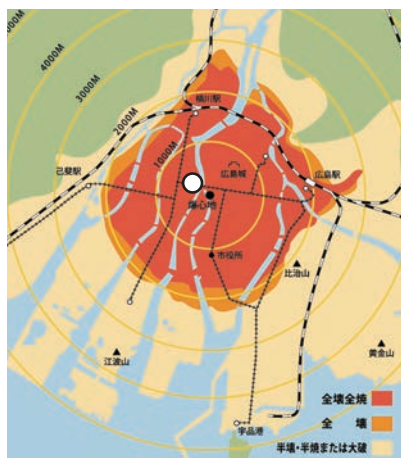
お地蔵様と地獄のような対比が良く出ています。

瓦礫の上を歩く親子

被爆体験証言者 近藤 康子

69回生 新宅 杏袈

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下から3日後、叔父の家から4 km離れた我が家まで、母は当時4歳の近藤さんの手を引きながら、生後9か月の妹を抱きかかえ、リュックを背負って死体と瓦礫の上を歩いているところ。

生徒のコメント

私は呉に住んでいたため、中学生のころ平和教育を受けていなかったのですが、今回原爆の絵の制作を通して、昔広島に原爆が投下され、悲惨なことが起こったということあらためて深く考えることができました。

また、自分が実際に見ていない状況を絵で表現するのは難しく、大変なことはたくさんありましたが、原爆の恐ろしさを伝えるために自分の描いた絵が役に立てたらいいなと思います。

被爆体験証言者のコメント

瓦礫の中をひたすら母にしがみついて市中を歩いた様子が良く出ています。



私は地獄に迷い込んだんじゃないか

被爆体験証言者 篠田 恵

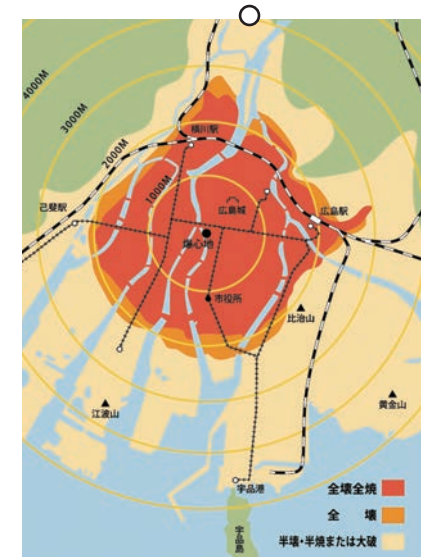
70回生 宮本 陽菜

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

広島市郊外、西原にあった田んぼの中の本道。当時、中学2年生だった篠田さんは、被爆当日、大火傷をした母と弟を乗せるために、大八車を引いて爆心地の方向へ、一人でその道を歩いていました。すると前から、ゆらゆらとうごめく黒い集団が近づいてくるのが見えました。今にも倒れそうな人、指から何かをぶら下げている人、泣く元気もない子ども、道端で崩れるように座り込む人。被爆され、大火傷を負った人達の集団でした。目の前の悲劇的な光景に、篠田さんはこう感じました。「生き地獄だ」と。



生徒のコメント

「この人たちはどこから来たのか。私が地獄へ迷いこんだんじゃないか。」篠田さんと打ち合わせをするたびにおっしゃられたこの言葉が心から離れません。原爆の被害で大火傷を負った人々が道の向こうから迫ってくるのを目の当たりにした篠田さんの恐怖が痛いほど伝わってきます。しかし、その恐怖を絵に表すのは簡単ではなく、完成に至るまでに何度も消しては描き直しました。この絵を見る方々に、この時の篠田さんの恐怖や原爆の本当の恐ろしさが、少しでも伝わることを願っています。

被爆体験証言者のコメント

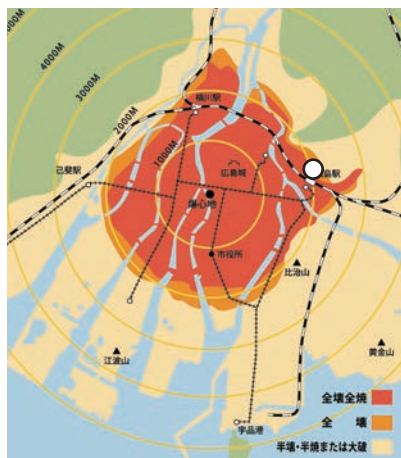
73年前の出来事。制作に入ると、私の記憶もおぼつかなく、前方からおぞましい姿でやって来る被爆者に目を奪われ、周りの風景、田んぼに育つ稲の大きさ、空の色、道の凸凹やわだち等々、制作者の宮本さんを困らせたのではないのでしょうか。

闇市で生きる

被爆体験証言者 清水 弘士

73回生 郷原 綾乃

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

清水さんが3歳の時、清水さんとお母さん、お兄さんの3人は、お父さんの亡くなられた後、現在の広島駅付近にある闇市で、昼間は陶磁器などを売ってそのお金で食べものを手に入れて生活していました。

画面の中央には、夜、清水さんとお母さん、お兄さんが、2畳の狭い小屋の中で抱き合って眠っている様子を描き、周りには、昼間の活気ある闇市の様子を描きました。

生徒のコメント

私が原爆の絵の制作を通して感じたことは、昼間の様子と夜の様子を一枚の絵で表現することの難しさです。どうすれば絵を見ている人に絵の内容を伝えられるのかということ、制作の中で一番悩みました。

原爆について今までたくさん話を聞くことはありましたが、聞いた話を絵にして、これからの世代の人々に伝えるという経験はなかなかできることではないので、良い経験となりました。この絵を見て、少しでも当時の様子が伝わればいいなと思いました。

被爆体験証言者のコメント

原爆で強いられたどん底生活。闇市で、親子三人がしがみつき、必死で生き抜いた様子を、難しい構図の絵で表現してもらいました。

戦争は、始めてしまったら終わりが無いことを理解してもらえたと思います。

原爆後遺症

被爆体験証言者 清水 弘士

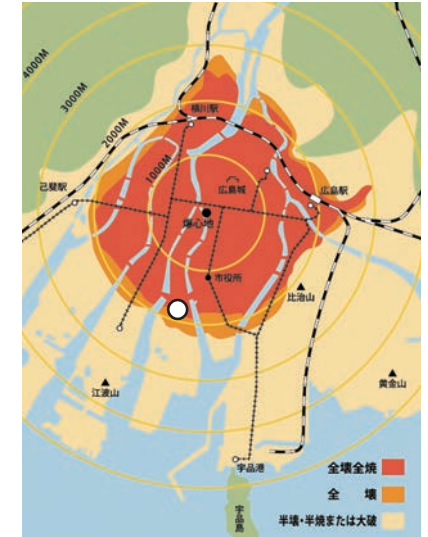
73回生 多賀 心音

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の10年間、下痢と腹痛、全身倦怠、鼻血などの原爆後遺症に苦しんだ。眠っていて、知らない間に鼻から出血して枕元が血だらけになった時は、何が起きたのかと自分でも驚いた。原子爆弾が投下され、人も町も全て燃やされた。原爆投下から多くの年月が過ぎてもなお、人々の体に核の痕跡は残っている。痛みを伴わない血は、まだ幼い清水さんを不安にさせた。



生徒のコメント

清水さんとの打合せを重ねる度に、私の原爆に関する知識の乏しさを痛感していました。学校の平和学習だけでは知り得ない、簡単には想像できないほどに悲惨な出来事だったことを、多くの人に知ってほしいです。

この絵を描くに当たって苦労したことは、清水さんの表情と、感情の表現です。鼻血はいつまで出るのか、病気なのか、いつか治るものなのか、生涯続くものなのか…といった不安や、また出ている、また洗わないと、いつまで続くのか、といった苛立ち。清水さんの心の中で渦巻く様々な感情を表現することが難しかったです。

被爆体験証言者のコメント

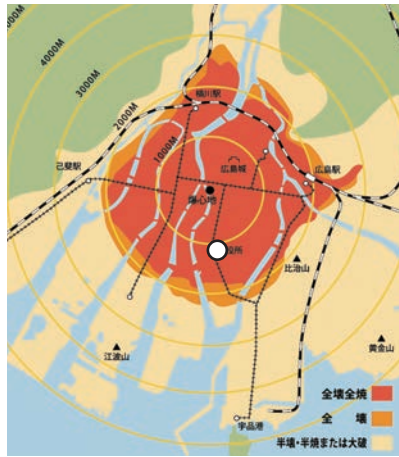
放射線が造血機能を破壊する原爆後遺症の体験。後々までも身体を苛む核の恐ろしさを受け止め、実感しながら描いてもらえたと思います。

合掌する母

被爆体験証言者 清水 弘士

72回生 原田 真日瑠

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日、清水さんのお父さんは職場から帰って来ず、翌朝、当時3歳の清水さんは、お母さんと一緒にお父さんを探しに行きました。お父さんの職場があった場所は瓦礫の山になっていました。生存が確認された人の名前が、乾パンが入っていたらしい木箱に書かれていましたが、そこにお父さんの名前は無く、お母さんは「お父さんはもう死んでしまった」と思い、瓦礫の前で合掌している様子。

生徒のコメント

私は今回、2回目の原爆の絵を描かせていただきました。今回証言をしていただいた清水さんは当時3歳。小さすぎて、当時のことはほとんど覚えておられませんでした。そんな中、私も清水さんもほぼ何も分からないところから絵の制作が始まりました。私も自分なりに資料を探して下描きを描いたり、清水さんも、お母さんが書かれた手記やお父さんの同僚が残した手記、絵の場所の当時の写真など参考になるものをたくさん探してくださいました。この絵は、当時清水さんが見られた光景を完全には再現できてはいません。しかしこの絵は、正真正銘の清水さんとの共同制作による原爆の絵です。当時の服装や瓦礫、翌朝の雰囲気、そして何よりもお母さんが静かに合掌されるその気持ちも感じ取っていただけたら幸いです。今回の原爆の絵の制作の中で私が最も強く感じたことは、いつまで被爆者の方の証言を直接聞けるか分からない、ということです。いつか、広島と長崎に原子爆弾が投下されたこと、そこで何があったのかが誰も分からなくなってしまいう日が来るのではないかと。そんなことになってほしくはありません。私と清水さんでこの絵を残すこと、この絵を見た人が、この絵の内容や広島での出来事を、人から人へと伝えていってくれることが、その一歩だと考えます。

被爆体験証言者のコメント

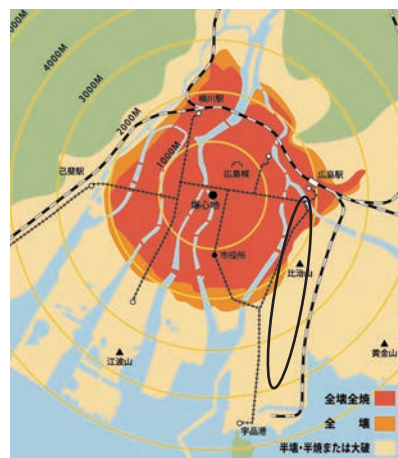
あの時はどんな服装でどんな色だったのか。瓦礫はどんな状態だったのだろう。背後の山並みは？写真や資料を探して一緒に想像してもらいました。そうして、あの時の、あの場所に立って描いてもらうことができたと思います。

お母さん待って!

被爆体験証言者 白石 多美子

67回生 山崎 菜結

平成26(2014)年度制作 日本画(F15号)



描いた場面

8月7日、白石多美子さん(当時6歳)とお母さんがおばあさんを探して宇品から広島駅に向かっていく途中で、道に横たわった焼死体に出会いました。横たわった焼死体は左手を天に突き出し、目を大きく見開いて空を睨みつけていました。焼死体は道一杯に横たわっていたため横を通ることができませんでした。

そこで、お母さんは焼死体に手を合わせて「通らしてください。」と言ってからまたぎました。しかし、当時6歳だった白石さんにはその焼死体が大きすぎてまたぐことができませんでした。その時、お母さんに「細いところ(首や足の方)を通ってきなさい」と言われているところです。

生徒のコメント

最初に話を聞いた時に私が一番衝撃を受けた場面を描かせていただきました。その時私が受けた衝撃をいかに絵に反映させていくか悩みました。描き始めはその衝撃を鮮明に覚えていましたが、だんだんと作品を描いていくうちに、その感覚が薄れていくことを実感して、資料を見て、その思いを思い起こしながら仕上げていきました。やはり話を聞くだけでは記憶は薄れてしまいます。だからこそ、絵に描いて残すということが大切だと感じました。

被爆体験証言者のコメント

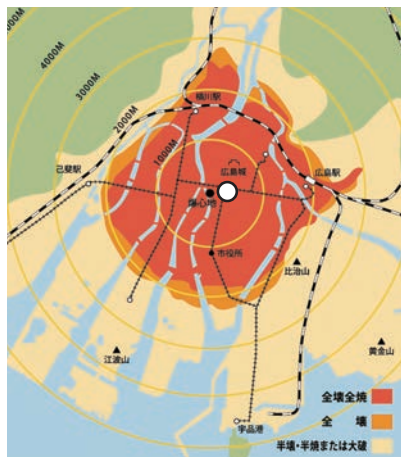
祖母を探しに的場町の方に行った時、瓦礫の中に死体が横たわっていました。手を上げ、空を睨みつけるようでした。私は通ることができないので、母に聞き、細いところを通してもらいました。首の所をまたぐ時、「ごめんなさい。通ってください。」と言いながら手を合わせて通りました。

静(せい)

被爆体験証言者 新宅 勝文

61回生 仲元 愛

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下の翌日の商店街の風景。

原爆の爆風や光などで暴れた馬を、馬借の人が落ち着かせるために覆いかぶさっている光景。

人の影になって馬の顔だけがきれいに残っていた。

生徒のコメント

原爆で被害にあったのは人間だけではなく、動物たちも多くの被害にあっているのだということを改めて知りました。動物が受けた被害を描いた絵は少ないと思うので、たくさんの人に見ていただいて、命の大切さについて考えてもらいたいです。

この絵を描くにあたって、馬の死体や瓦礫などの資料を本や映像などの中から探し、参考にしながら描きました。特に、馬の表現に力を入れて描きました。

私はこの原爆の絵を制作したことで、改めて原爆の与えた被害を多くの人に知ってもらいたいと感じました。

被爆体験証言者のコメント

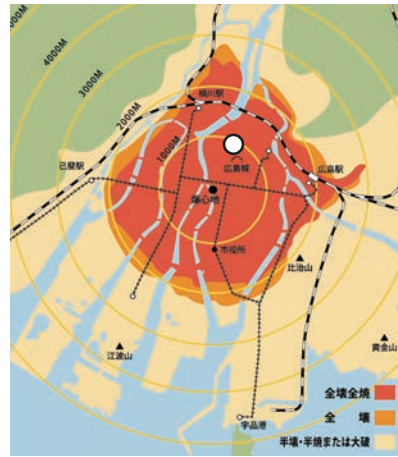
戦時中、ガソリンを使えないから荷物の運搬は馬です。爆弾を受けた馬が驚いて悲しんで泣くその状況を見て、馬車引きのおじさんが少しでも馬を安心させてやろうと思い、馬の顔に自分の体を乗せて共に死んでいく—だから馬は顔が焼かれずきれいな、おじさんは焼かれて炭になっている。

焼却を待つ死体

被爆体験証言者 新宅 勝文

61回生 原 望美

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が落とされた翌日の朝、原爆によって亡くなられたたくさんの人々が整然と積み上げられた光景に出くわした。

山の様に積み上げられていたのではなく、一段一段丁寧に積み上げられていた。

生徒のコメント

今まで私が知っていた原爆直後の光景が、新宅さんのお話とは色々と異なることに驚きました。原爆の体験も人それぞれだったという当たり前のことに気が付かず驚いてしまった自分が恥ずかしかったです。

私が描いたあの死体の積み方は、大勢の人を一度に火葬するための積み方だそうです。そのような積み方をしなければならないほど多くの人々が亡くなったのだという事実を知り、とても悲しく思いました。

被爆体験証言者のコメント

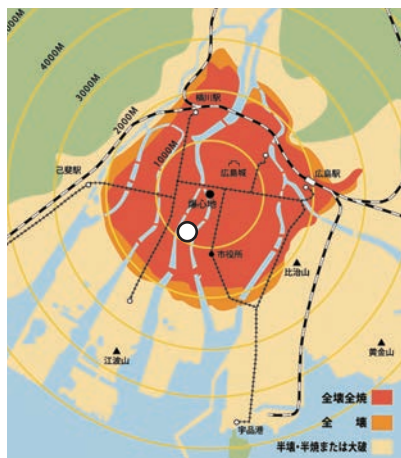
多くの死体は、山積みでは焼けないのです。絵に描かれている状況で焼かれるのです。私は、焼かれる状況を見ていました。

死体を積んだトラック

被爆体験証言者 新宅 勝文

66回生 竹重 美里

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

中島町あたりで、死体を焼却する場所に運ぶために、トラックに死体を積んでいる場面。トラック5台が死体でいっぱいになっている。一段ずつ丁寧に並べられ、くずれ落ちないようにされている。

生徒のコメント

打合せの時、新宅さんからいろいろな場面の話をお聞きました。その話の中でも一番印象に残った、死体がトラックいっぱいになっている場面を描きました。

今では考えられないような光景を、できるだけその時の状況に近づけるように描いていくうちに、原爆の悲惨さを改めて感じました。

今回制作した絵が、今後の証言活動の役に立てたらと思います。



立ったまま白骨になった死体

被爆体験証言者 新宅 勝文

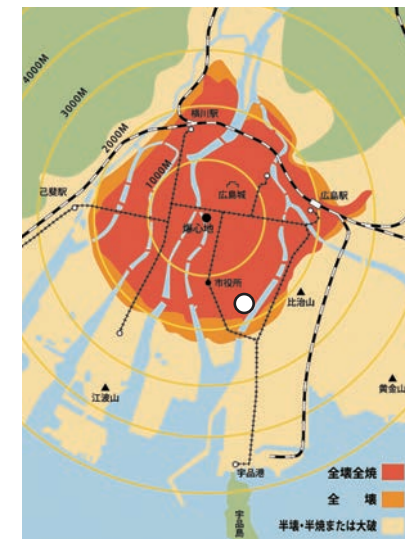
65回生 村井 華菜子

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

千田小学校のすぐ近くにあった防火水槽の傍で、炎で焼かれて立ったまま白骨になっている死体を見たときの様子。



生徒のコメント

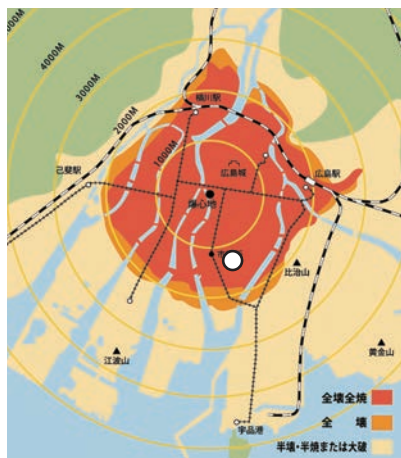
言葉で言うのは簡単なのですが、立ったまま白骨化した人など、見たことがある訳もなく、どのように描いたらいいのか分からず、なかなか制作が進みませんでした。また、私が話を聞いて想像した光景と実際の光景にはずれがあり、それを合わせていくのも大変でした。このように苦労した事も多々ありましたが、今の広島からは想像できないような悲惨な場面があったという事実を知って、さらにそれを作品にしていくというのは、美術的にも勉強になりましたし、何より原爆の事を後に伝えていくための良い経験になったと思います。

おいしかったよお…ありがとう…。

被爆体験証言者 新宅 勝文

66回生 岡本 実佳枝

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、原爆が投下されて1時間ほどがたち、千田町にあった当時の広島大学の大きなグラウンドに、全身に大やけどを負い、白くなった皮膚がずるむけになった人、爆風で飛んできたがれきに肉をえぐり取られた人、絶望に打ちひしがれて呆然とし、座ったまま動かない人…といった、四、五百人もの人が集まっていました。

再びここに戻ってきた新宅さんは、楠の下に、3歳くらいの子供がまだ息をしていることに気がきました。その子は、全身が大やけどで白くなり、頭の皮もむけ、髪の毛も無くなっていました。新宅さんはその子に水をせがまれたので、防火用水のところに行きました。しかし、防火用水の中には水が一滴も残っておらず、仕方なくへどろに含まれていた泥水を、自分の服のすそに染み込ませ、渾身の力を振り絞ってその子に与えました。するとその子は、そのわずかさかき一杯の泥水を飲み終えた後、「おいしかったよお…ありがとう…」と言って、安らかな表情のまま、新宅さんの腕の中で亡くなりました。

生徒のコメント

私がこの原爆の絵の制作を通して苦労したことは、全然見たことがなく、今まで想像したことのない光景を、言葉や数少ない資料だけで絵に描きおこすことでした。特に、火傷によって白くなった皮膚を描くのが難しく、何度も何度も描き直しました。

新宅さんから、あの8月6日から今年で70年の月日経っても忘れられない辛い記憶を話していただいて、その深い心の傷を知り、胸が張り裂けそうな気持ちになりました。

同時に、私は「原爆」を知っているつもりでいましたが、新宅さんのお話と、私がイメージしていた原爆とはあまりにもかけ離れており、そんな自分に腹が立ち、情けなく思いました。

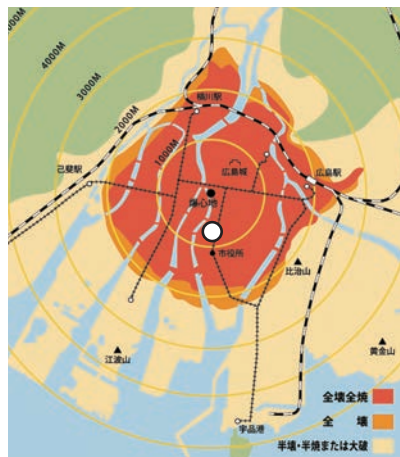
私は、この原爆の絵の制作を通して、私たち一人ひとりが「原爆」に背を向けず、より深く知り、次の世代に受け継いでもらう架け橋にならなければいけない世代なのだなど、改めて実感しました。この絵がきっかけとなって、核兵器のない、平和な時代になってほしいと願っています。

市内電車の中で吊革を持ったまま焼けて、骨になった人

被爆体験証言者 新宅 勝文

70回生 岡田 萌々

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が落ちた次の日の朝、家族を探していた新宅さんは、中電前あたりの線路で止まっている黒焦げの市内電車を見つけました。中には、原爆の熱と炎で焼かれて骨になってしまった人達がいる、何人かは吊革を持ち、立ったまま骨になっていた。

生徒のコメント

「すごく静かな景色だったんだろうな」と、最初にお話を聞いた時に思いました。人が、1つの爆弾で、動いたり声を出したりしないものになってしまった。そんな残酷な静けさを何とか絵にして、その恐ろしさを伝えたいと思いました。

見たことのない風景を絵にするのは、資料を見てもなかなか想像できず、大変だったけれど、証言者の方にお話を聞けたり、質問ができるというのはとても貴重な体験になりました。

被爆体験証言者のコメント

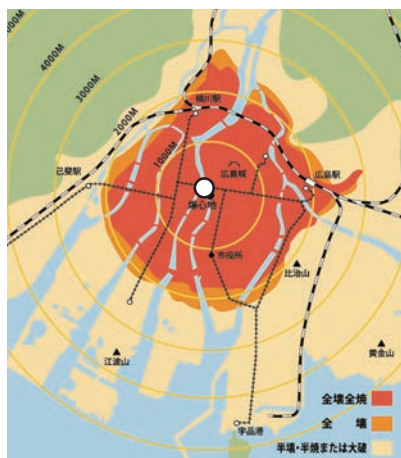
原爆の事を知る人はもう少ないです。だから、この絵を大事にしてください。

爆風で亡くなった女性

被爆体験証言者 新宅 勝文

70回生 河崎 海斗

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の2日目の朝。爆風で飛ばされ、欄干の間に座るようにはまり、亡くなっていた2人の女性。女性は爆風などによって腕が無くなり、火傷をしている。左の女性はとても苦しそうな表情をしていた。

生徒のコメント

制作する中で、証言者さんの話を聞き、原爆のことについて調べてみると、たった1つの爆弾で起きたこととは思えないぐらい多くの人が苦しみ、亡くなって、自分の思っていた以上に悲惨であったことを知りました。証言者さんの体験は自分の想像を超えるものだったので、表現するのに苦労しました。

被爆体験証言者のコメント

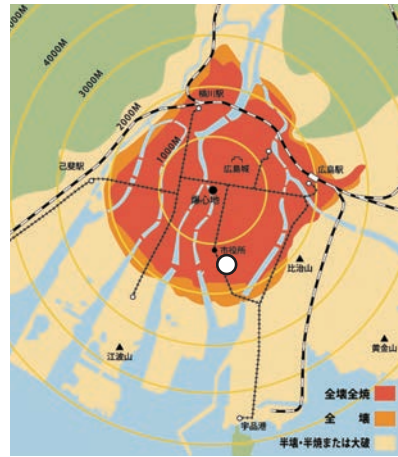
原爆の事を知る人はもう少ないです。だから、この絵を大事にしてください。

広島文理大学グラウンドの惨状

被爆体験証言者 新宅 勝文

70回生 和田 はるな

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の広島文理大学のグラウンドで、被爆した200人ほどの多くの人々が避難しにやってくる。

そこで新宅さんが、全身大火傷を負って「おかーさん」と叫んでいる3歳くらいの子供を見つけて手を差し伸べて助けようとしている場面です。

また、床屋のおじさんが、全身の肉が剥がれて骨が見えている自分の娘を見つめている場面や、母親が子どもを抱いたまま亡くなり、生きている子どもは熱くて泣いている場面など、新宅さんがグラウンドで見た出来事も絵にしています。

生徒のコメント

私はこの制作をする前までは、原爆は過去のことだし、怖いからと向き合おうとしなかったけれど、証言者さんのお話を聞いて、戦時中の人々も現代の私達と同じように生活をしていて、同じように感情を持っているということに気づき、被爆者の一人ひとりにそれぞれの物語があるということを感じたいと思い制作しました。

証言者さんの話を頼りに怪我の様子や人々の表情などを想像して描くのは苦労したけれど、その都度証言者さんが色や様子をアドバイスして下さい、完成することができました。

被爆体験証言者のコメント

原爆の事を知る人はもう少ないです。だから、この絵を大事にしてください。当時は栄養失調で痩せている人が多く、死ぬ時は「痛い、苦しい」と泣き叫んでいましたが、死んだ後はほとんど平常心の顔に戻っていました。

家族の遺体を掘り出す

被爆体験証言者 末岡 昇

72回生 柁宜 泳子

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆風で家屋が倒壊して、天井の太い材木の下敷きになり祖父母は砕かれて一部は焼けずに残っていました。父が祖父母の白骨化した遺骨を瓦で隠しておいて、数日後、父と母と私で焼けずに残っていた骨の一片、一片を掘り出しました。母が私に向かって「これがおじいちゃんの骨だよ」と言っている様子です。



生徒のコメント

やはり、見たことのない光景を絵にすることは簡単ではなかった。末岡さんとの打ち合わせを何回も行ったので、どのような状況だったのかは想像できたが、末岡さんが絵にしたいものとは遠いかもしれない。

この制作を通して、当時起こったことを知る貴重な体験をさせてもらい、とても勉強になった。

被爆体験証言者のコメント

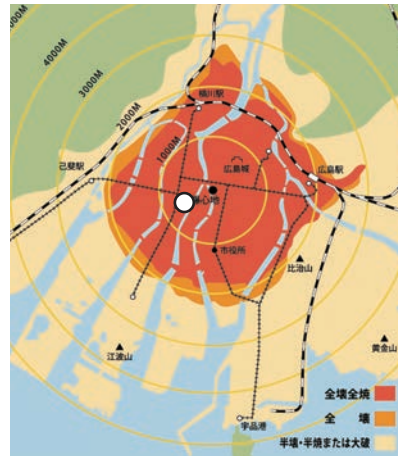
絵にするのが難しい場面の雰囲気がよく出ていると思います。

家族の火葬

被爆体験証言者 末岡 昇

72回生 河本 羽菜日

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

祖父母は爆風によって倒壊した家の下敷きになり亡くなりました。原爆投下から12日後、父が祖父母の白骨化した遺骨を瓦で隠しておいて、父、母、私の三人で掘り起こし、瓦礫を集め、そこで火葬しました。

生徒のコメント

遺体を火葬しているといっても、遺体は骨なので、瓦礫に対する骨の大きさやどれくらいの煙が出るかなど、実際に経験していない場面を描くのはとても難しかった。証言者の末岡さんのお話を聞き、イメージに沿った絵が描けるかとても不安だった。この絵を見た人に、当時の状況や、想いが伝わればいいなと思う。

被爆体験証言者のコメント

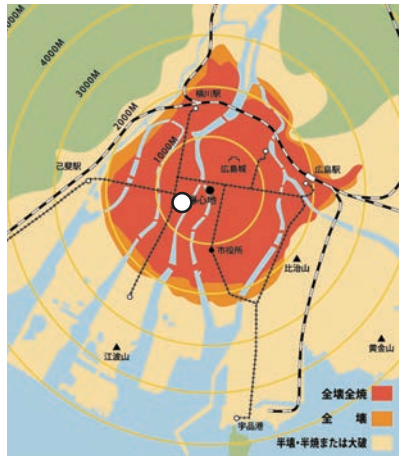
遺体を掘り出して焼く情景は説明しにくく、生徒さんにはイメージが湧きにくかったと思います。私自身も遺体が祖父母とは思えなかったからです。今でも忘れられない情景です。

絶望・死にゆく人

被爆体験証言者 末岡 昇

71回生 是永 千穂

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月18日、祖父母の遺体を拾いに行く途中の西新町(現在の土橋町)の焼け跡で、黒く汚れ、絶望して自ら望んで死を待っている人を目撃しました。屋根のようにトタンが立てかけられているのは、おそらく見かねた人がそこら辺にころがっていたトタンで即席の屋根を作ったのだらうと思われるます。

生徒のコメント

人が黒くなっているなんて想像できず、色を作って塗るのに抵抗を覚えた。「周りの景色は何もない」と言われたが、その解釈に悩み、当時の資料を沢山漁り、当時の風景を研究するのに特に苦労した。私が描いた場面は一般的に知られていない風景なので、私の絵を見て戦争を知る一つのきっかけになればいいと思う。

被爆体験証言者のコメント

とてもイメージの湧きにくい場面だったと思います。絶望して死ぬ人など普通では一生見ないでしょうね。むしろ、大怪我をして苦しむ人や亡くなった人の方が描きやすいと思いました。

流れ着いた棺代わりの木箱

被爆体験証言者 末岡 昇

71回生 猿田 起之

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

9月頃、宮島口の小さな砂浜に、いくつもの遺体が入った木箱が流れ着いてきました。その日のうちにどこからか作業員が集まってきました。組織に訓練された人ですが兵隊さんではありませんでした。そしてその作業員が10人程度で木箱を木の棒にくくりつけて黙々と運んでいました。

生徒のコメント

今回、僕らの班が担当した証言者の末岡さんは直接被爆した方ではなく、依頼された絵の全てが事後のことでした。死体が一つも出てこない描写の中で「いかにして原爆の惨さ、暗さを伝えるか」ということが始終頭を悩ませていました。

また、制作を進めていく中で、原爆の絵に対する自分の意識も変化していきました。当初、この原爆の絵は「過去に起こった事実を知るためのもの」と思っていました。しかし、末岡さんからご家族のことや当時の様子など何度もお話を伺い、描いている場面の場所へも実際に足を運ぶ中で、原爆の絵は「過去の出来事だけでなく、犠牲になった一人ひとりの記憶や思いを今に伝えるもの」であると思うようになりました。この絵が犠牲になった方々の心と、今に生きる全ての方の心を繋げられたらいいなと思います。

被爆体験証言者のコメント

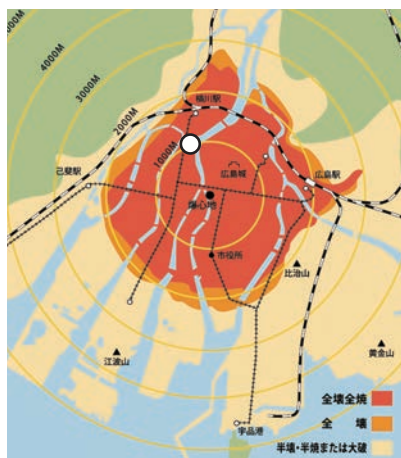
原爆投下されて何年も経っていて宮島の明るい陽光の下で陰惨な作業のミスマッチは口では説明しにくいので、何回も足を運んで貰いました。

忘れられた女学生の遺体

被爆体験証言者 末岡 昇

71回生 下西 由心名

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

寺町の駅の、覗き込まないと気付かない場所に放置された女学生らしき白骨化した遺体が、戦後2年経った頃になって発見されました。周りに居合わせた人々は騒ぎ立てるわけでもなく、ただ呆然と見ているだけでした。

生徒のコメント

私は最初「原爆の絵」と聞いたとき、「血だらけで、ボロボロ」というイメージが最初に浮かんできました。怪我をした時は血や肉は見えるけど骨は見たことがなかったというのもあってか、描く場面に現実味が感じられず、白骨化した遺体を描くのがとても難しかったです。描いているうちに血みどろの遺体よりも冷たい恐怖をひしひしと感じました。この絵のように、過去に埋もれていく記憶や真実を見つけ、忘れないように伝えていけるように少しでも役に立てたら幸いです。

被爆体験証言者のコメント

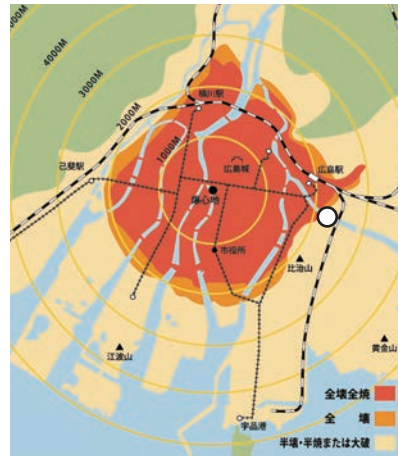
戦後5年ごろ、1950年頃まで広島市内や似島などで遺骨が発見されました。人々も慣れっこになっていて「またか」というように無感だったのが恐ろしいと感じました。

被爆直後の大正橋附近

被爆体験証言者 田川 康介

67回生 田中 晴気

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

広島駅から家に帰ろうと大正橋のところまで来た時の、生々しいあり様。全員が裸で火傷を負い、水を求めて川の中に入ったか、橋の上から落ちたりして水を飲もうとする、本当に地獄のようだった。

生徒のコメント

中学生のころから、平和への思いがありましたが、自分からその思いを行動に移すことができていませんでした。そんなときに、原爆の絵を取り組んでいるという基町高校の存在を知り、入学しました。

実際に原爆の絵を描き始めると、本当に起こった惨事は思っていたよりもずいぶんひどいもので、資料も少なく、制作にはとても苦労しました。

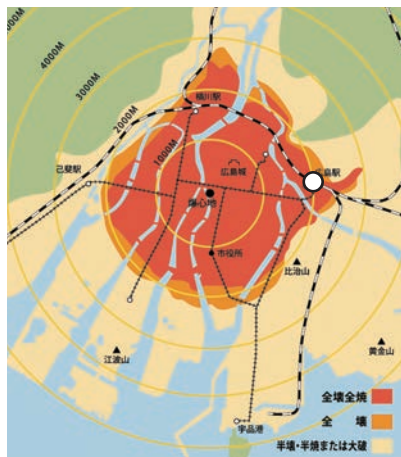
田川さんや先生方をはじめとした、色々な方の力を借り、制作を進めていくことができました。この原爆の絵の制作を通して、平和への思いがより強くなり、自分自身も成長できたと思います。

逃げ惑いながら水を求めて
～防火用水に群がってみな亡くなっていった～

被爆体験証言者 田川 康介

66回生 岡本 実佳枝

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後の広島駅周辺の様子。

業火のなか人々は皆水を求めて防火用水に深く頭を突っ込んだままみな亡くなっていった。本当に地獄の有様だった。

防火用水から引きずり降ろされ横たわる人々もいる。そのなかに1人の小さな子どもが懸命に水を求めている。しかし、業火は猛威をふるい人々に迫りくる。

制作者のコメント

1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分、1発の原子爆弾が広島に投下されました。

一瞬にして服は焼け焦げ、全身みな赤身。皮膚はずりむけ、ただれている。苦しみから逃れるため、生きるため懸命に水を求めたあげくにみな息絶える。周りは無情にも火の手が迫ってくる。家族に友達に愛する人に何も残せず、夢も希望も炎は焼いてしまいました。

本作品は、人生を狂わせたたった1発の原子爆弾の非人道的で無情な様を描いたものです。ここには14人の被爆者が描かれています。この人たちの思いを想像で構わないので考えてもらえると幸いです。

被爆体験証言者のコメント

下絵の途中、画面が少し暗い感じがしたので、輪郭をはっきり画いてもらいました。



被爆3日目 リヤカーで広島駅まで避難する

被爆体験証言者 瀧口 秀隆

73回生 古川 七海

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

この絵は原子爆弾が投下されてから三日後の8月9日夕方頃、瀧口さん一家が福山市松永にある母方の実家へ避難するためにリヤカーを使って広島駅まで向かっている光景です。

当時4歳だった瀧口さんは左腕に大火傷と左頬とかかたとに軽い火傷を負っていました。お母さんは背中に大火傷を負い、ふくらはぎからかかともかけても火傷をしていました。妹さんも頭に火傷をしていました。お母さんの兄と父方の叔母の夫が救援に来てくれ、リヤカーに瀧口さんとお母さんが乗り、当時は貴重だった鍋釜なども載せてリヤカーの前後を押してくれました。妹さんは甥のお嫁さんに抱かれてリヤカーのそばを歩いています。



生徒のコメント

原爆投下から少し時間が経った場面であったため、瓦礫や街がどれくらい片付いているのか、通行人はどれくらいいたのか想像がつきにくかったですが、何度も描き直し、当時の状況をリアルに表現できるよう頑張りました。

実際に証言者さんのお話を聞くことで、今まで自分が持っていた知識よりも、より原爆に対して恐ろしさを感じ、また、絵の制作という形で証言活動に関わることができ、伝えていくことの難しさを知ることができました。

被爆体験証言者のコメント

1945年8月6日、一発の原爆により、広島は熱線、爆風で広大な面積が一瞬にして焼き尽くされました。また、目には見えない放射能により人々の身体は蝕まれました。そして戦後76年間、日本は戦争をしていません。今後も戦争のない日本であることを強く深く望んでいます。

戦争はなく、衣食等、欲しいものがあればコンビニ、スーパー、デパートに行けば手に入る。このような時代に育った生徒さんが、戦中に生まれ、戦後も物資がない時代を過ごし、被爆による苦しい生活など、体験した話とか状況などをどのように理解して表現できるのか不安がありました。

少ない資料を参考にしながら話を進めていきました。意見交換はネットやLINEなど活用し、時には学校に行き制作途中の絵を見ながら思いを活発に交わしました。そして美術の先生による指導も相まって最大限想像力を発揮され、絵の内容がリアルになってくるにしたがって、証言者の思いが絵の中に再現されてきたのです。

避難する私達は茜色に染まる空に生きる希望を見出したのでした。

母の背中 大火傷にウジ虫が動く

被爆体験証言者 瀧口 秀隆

74回生 山下 聡美

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日に白島北町で被爆し、その3日後にリヤカーで広島駅まで行き広島駅から山陽本線(蒸気機関車)で母の実家である松永に到着しました。母は原爆の熱線で首筋から背中にかけてと、ふくらはぎから足首までを大火傷をしていました。実家のお婆ちゃんが母の背中を見て「まるで魚のはらわた(腸)を割ったような感じだ」と言っていたそうです。その背中を腐った肉と勘違いしたのか、ハエが卵を産み付け、成長しウジ虫になる。ウジがわくとそれが背中の上で動くので、強いかゆみを感じた母が(ウジを)「取ってくれ」と訴えると、祖母やその場にいた親族たちがウジ虫を割ばしでつまんで取ってくれました。

生徒のコメント

瀧口さんがおっしゃった火傷の様子は、私が今までに見たことも聞いたこともないようなひどさで、当時の火傷の写真などを見てもきちんと理解することができず、ましてその傷の上にウジがわく様子など、そのようなことが起こることすら想像することができませんでした。

しかし実際にそれを絵にしていく中で、自分の身体にハエがたかる辛さや惨めさ、虚しさを実感しました。それと同時に、そのようなことが過去、実際に起きたのだということ、何か行動を起こさなければ、これと同じようなことが、またはこれよりも悲惨なことが起こるのかもしれないのだという恐怖を強く感じ、絶対に核兵器を使用することは許されず、無くしていかなければならないのだということに改めて強く思いました。

被爆体験証言者のコメント

1945年8月6日、一発の原爆により、広島は熱線、爆風で広大な面積が一瞬にして焼き尽くされました。また、目には見えない放射能により人々の身体は蝕まれました。そして戦後76年間、日本は戦争をしていません。今後も戦争のない日本であることを強く深く望んでいます。

戦争はなく、衣食等、欲しいものがあればコンビニ、スーパー、デパートに行けば手に入る。このような時代に育った生徒さんが、戦中に生まれ、戦後も物資がない時代を過ごし、被爆による苦しい生活など、体験した話とか状況などをどのように理解して表現できるのか不安がありました。

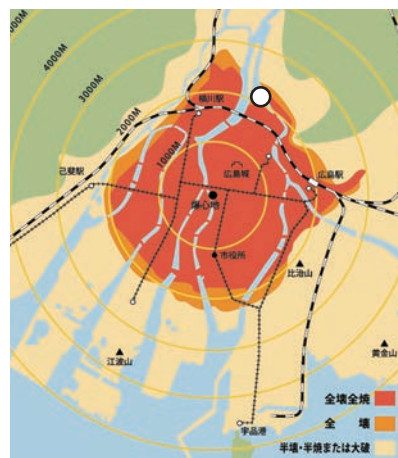
少ない資料を参考にしながら話を進めていきました。意見交換はネットやLINEなど活用し、時には学校に行き制作途中の絵を見ながら思いを活発に交わしました。そして美術の先生による指導も相まって最大限想像力を発揮され、絵の内容がリアルになってくるにしたがって、証言者の思いが絵の中に再現されてきたのです。背中の上でウジ虫を取る祖母は泣きながらつまんでいたそうです。

戦後の食糧難を乗り切る為に

被爆体験証言者 瀧口 秀隆

74回生 久保田 葉奈

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時、土があるところはどんなに狭いところでも野菜などを作っていました。私の家にはそのような土地がなかったので、建物などが撤去された後に残されたコンクリート基礎の上に、母が一斗缶に土を入れて天秤棒で前後に担いで、何度も何度も土を運びました。重たくて天秤棒が肩に食い込み痛かったと言っていました。僕も小さなバケツに土を入れて両手に持ち、何度も運びました。

生徒のコメント

土がいっぱいに入ったバケツを実際に持ってみると、持っただけで大変で、これを持って何度も往復するのはとてもしんどかったらうと思いました。瀧口さんとお母さんがどれだけ大変だったかが分かりました。見たことのない風景や、経験したことがないことを絵に描くためには、一から想像しないといけないので、思っていたより難しくて大変でした。

被爆体験証言者のコメント

戦後77年、日本は戦争をしていません。その間にはいろいろな事件や事故がありましたが、戦争はなく、食べるものがないということもなく、欲しいものがあれば、とりあえずコンビニやスーパーマーケットに行けば手に入る。このような時代に育った生徒さんが、戦中に生まれ、戦後も物資がない時代を過ごし、被爆による苦しい生活を体験したという話を聞いて、そのような状況をどのように理解して表現できるのか不安がありました。

少ない資料を参考にしながら話を進めていく中で、意見交換はメールや電話、LINEなどを活用しました。コロナ禍の影響もあり、打合せもままならない状況でしたが、美術の先生による指導も相まって、最大限想像力を発揮され、絵の内容が変化して、証言者の思いが絵の中に再現されてきました。

制作お疲れ様でした。ありがとうございました。

爆風で吹き飛ばされて

被爆体験証言者 瀧口 秀隆

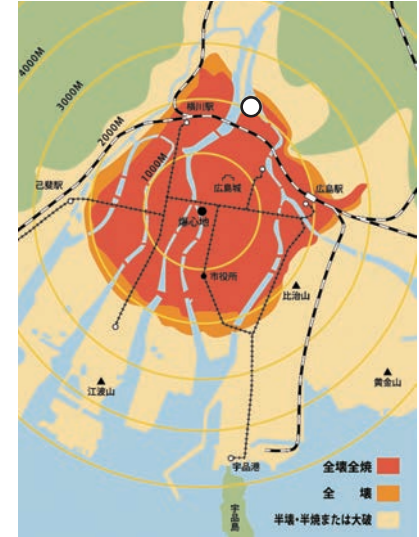
74回生 寺西 栞理

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

玄関の引き戸に手をかけて閉めようとしたその時、強烈な閃光が走り、左腕から指先にかけて、ものすごい痛みと熱さを感じたのですが、間なしに台風並みの爆風が吹き、5歳前の私の小さな体は吹き飛ばされて、台所にあった井戸に体と頭をぶつけて気を失ってしまいました。幸いにも井戸の高さが80cmくらいあったので、倒壊した自宅の材木などの下敷きにならずに済みました。



生徒のコメント

この原爆の絵がより現実味を帯びるよう、たくさんの資料を参考にして描いたり、瀧口さんと何度も打ち合わせを重ねることによって、当時の様子に近い状態を描けたと思います。絵を現実に近づけるための調整作業がとても難しかったです。この場面の要である少年(瀧口さん)の怪我の具合や表情が伝わるように描きました。

打合せの際には、瀧口さんに当時の様子や自身の経験などをたくさんお話していただきました。原爆が投下された時代を生きていない私にとっては、その一つひとつがひどく現在と価値観が異なるものでした。

被爆体験証言者のコメント

77年前に起きた被爆の惨状、そして自身が幼少だったので記憶も定かでない状態もあって、どのような伝え方をすれば平成生まれの生徒さんに理解してもらえるのだろうかと常に頭の隅に置いていたのですが、今回はコロナ禍もあり対面での話ができにくい状況の中、LINEやメール等を使って意見交換しながら、美術指導の先生方の助言もあり、生徒さんなりに想像力を発揮され、証言者の思いが絵の中に再現されてきました。

制作お疲れ様でした。ありがとうございました。

大八車

被爆体験証言者 寺前 妙子

63回生 井上 茉美

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

治療のために収容されていた金輪島から、大八車に乗せられて家へ帰る場面。

生徒のコメント

原爆の絵を制作することで、戦争や原爆がいかに人々を苦しめるのか、いかに悲惨であるかということを感じました。

実際に見たことのない様子を絵にするのはとても難しく苦労しましたが、何度もお話を聞いたり資料を集めたりして、当時の様子に少しでも近づこうと努力しました。

被爆体験証言者のコメント

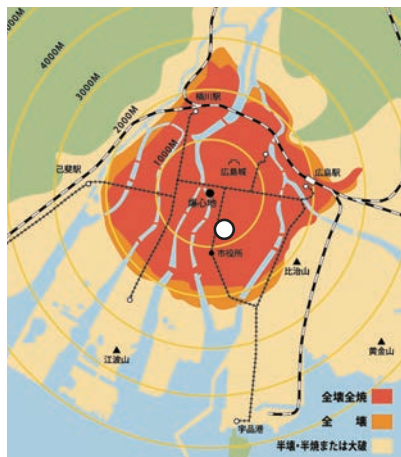
大八車をよく描いていただいたので、現代には通じない車を若い人に知っていただくために助かる絵となり、大変感謝します。

被爆した電話交換手たち

被爆体験証言者 寺前 妙子

62回生 蔵田 成美

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

電話局で電話交換手が被爆した直後で、仕事をしている格好のまま黒焦げになってしまった方や倒れてしまった方もいた。

生徒のコメント

実際に自分が見たわけではなく、しかも証言者の方も実際に見られた場面ではないので、とても難しかったです。

途中、絵が曖昧になったりして大変でしたが、なんとか雰囲気伝えられるように描きました。

被爆体験証言者のコメント

被爆直後の交換台を見ることができませんでしたが、交換手が黒焦げになった痛ましい場面をよく理解して描いて下さったと喜んでおります。

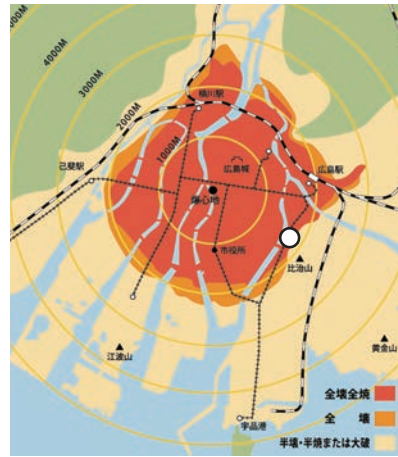


先生の支え

被爆体験証言者 寺前 妙子

62回生 楯田 みゆき

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

電話局で被爆した後、市の北の方へ逃げるため、橋が焼け落ちた京橋川を泳いで渡っているところ。生徒の中でも特に顔にひどい怪我を負っていた寺前さんの方を、担任の先生(画面中央右)が振り返って励ましている。画面は寺前さん自身の見ていた視界として描いているが、当時寺前さんは怪我や疲労のせいで目が見えなくなりかけていたので、視界が狭まっていくことを表現するために、周りを暗くした。

生徒のコメント

最初に絵の構図を決める時、寺前さんの「目が見えなくなっていく様子」を絵でどのように表現するか迷いました。また、担任の先生の写真などの資料が全く残っていなかったので苦労しました。何より、先生がこの瞬間、どのような表情をしていたのかを想像するのが大変でした。そのことも含めて、寺前さんに繰り返し質問させていただいたので、原爆について知らなかったことまで知ることができました。

広島に何が起きたのかということを知りたかったので、原爆の絵を描かせていただいたことはとても貴重な経験になりました。今後もこうした活動を通して、戦争の事実と平和の尊さを未来に伝えていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

私は、だんだんと気を失っていくと同時に眼も見えなくなりました。また、意識も薄れていきました。あの時の様子を忠実に描いていただいて、この絵によって私の記憶が呼び覚まされました。

背負われて逃げる途中で見た瓦礫の下の姿 (記憶から消えず長い間夢に見た)

被爆体験証言者 寺本 貴司

61回生 柴田 紗希

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

逃げる途中、瓦礫の中から首から上だけが出て、目をキョロキョロさせていた女性の様子を描いた。その辺は、すぐに火事になり、この人は生きてそのまま焼け死んだだろうという思いが残っている。

生徒のコメント

資料集めの段階で、被爆直後の広島の様子や怪我をされた人の写真をたくさん見て、改めて戦争の悲惨さを感じた。もし、そのようなことが目の前で起きたらと考えると、今の自分たちの生活のありがたさを思い知った。

被爆体験証言者のコメント

生きてそのまま焼け死ぬ姿を想像する苦しみを与えた。

右上の火の部分は青空だった。未来への希望の青がよかったかとも思ったが、迫りくる火を描き残酷な様を再現してもらった。

ご苦労さん、ありがとう。

私が記憶する惨状を描く事の苦しさを察する。

二度三度と逢うたびに言い表せないことを想像してほしいとお願いしたが、貴方たちが想像もできないことを願い、心に傷を負わせたのではないかと心配をした。

貴方たちだから出来た追体験で、命の尊さ、平和のありがたさをより深く考え学んだことと思う。

ご健勝とますますのご成長を祈念する。

朝一緒に遊んでいた友達の姿

被爆体験証言者 寺本 貴司

60回生 西川 幸

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

朝一緒に遊んでいた友達と避難先の古市のお寺で会った場面を描いた。この友達は、二、三日後に死亡したと聞いた。数分の違いで被爆状況が異なり生命の分かれ道となった。

生徒のコメント

資料集めに一番苦労した。あまりにも資料が少なく、被爆体験証言を聞いて想像したことを描きおこす時に、寺本さんと自分のイメージを近づけていくことに苦労した。

被爆体験証言者のコメント

被爆地から数キロも離れた避難先の光景、今も鮮明に甦る。数分の差で私の姿であったかもしれない当時の状況であり、逞しい想像力で再現してくれた。

ご苦労さん、ありがとう。

私が記憶する惨状を描く事の苦しさを察する。

二度三度と逢うたびに言い表せないことを想像してほしいとお願いしたが、貴方たちが想像もできないことを願い、心に傷を負わせたのではないかと心配をした。

貴方たちだから出来た追体験で、命の尊さ、平和のありがたさをより深く考え学んだことと思う。

ご健勝とますますのご成長を祈念する。

黒い雨の中

被爆体験証言者 寺本 貴司

64回生 大中 もも

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆によって起きた火事から逃れるため、近所のおばさんに連れられて川の向こうまで逃げたところ、黒い雨が降ってきて、おばさんが持って来てくれたトタンで雨をしのいでいる様子。

生徒のコメント

空気感を表現するのに一番苦労しました。また、人物の配置や構図を考えるのがとても難しかったです。

証言者である寺本さんのお話を通して、やはり戦争はどのような状況下であつても許されざるべきものであること、今の自分はたくさんの人の助けのもとに生きていることを再確認しました。

これからは、私たち若い世代が次の世代へ「戦争」というものを語り継いでいかなければ、と強く思いました。

被爆体験証言者のコメント

川土手で休んでいる時、黒い雨が降ってきた。私を背負い、逃げた近所のおばさんは、自分は雨に濡れながら私に簡単な屋根を作って下さった。その時のことを振り返るたびに、私は与えられた命なのだと感じている。おばさんは2ヶ月後に亡くなられた。人間の絆、情の有り難さ、大切さを語り伝えていきたい。この情景を描いていただき、永く伝えられることと思う。

背負われて

被爆体験証言者 寺本 貴司

64回生 児玉 紗世

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、寺本さん(少年)が近所に住んでいた女性に背負われて、爆風によって崩れた橋を渡って向こう岸へ向かっているところ。

生徒のコメント

原爆投下後の風景や、亡くなった方などを実際に見ることはできないので、少ない資料と自分の想像で絵を描かなければならなかったことが大変でした。この絵が証言活動のお役に立てることをうれしく思います。

被爆体験証言者のコメント

子どもの遊び場でもあった美しい川は、一瞬にして橋は崩れ、火に追われて逃げるのに困難であった。崩れ落ち、川に浮かんだ丸太の上を四つん這いで渡った。

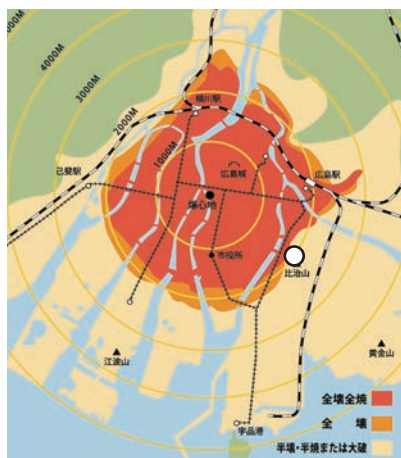
60数年経た今日、想像し難い情景を丁寧に描いていただき、将来にわたり惨状の事実が伝わることと思う。

比治山への道

被爆体験証言者 長尾 ナツミ

60回生 前田 恵理子

平成19(2007)年度制作 水彩画(445×652mm)



描いた場面

被爆した人々が比治山の道を登っていく様子を描いた。中には、途中で声絶えた人も多く、足の踏み場もないほどだった。

生徒のコメント

資料が少ないことで苦労した。図書館などで本を借りても写真自体が少ないせいか同じものばかりで、絵の資料になるものも少なく、見たことがない情景を描くのはとても工夫と神経を必要とした。

この絵の制作に取り組んだことで、ヒロシマの原爆の実態というものにより深く触れることができたと思う。

被爆体験証言者のコメント

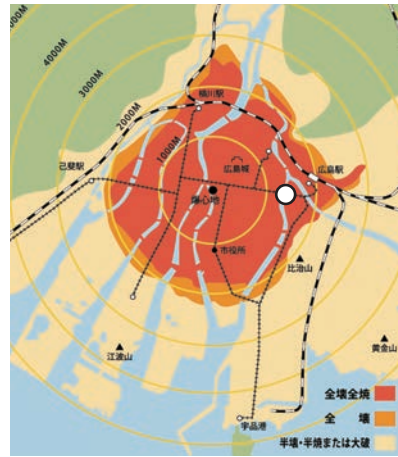
比治山には多くの負傷者が避難してきていて、山道は負傷者で埋めつくされ足の踏み場もなかった。資料もほとんどないなか想像して描くということで、何度も当時の様子を話したり、絵についてアドバイスをした。苦労して描きあげた生徒さんに感謝している。

段原の講堂にて

被爆体験証言者 長尾 ナツミ

61回生 三戸 奈津美

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

小学校の講堂に避難してきた人たちが、ところ狭しと並べられている様子を描いた。

生徒のコメント

見たことのないものを想像して描いていくというのは、やはり難しいものだったが、原爆の絵の制作は、当時の状況についていろいろと調べる機会となった。

また、この絵の制作を通して、証言者の方と直接会い、話をするという貴重な体験をすることができただけでなく、普段はあまり“原爆”というテーマについて話すことがない周りの人の意見なども聞くことができたことも、今回の絵の制作に取り組んだうえで、とても重要であったと思う。

被爆体験証言者のコメント

学校は臨時救護所として多くの被爆者が避難してきた。火傷を負った人やけがをした人など多くの負傷者がところ狭しと並べられていた惨状がとてもよく描けている。見たこともない光景を想像して描くということでもとても苦労したと思うが、私が思い描いていたとおりの絵の仕上がりに満足している。

後に生きる人たちへ

被爆体験証言者 長尾 ナツミ

67回生 一ノ間 照美

平成26(2014)年度制作 油彩画(P20号)



描いた場面

原爆投下後、全身やけどを負った長尾さん本人が彷徨っている様子。

生徒のコメント

体験したこともないような未知の事柄を作品として描き出すことが本当に難しかった。皮膚は極限まで焼かれるとどうなるのか、またどのようにただれるのか。証言者の方と幾度も相談しながら、なるべく事実だけを取り入れて描こうと努力をした。

今までの平和学習で十分原爆について理解していたつもりだったのに、いざ証言者の方と直に話してみると、何一つ分かっていなかったのだと痛感させられた。やはり物事を本当に理解するには「体験者と向き合ってじっくり聞く」ことが大切なのだと思う。

被爆体験証言者のコメント

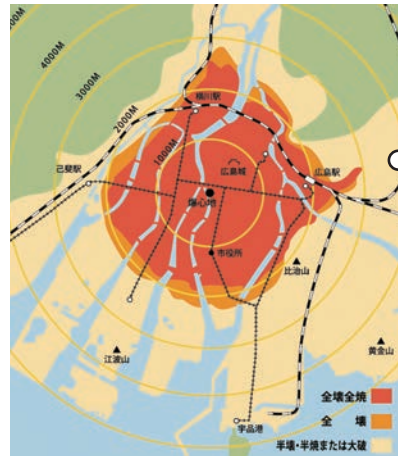
こんなにも悲惨なものを描いてもらうことに、本当に申し訳ない気持ちを覚えました。しかし、描いてもらうからにはより事実に近いものをつくってほしいという思いがありました。戦争を経験したことのない現代の若者に、想像して描けという課題は、あまりに困難なものであったはずですが、何度も何度も訂正してもらい、時には熱が入って語気が強くなってしまったこともありました。しかし一ノ間さんは最後まで頑張り抜き、本当に良いものをつくってくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。この作品が後世に少しでも役立ってくれることを願います。

ヒロシマの最も長い夜 (地獄の炎ときのご雲の残塊)

被爆体験証言者 中西 巖

71回生 河元 愛香

平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時15歳だった中西さんは、向洋の自宅付近の森に避難して一夜を過ごされました。午後8時頃になっても赤い炎に染まった広島市上空では、きのご雲が真っ白に盛り上がり、その中には稲妻が光っていました。夢のような光景でしたが、数万人の方々が亡くなった、痛ましい、長い夜だったのです。

生徒のコメント

遠くから見たヒロシマの絵を描くに当たり、遺体や瓦礫などの直接的な表現ではない中で、どうすれば静かな景色の中に恐ろしさを込められるのかと悩みました。そして、できるだけ炎の中で起きた悲惨な出来事や、きのご雲の下にいた人々について知り、思いを込めて描くようにしました。原爆の絵を描かせていただいて、今を楽しく生きるだけでなく、辛い過去から目を背けず、未来へ伝え続けていくことが平和に繋がるのだと思いました。昔の辛い記憶を伝えて下さった中西さんに心から感謝します。

被爆体験証言者のコメント

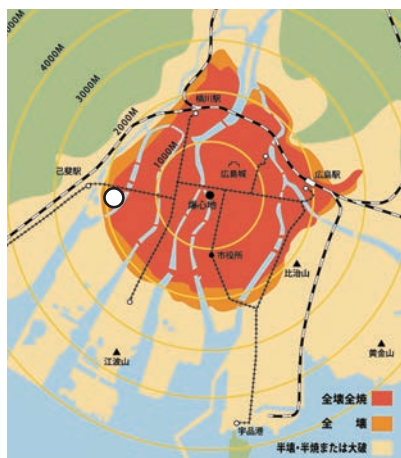
多くの生徒さんが痛ましい場面を直接描いておられる中で、あえて遠景をイメージしていただく、難しいお願いをしたのにも関わらず、自ら現地を視察されるなど、懸命に取り組んでくださる様子に感動いたしました。核兵器廃絶の道が険しい中で、熱心に質問などされる生徒さんの澄んだ瞳は、ヒバクシャにとりまして、希望の星でございます。これからのご活躍を心からお祈りいたします。ありがとうございました。

力尽きた人々

被爆体験証言者 朴 南珠

69回生 杉江 湧愛

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

火の手から逃げた先の福島川の河原で見た、大火傷を負った人々と、救出にきた軍人の様子。

遺体を火葬するため、木などを運んだ。足の踏み場もないほど、多くの人が倒れていた。

生徒のコメント

この度の原爆の絵の制作は昨年に引き続き二回目でしたが、原爆に対する恐怖や制作の難しさは変わらず、むしろ昨年より上回るほどでした。

しかし、朴さんは私に根気よく説明して下さい、こうして完成に至る事ができました。

この絵が少しでも朴さんの証言活動に役立てばと思います。

被爆体験証言者のコメント

50年間、あまりの惨さに、あの日のことを思い出したくなかった。

証言をするようになって、戦争が残酷で、二度と繰り返してはいけないものだと思返しした。

罪の無い人が犠牲になる、そんな原爆をもう使ってはいけない。

瓦礫の中から這い出して

被爆体験証言者 原田 浩

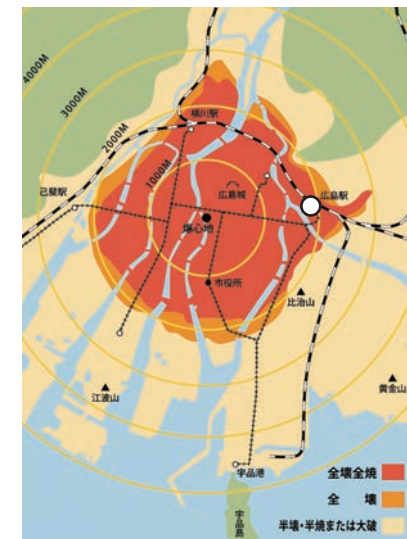
69回生 杉江 湧愛

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆しました。父は閃光を見た瞬間、とっさに私を自分の懐に抱きかかえその場に伏せました。その直後に凄まじい爆風が付近を襲い広島駅舎の屋根や壁面などが父の背中に崩れ落ち、その下敷きになりました。しばらくたって気が付き、瓦礫をかき分けて薄明りのする方角に這い出ることができました。すると、そこに直前まであった周辺の建物はことごとくなくなり、駅や周辺にいた多くの人々も消え失せていました。



生徒のコメント

私は、原爆による被害について、ある程度知識はあったものの、なかなか身近なものとして捉えることができませんでした。しかし、実際に原爆による被害を受けた方からお話を聞いてそれを形にすることで、絶対に、二度と繰り返してはいけないものだという思いを固めることができました。

この作品が、少しでも原田さんの平和活動の助けになればと思っています。
本当にありがとうございました。

被爆体験証言者のコメント

杉江さんは当時の父と私の写真をじっと見つめ、あの日の惨状について何度も質問して当時は再現する絵画の制作に情熱を注いでくれました。ここに描かれている父は、背中に大きな傷を負いながら私を守りぬいてくれた姿をありのままに伝えています。

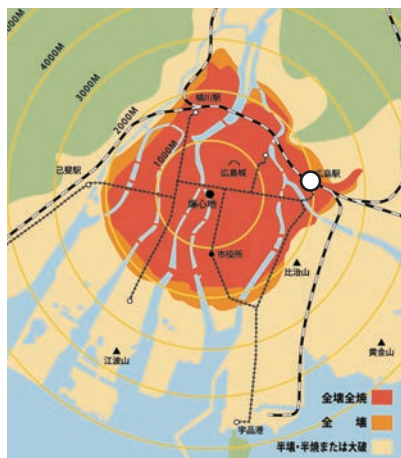
水を、水を…と求めて

被爆体験証言者 原田 浩

美術科教員 橋本 一貫

美術科教員 奥田 悠歩

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2 kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆しました。広島駅構内には被爆し全身を焼かれた市民たちが、水を求めて集まってきました。

制作者のコメント

被爆後、必死の思いで逃げ出して、水を求めて集まってきた人たち。その方たちの必死な思いをどのように表現するかという点で苦労しました。広島駅周辺の惨状と、生きるために必死な人々。ホームで車を待っていた人、広島駅で働いていた人、駅の近くで被爆した人など、それぞれの場面を想像しながら描きました。

被爆体験証言者のコメント

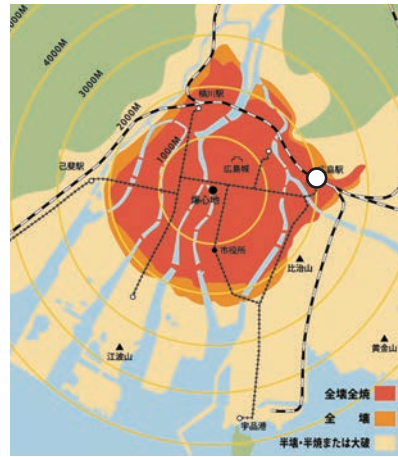
被爆後、市民たちはボロボロになった身体を引きずりながらやっとのことで水のある場所まで逃げ延びてきました。橋本先生は当時の状態をどのように表現するか苦心されたようです。広島駅で車を待っていた人たちや駅構内で働いていた職員などが被爆により何が起こったのかわからないまま、無残な最期を迎えようとする姿をしっかりと描いてくださいました。

炎上する車両を切り離す職員たち

被爆体験証言者 原田 浩

美術科教員 橋本 一貫

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2 kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆しました。広島駅の引き込み線に駐留していた車両が次々と炎上していました。付近には消火栓もなく他の車両への延焼を食い止めようと、駅職員たちが引き離し作業を始めました。

制作者のコメント

被爆直後に、人の救援ではなく鉄道車両の延焼を防ぐための行動を取るといふ、一見不自然な場面ではありますが、被災後に交通網が速やかに復旧することは、広い意味での救援に当たるといふことと、非常に重要なことであると感じました。

いずれにしても、子どもたちや全ての人たちがこのような思いをすることがないように、小さなことで少しずつ継続的に活動をしていきたいと思えます。

被爆体験証言者のコメント

橋本先生と何度も打ち合わせをする中で惨状を受け止め、このような絵画を完成させてくださいました。

悲惨な体験であるからこそ、次世代に残す使命感を持ち続けてこられていることを感じました。

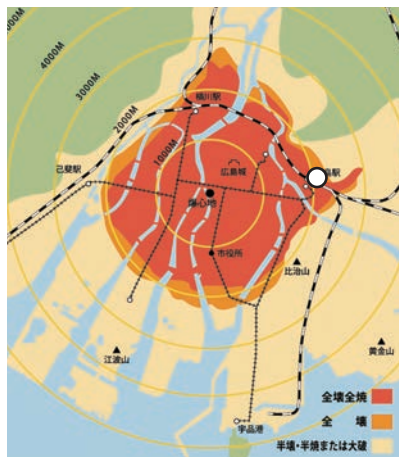
なお、橋本先生において、私が体験した場面を描いてくださるとは思っていませんでした。ここに改めてお礼を申し上げます。

死体を踏み分けながら逃げる

被爆体験証言者 原田 浩

66回生 土井 紀子

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2 kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆しました。この絵画は迫ってくる炎から必死で逃れる場面を描いていますが、あたりは薄暗く遠くまで見わたすことができませんでした。

私は広島駅舎の北側にいたため、強烈な爆風や熱線は堅固な駅舎に遮られ体に大きな被害を受けずに済みまし。周りは全身にひどい傷を受けた人たちで一杯でしたが、比較的傷の軽かった私は恨めしい目で見られ、いたたまれない気持ちでした。

付近には倒れたまま身動きしない人も多数いましたが、メラメラと迫ってくる炎から逃れるためにこのような人々の体の上を逃げていくことになったのです。苦しむ多くの人々を目の当たりにしながら、誰も救うことのできなかつたことを思うと無念さで一杯です。

制作者のコメント

見たことのない場面や様子を絵にするという作業は非常に難しく、大変なことだと実感しました。特に、“全身に火傷を負った状態”を表現するのは難しかったです。また、その場の雰囲気をもどのように表現しようかと悩みました。経験や体験がないことを自分なりに想像し、なるべく事実に近づけようと努力しました。

被爆体験証言者のコメント

長い間、自分自身の心の中に閉じ込めてきた悲惨な体験の数々…。これを絵画として残すことはとてもつらく、避けてきました。被爆後70数年を経た今になって、このような体験を次世代に残すことに意義があると感じるようになりました。

大学生である土井さんが私の体験をつぶさに聞き取り、この絵画を完成させてくれたことに感謝しています。

生死不明の人たちを踏み分けながら逃げる

被爆体験証言者 原田 浩

70回生 山土 莉奈

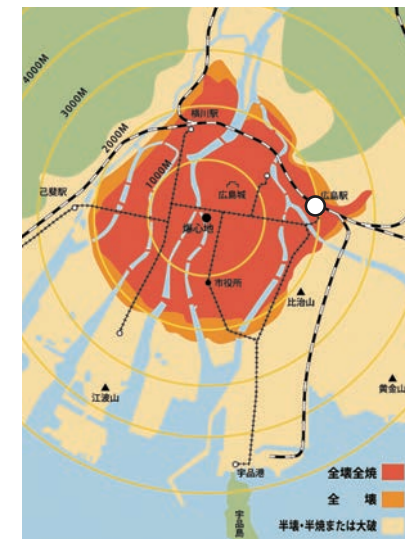
平成29(2017)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2 kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親と共に被爆しました。

この絵は、迫ってくる炎から逃れる場面を描いています。瓦礫をかき分けて這い出すと、周囲は薄暗く、遠くの方まで見ることはできませんでした。しかし、周りにあった建物はことごとく消え失せ、人の気配も感じられませんでした。付近にじっと目を凝らすと、建物の下敷きになったり、全身に酷い傷を負い転がったまま身動きしない人たちが大勢いました。父や私たちは、メラメラと舐めるように追いかけてくる炎から逃れるために、このような転がったままの体を踏み分けながら逃げるしかありませんでした。生死の境をさまよう数え切れない人々を目の当たりにしながら、誰も救うことのできなかったことを思うと、今も無念さで一杯です。



生徒のコメント

今回、原田さんの証言をもとに絵を制作させていただき、一対一でお話を伺って形にしていく度に、原爆の恐ろしさ、当時の目を背けたくなる光景を考えさせられ怖くなりました。今まで描いたことのない悲惨な光景を描くのはとても難しかったです。想像できなかつたり、資料を見つけても怖くて見られなかつたり、大変だったけれど、平和について改めて考えることができ、この活動に参加することができて本当に良かったです。二度と同じ過ちが起ることがないように、この絵が原爆の恐ろしさを伝えていってくれると嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

長い間、自分自身の心の中に閉じ込めてきた数々の悲惨な体験。それらを一つひとつ思い出して絵に残すことは、大変つらく避けてきました。しかし、未だに何も語ろうとしない被爆者が多くいますが、自らの体験を次世代に伝えることこそ核兵器の廃絶に向けて意義あることと思ひ、この場面を加えることにしました。

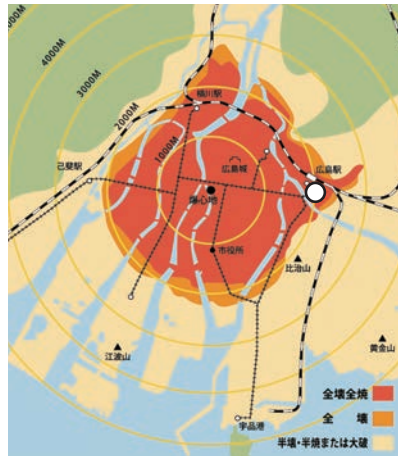
山土莉奈さんが私の体験をつぶさに聞き取り、この絵画を完成させてくれたことに感謝し、次世代への体験継承に役立つことを願うものです。

最も大切なものを

被爆体験証言者 原田 浩

71回生 富士原 芽依

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

爆心地から2kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆しました。

駅舎の陰にいたので原爆の直撃から免れ、さらに背後から襲ってきた火焰からも奇跡的に逃れることができました。

あの日、幼い私を疎開させるため、父母は見たこともない桃を持たせてくれました。

避難の途中、皮膚が熔けるなどひどい被害を受けて道端にうずくまる親子連れから水がほしいと懇願されました。私が手に持った桃を目敏く見つけた母親が子どもたちに与えて欲しいとせがみました。

しかし、日頃、食べられなかった大切な桃を手放すことはできませんでした。

生徒のコメント

原田さんは被爆された当時6歳で、そんな幼い子どもが目を背けなくなるような恐ろしくショッキングな出来事を体験したのかと思うと、この1年間の制作を通して何度も辛く悲しい気持ちになりました。道端にうずくまる親子も、後ろを彷徨う大怪我をした人にも、原田さん自身にもそれぞれ当たり前の幸せな日常があり、それを一瞬で奪ってしまうような戦争が再び起こらないように祈りを込めて描きました。この絵が戦争や平和について考えるきっかけのひとつになるといいなと思います。

被爆体験証言者のコメント

私の心深くに刻まれ、決して忘れることのできない場面です。

幼いとはいえ、自分自身の事しか考えない行動が悔やまれ、今まで語ることのできなかつた辛い思いです。

富士原さんは私が手放したくないと、身を引いた瞬間を的確に描いてくれています。

高校生たちが被爆者の悲惨極まりない体験をしっかり受け止め、描き残してあげることが、次世代へ核兵器廃絶を訴えるものとなるでしょう。

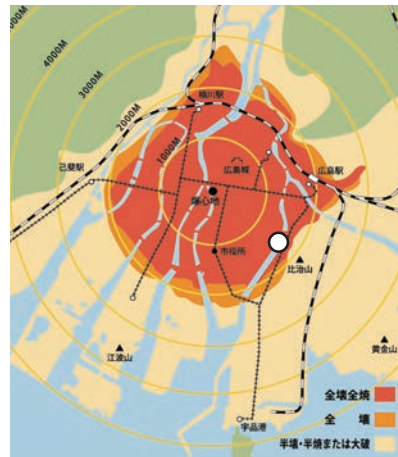


ショックと怒りと悲しみと

被爆体験証言者 松原 美代子

60回生 東郷 佑紀

平成19(2007)年度制作 アクリル(F15号)



描いた場面

鶴見町で建物疎開中に被爆し、その直後意識が回復して立ち上がった姿を描いた。

生徒のコメント

自分が実際に目にしたことのない風景を想像して描くことにとっても苦労した。原爆を体験した人と詳しく話し合い、一つの絵を作り上げるという貴重な体験をすることができ、とても勉強になった。これからこの原爆の絵を使って証言活動をされる中で、自分の絵が松原さんの証言の内容とうまく重なり合い、聞き手に深く伝わればとてもうれしく思う。

被爆体験証言者のコメント

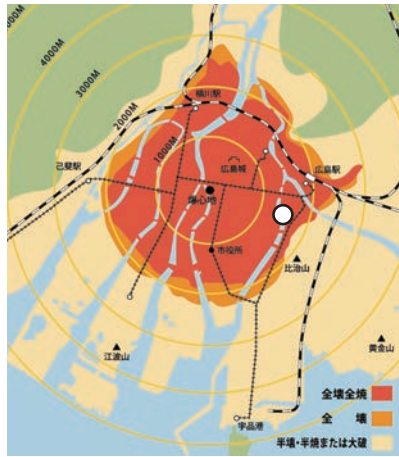
廃墟の中から立ち上がって全身を見たとき、服はぼろぼろ、皮膚は火傷でふくれ上がり、中でも右手のひどさがよく表現されている。悲しみにひたる間もなく、かけ出した私の新しい長い人生のはじまり。人々が関心を持って聞きいる最も大切な一場面である。色々考えて、顔の表現の難しさに私は結局描けなかったが、よくまとまっていると心から感謝している。

変わり果てた友人

被爆体験証言者 松原 美代子

60回生 松原 未羽

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

川の中で友人と再会した場面を描いた。顔が分からないくらい焼けただれていて、松原さんに「私の顔、どうなっている。」と泣きながら聞いている。

生徒のコメント

私は原爆のことを知っていても、資料館で知ることができるような外面的な部分だった。今回、証言者の松原さんから被爆体験を直接聞き、描く場面について話を聞いていると、原爆を知らない自分が描くことができるのかと不安になった。

絵の制作にあたって、自分で資料などを見て、焼けただれた皮膚や髪はこのように感じだと思って描いたものを松原さんに見てもらおうと「ここはもっとひどく焼けていた」と言われ、思った以上の悲惨さであったことに驚いた。松原さんの証言活動で、自分の絵によって原爆の悲惨さや苦しみが少しでも伝わるといいなと思う。

被爆体験証言者のコメント

この絵を見ていると、私が被爆直後、多くの変わり果てた被爆者との出会いが思い出される。そのなかで、彼女の顔の変りかたが大変ひどかった。私は、驚きと悲しみ、怒りがこみ上げてきた。

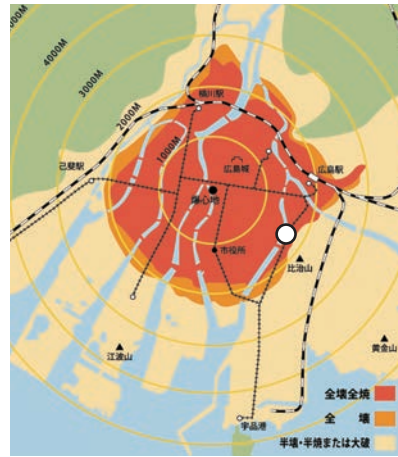
絵には、私の表情が描かれていないが、何かリアルで人々の心に強く訴えるものがある。証言中、この場面が一番ほしかったのに、私には描けなかった。優れた作品が出来たと心から感謝している。

そこにある命

被爆体験証言者 松本 都美子

61回生 榎 砂千可

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆当日、川を流れてくる人々を橋から眺めている光景。
橋の上の人々は山に向かって避難している。

生徒のコメント

実際には見たことのない、川を流れている人の姿やケロイドの状態を想像して描くことは難しく、何度も行き詰ってしまいました。
多くの人を絵の中に描き足していく毎に、原爆がもたらした被害の大きさに衝撃を受けました。
被爆者の方が毎年亡くなっていく中、こうしたボランティアに参加した私も、一緒に平和活動をしていかなければならないと思いました。

被爆体験証言者のコメント

溺れながら流される人々数知れず、橋を渡るお化けのように傷つき、死におびえながらのろのろと歩く人々のその姿は、一生、私の脳裏から離れえぬものとなる。

小学校の体育館でうじ虫を取ってもらっている

被爆体験証言者 松本 都美子

70回生 島田 菜々花

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

松本さんが被爆後、安芸郡府中町の小学校に収容され、傷口にわいたうじ虫を取ってもらっている場面。

生徒のコメント

制作をはじめた時は、もっと資料があるだろうと思っていましたが、資料館や写真を探してもこれというものがありませんでした。また、松本さんがご病気になられ、思うように打ち合わせができず、途中で確認していただくことができなかったので、今でも松本さんの見られた通りの光景が描けているかは分かりません。

今回、原爆の絵の制作に参加して、今まで知らなかった話を聞いたり、時代背景や、戦争だけではない、当時の人々の暮らしについてもお聞きすることができて良かったです。この原爆の絵は、私が平和について真剣に考えるきっかけになった作品なので、この絵を見る方にも平和について考えていただければと思います。

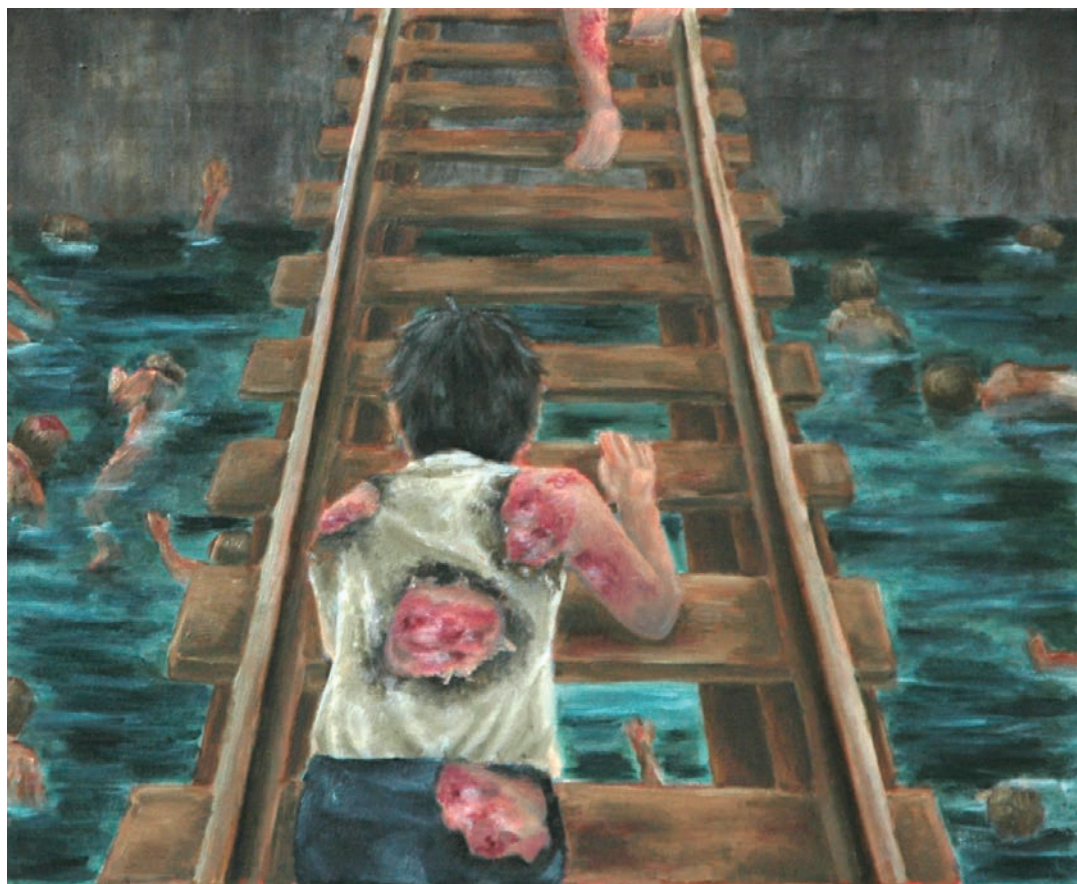
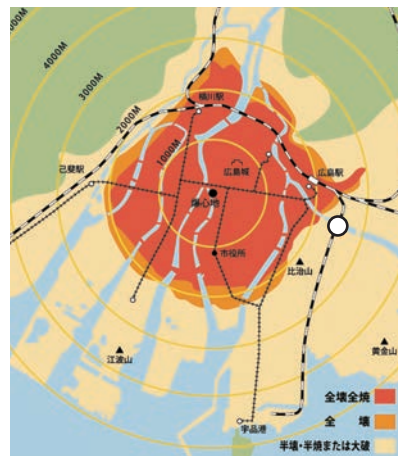


橋渡る時

被爆体験証言者 森田 節子

65回生 嶋田 さくら

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

東照宮にある救護テントの所へ向かう場面。川の上に架かった線路を橋代わりに渡っている。川には生きていた人や亡くなった人たちがたくさん流されていた。

生徒のコメント

実際に見たことのないものを描くことが難しかったです。できるだけ被爆者の方が覚えていらっしゃるままに描くよう努力しました。

今回、原爆の絵を描くことで、少し平和について考えることができました。この絵を見てくださった方が、平和について考えるきっかけになればと思います。

被爆体験証言者のコメント

救助を求めて学校に帰ろうとしましたが、学校へ向かうためには猿候川にかかっていた軍用列車の宇品線の鉄橋を渡るしかありませんでした。鉄橋を渡る時は、川には死体らしきものが流れていました。

被爆した女学生達

被爆体験証言者 森田 節子

64回生 西家 奈津

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下され、辺りがまだ薄暗い中で、自分の怪我には気が付かず、近くにいた怪我のひどい友人を起き上がらせようと右手を引っ張ると、その人の右手の皮膚を取ってしまった、という場面。



生徒のコメント

打ち合わせの時に、森田さんがその友人の方に対して今でも申し訳ない気持ちでいることを何度も口にされていたことがとても印象的でした。この悲惨な体験が忘れ去られることがないよう、私の描いた絵が後世へと語り継いでくれると嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

芋畑で失神し、数分後に気がついた時、周りは夕暮れのような景色に変わっていました。その中で見た同級生の姿は亡霊のように変わっていました。近くで立ち上がる友達の様子だけをしっかりと目に焼き付けております。

東照宮にて

被爆体験証言者 森田 節子

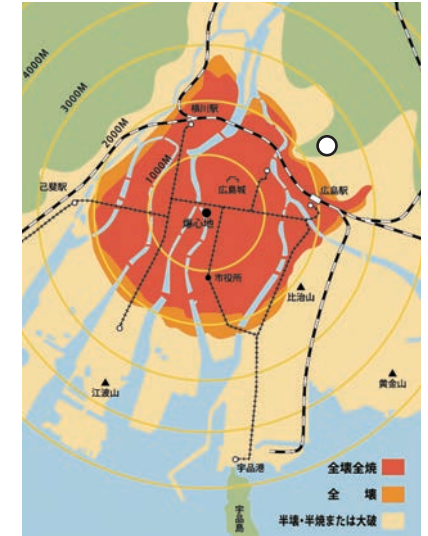
65回生 前原 詩乃

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

助けを求めて東照宮から学校へ向かう場面。お互いに水筒の水をかけ合い、励まし合って進んだ。東照宮の階段を下りていくと、救護所ができていて、市内から逃れてきた人々が集まってきていた。



生徒のコメント

証言者の方のお話をもとに、少しずつ制作を進めていきました。実際に見たことのないものを描くのは大変でしたが、当時の森田さんが感じた不安や痛みを表現することに気がつけました。今回の制作を通して、平和について考えるだけでなく「伝える」お手伝いのできたのではないかと思います。

被爆体験証言者のコメント

神社に避難した後、助けを求めて階段を下りると、沢山の火傷を負った被爆者の人々がこのようにその階段を登ってきました。この人達は駅の近くから逃げてきたのでしょうか。

火葬場と化した校庭

被爆体験証言者 八幡 照子

73回生 岡部 美遥

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

己斐国民学校(現在の己斐小学校)の校庭でたくさんの遺体を火葬している場面。二人一組で担架を使って校庭に掘った溝に遺体を放り込んでいる。真夏の熱気と燃え盛る炎に陽炎が立ち上り、黙々と作業する人々の姿が揺れている。吹き上げる煙、異臭が立ち込めている。



生徒のコメント

証言者である八幡さんのお話や文章だけでその光景を思い浮かべ、描きおこすことが一番苦労しました。

男女の判別すらつかないほどのひどい死体を見たことはもちろんなく、吹き上がる炎や煙も見たこともない状態で、できる限り八幡さんの記憶に正確な絵になるように試行錯誤を重ねました。この原爆の絵の制作を通して、平和であることのありがたさを知りました。八幡さんから聞く話も、当時の資料にある事実も、すべて想像を絶するものでした。私は今まで戦争や原爆の投下は遠い昔のことであり、ただ歴史の一部のように感じていましたが、原爆の絵の制作に携わることでこの出来事は現実に起きたことだと改めて実感しました。広島に生まれたものとして、これからもこのことを忘れずに次の世代へと伝えていきたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

私自身の記憶にも、溝(実際には七筋の穴)に遺体を放り込んでいたのが手前で、向こうの筋が燃え盛っていたのか、手前の筋が燃え盛っていたのかはつきりなくて、それを描くのはどんなにか大変だったことでしょう。ごめんなさいね。熱風に吹かれながら余りの衝撃で何の感情も起こらなかったのを覚えています。

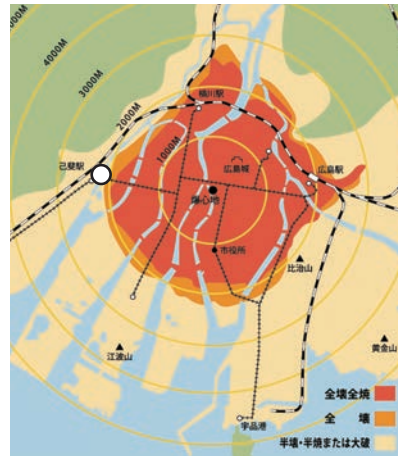
約2000人と記録されている火葬された人たち。あなたの絵から凄惨さや悲しみが呼び覚まされて泣きました。ありがとうございました。

みんなで死のう、みんな一緒よ!!

被爆体験証言者 八幡 照子

73回生 武原 明歩

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

己斐本町の自宅にて被爆。「みんなここに集まりなさい!」爆風に飛ばされ意識朦朧の中、母の叫び声を聞いた。家の中はひっくり返り、もうもうとした土煙。ただならぬものを感じた母親は、サッと大きな掛け布団を家族の上に広げながら「みんなで死のう、みんな一緒よ!」と悲壮な声できっぱりと言った。(第二、第三の大型爆弾が来たらとても助からないと思ったのだ。) 布団の中で肩を寄せ合ったあの時の家族のあたたかさ、子供心に感じた家族の絆を今も忘れない。

生徒のコメント

八幡さんは「この情景、母の言葉を一番に思い出す。」とおっしゃっていました。お話を伺う中で「みんなで死のう、みんな一緒よ」という言葉は私の心にもとても強く残りました。次々に爆弾が落ちてくるかもしれないという恐怖の中、家族を必死に集めたお母様のお気持ちを想像すると言葉では言い表せないほど苦しくなります。お母様の悲しみ、恐怖、覚悟や必死さが表現できるように、精いっぱい描かせていただきました。そして八幡さんが感じた、家族の絆、温かさを感じられるようにすることを常に意識しました。想像して描いていくことはとても難しかったですが、細部まで想像することで、より八幡さんの記憶を理解できるように感じました。八幡さんをはじめ、多くの方々の記憶を私たちが後世に必死に伝えていきたいと思います。そしてこれからも「原爆の絵」をより多くの方々に観ていただきたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

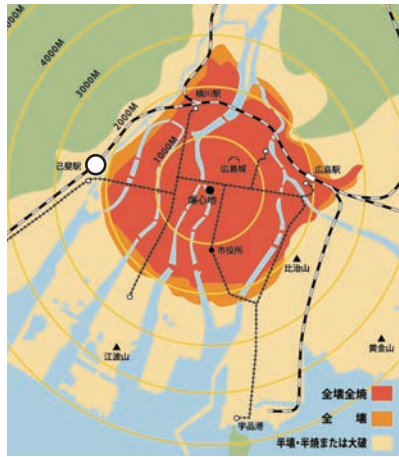
爆風で半壊になった家の中の状況を何度も熱心に質問してくださり、一生懸命に描いてくださいました。「みんなで死のう、みんな一緒よ!」と言った母の表情については説明が二転三転してごめんなさい。あの優しかった母のどこにこんな強さがあったのかと思ったような悲壮感を描いてくださって、ありがとうございました。ずっしりとふんわりとした綿の布団(羊毛や羽毛布団ではない)の質感の説明不足で始めはかくれんぼのようになりましたが、完成した作品を観て当時のひっ迫感が思い出されて泣きました。ありがとうございました。

正面から迫る負傷者たち

被爆体験証言者 八幡 照子

73回生 長沖 純

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

避難した山手で大雨(黒い雨)に遭い、父親が河原に布団を運んでくれていた己斐橋のもとに、家族と引き返した。

市内から己斐橋を渡ってどんどん避難してくる負傷者に逆行しながら必死に歩いた。髪は逆立ち、服は剥ぎ取られ、焼けただれた体を引きずって、への字に曲げた両腕の指先にはめくれた皮膚がボロ雑巾のように垂れ下がっていた。

まるで幽霊のような行列が正面から迫ってきた。

生徒のコメント

実際に見たことのない光景を描くのはとても難しかったです。その負傷者がどの方向から熱線を浴びたのかによって、服の破れ方や怪我の箇所が変わってくるので、当時の負傷者の写真や原爆の絵本に載っている姿を参考にしました。

また傷の深刻さや服の破れ方、歩き方が様々な人を描くので、友人たちに色々な姿勢をとってもらい撮影し、その写真を資料にしながら規則的な絵にならないように試行錯誤を繰り返しました。

原爆の絵を描く上で、色々な資料を見なければならず、中には目を当て難いものもありました。しかしそういった資料に目を向けることで、原爆についての理解や考えが深まりました。

被爆体験証言者のコメント

服は焼け焦げ、剥ぎ取られ、むき出した体は大火傷を負い、めくれ、汚れた皮膚が指先に垂れて下がって…と言葉で表現するものを描くのはどんなにか難しかったです。かろうじて服を着ている人は逃げってくる姿も異なっているし全体的に「わあーっ」と幽霊の行列が迫ってくるような印象をよく描いてくださいました。

大混乱の中、逃げよう!生きよう!と殺気立ったざわめきをどう伝えたらいいのか難しかったです。

熱心に質問してくださり、描き直して下さってありがとうございました。

むしろ

筵に巻かれた子どもの遺体を担ぐ男性

被爆体験証言者 八幡 照子

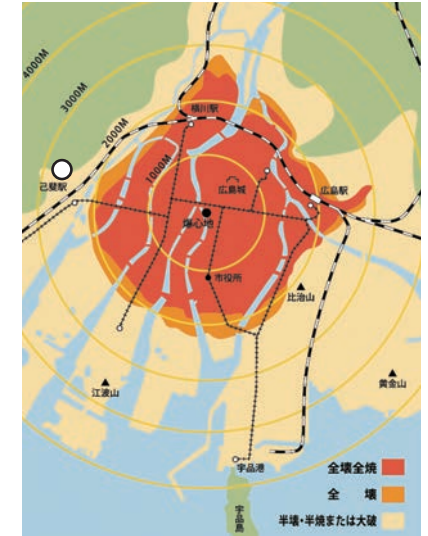
72回生 福田 葉月

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月7日または8日の夕方、己斐の紅葉谷に架かる小さな橋の上で、当時8歳であった八幡さんは近所の男の子と一緒に遊んでいた。筵に巻いたものを担いで通る男性が来たので、避けて立っていた。通り過ぎた男性の後ろ姿を何気なく見上げた時、筵の間から紫色になった6～7歳の子供の足が覗いていた。隣にいた男の子から「あれは山に(遺体を)焼きに行くんよ」と聞き、衝撃を受けた。



生徒のコメント

遺体を担いでいる男性と筵に巻かれた遺体は、具体的な証言から描くことができても、周りの風景や、人の服装、色味など、はっきりとはわからないものを描くことがとても難しかったです。証言者の八幡さんに描き進めた絵を見ていただくことで、さらに思い出され場面の詳細を話して下さったこともありました。八幡さんと直接話し合っって絵を作り上げていくことで、よりリアリティのあるものに仕上げられるのだと思いました。資料や当時の写真はもちろん、八幡さんの証言がないと当時の情景を忠実に絵におこせないのだと実感しました。この活動を通して原爆のことについて改めて考えることができ、知ることができたので、私から次世代へこのような惨劇があったことを伝えていけたら良いと思います。

被爆体験証言者のコメント

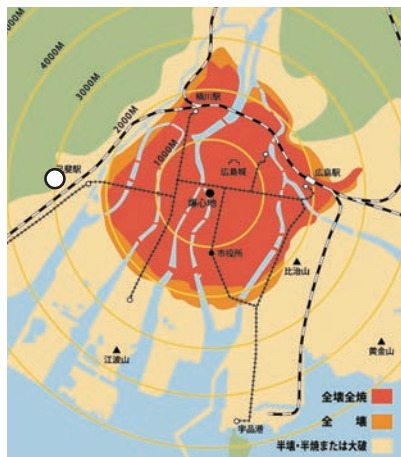
筵に巻かれていたものの中から覗いていた子どもの足は強烈な印象で、背景やそのほかは私にとって慣れ親しんだ場面でした。ところが世代の違い、環境の違いなどがあって言葉だけで描いていただくことは、とても大変なことが分かりました。筵の説明、橋の大きさ、色、材質、古さ、辺りの景色、男性や男の子は丸刈りで、ズボンは今風の細身ではなく、女の子の髪は後頭部を短く刈り上げ…とても熱心に質問していただき、驚きと悲しみの場面に仕上げてくださいありがとうございました。周りの風景は、夏の生い茂った木々など当時の情景を再現して描いてくださって感激しました。

負傷者であふれる教室

被爆体験証言者 八幡 照子

72回生 森永 琴音

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月9日、八幡さんの額の傷の治療のため、父親に連れられ己斐国民学校の救護所に行った。通り慣れた校門を入ると、悲鳴ともうめき声ともつかない騒めきで、ごった返していた。父親が受付の長い行列に並んでくれている間、教室に行ってみた。

木造の教室には、大火傷を負った人たちがぎっしり横たわったり、座り込んだりしていた。みんな顔が火膨れで目が開いていなかった。

生徒のコメント

木造の教室も、大火傷を負った人も見たことがなかったので資料をもとにしながら、頭の中で描いていくのが難しかったです。人について「もっとたくさん人がいた」「もっと真っ赤だった」というご指摘を何度もいただき、自分が思っている以上に凄惨な状況だったのだと思い知らされました。

原爆の絵を描くことで、今まではどこか昔話のように感じていた原爆を実際に起きたことなのだという実感を持ってより深く考えることができました。

被爆体験証言者のコメント

森永さんの素描の時点で、大勢の人の姿が蘇ってきました。人形ではなく、そこには傷ついた人の身体がそれぞれリアルに描かれていて、さすがだと思いました。

火傷で赤く爛れた人、顔が火膨れで目が開いていない、焼かれた服の胸に白い名札が見える(残っている)人と、記憶のままに伝えてもそれを表現するのは大変だったでしょう。熱心にしっかり受け止めてくださってありがとうございました。

父の友人の変わり果てた姿

被爆体験証言者 八幡 照子

74回生 大原 萌里

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原子爆弾が投下された7日後の8月13日。私が家族と避難していた親戚の家の仏壇の前に安置された、父の親友の髑髏(しゃれこうべ)です。

市街地の火気や地面の熱気がおさまった8月9日から毎日、父と母は親友の奥さんと共に、炎天下、シャベルを担いで黒焦げの死体を跨ぎ、壊れた水道管から溢れる水を飲みながら捜し回りました。辿り着いた親友の職場で見つけた焼死体の腰の辺りに焦げた印鑑ケースが見つかり、親友と判明しました。



生徒のコメント

最初は、原爆の絵の活動を通して貴重な経験ができたらいいなという思いや、原爆が投下されてから何十年も時が経っているので、今の自分たちができることをしないと原爆のことを伝えるのは段々難しくなってしまうのではないかと思います、制作を始めました。

証言者さんにお話を伺いながら制作していくうちに、小学生の時から平和学習をしてきたけれど、原爆について知らないことがたくさんあって、自分は原爆について絵を描いて伝える立場でありながらも、学ばせていただくことが多くありました。

これからこの絵が、次の世代に、また原爆が投下されてどんなことが起こったのかをまだ知らない人たちが、罪のない命が奪われることの悲惨さについて考えるきっかけになれば嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

市街地の焼け跡で奇跡的に見つかった遺体の頭蓋骨。悲しみと共に「見つかって良かった!」という思いで迎え、皆で拝みました。

絵に描いて下さる方にはとても酷かなと途中で迷いましたが、見事に描き上げて下さいました。あの優しくったおじさん(父の友人)の変わり果てた姿からは、無言のうちに迫り来るものを感じます。永遠に残るでしょう。ありがとうございました。

不気味な閃光

被爆体験証言者 八幡 照子

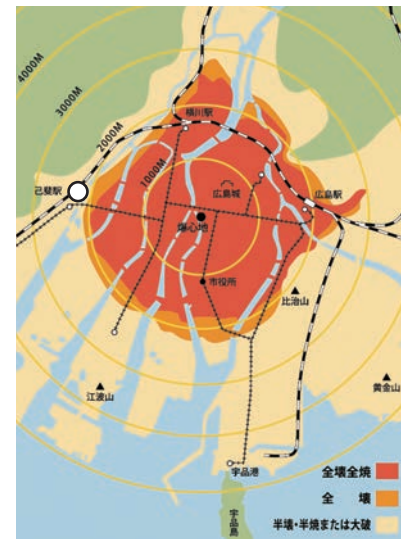
75回生 香川 凧

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日午前8時15分。広島市己斐本町の自宅の裏庭。私が隣の家に行くために裏庭に下り立った時です。突如、空に青白い閃光が走りました。それは「ピカーツ!」ではなく、音にしたら「ビャツ!」といった不気味な光。一瞬、空一面が巨大な蛍光灯になったようでした。咄嗟に指で目と鼻、耳を塞ぎ、地面に伏せようとして意識を失いました。



生徒のコメント

空全体が真っ白になるほどの強い光を経験したことがないので、それを表現するのがとても難しかったです。

また、戦争や原爆を経験したことのない世代に原爆のことを伝えていくために、私たちが描いた絵が少しでも役に立ってほしいと感じました。

被爆体験証言者のコメント

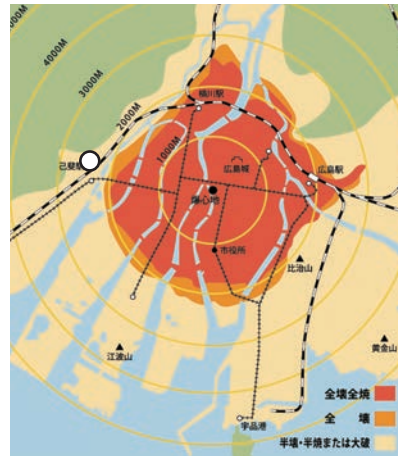
完成された絵を見て、あの閃光の一瞬が甦ってきてぞっとしました。本当に「ビャツ!」といった不気味さをよく表して下さいました。あの後、すさまじい爆風が吹き抜けたようです。廊下のガラス戸の透明感や陰影も表現してくださって、崩れ去る前の我が家の姿がいとおい。心から感謝いたします。

お骨が入った紙袋

被爆体験証言者 八幡 照子

74回生 川畠 芽衣

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月9日、避難所となっていた己斐国民学校の校門の近くに机が出され、白い葉書大の紙袋が並べられていました。学校の救護所に怪我の治療に来ていた私は、食べるものも無くお腹がペコペコでした。「お菓子配ってる!」と思って飛んで行きましたが、行ってみてがっかりしました。袋の中身は骨だったのです。校庭で焼かれた遺骨を、家族を捜しに来た肉親がせめてもの供養にと持ち帰っていたことを後になって聞きました。

生徒のコメント

過去の原爆の絵で、炎や火傷が描かれたものは見たことがありますが、遺骨が配られている絵は見たことがなく、写真も見つけることができなかったため、当時の様子を想像するのに苦労しました。また、絵を見ただけでは紙袋に骨が入っているとは分からないので、捜しに来た肉親の仕草や表情を描き直して悲しみを表現しようと思いました。

被爆体験証言者のコメント

食べるものもなくお腹がペコペコだった私。飛んで行ってみて袋の中身が骨だったのでがっかりした私。そんな私の話から、捜しに来た肉親の悲しみ、引き渡す人の戸惑いと共感の溢れた後ろ姿を描いてくださいました。描いて下さった方の感性、絵の力のすばらしさに感動しました。

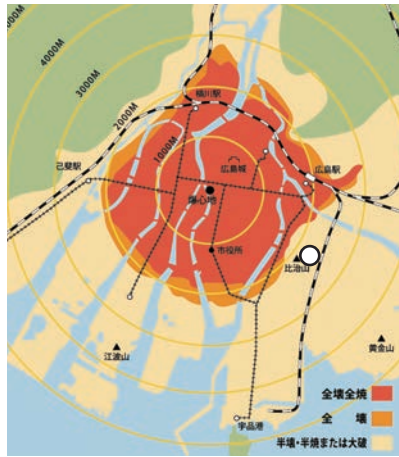


三輪トラックで運ばれる負傷者

被爆体験証言者 山瀬 潤子

74回生 川畠 芽衣

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

家の前のバス通りを、屋根のない三輪トラックが荷台に負傷者を乗せて広島駅方面に向かっていている場面です。荷台には血と埃にまみれた負傷者が積み、息絶えているのか分からない人も見受けられました。トラックが路上の障害物を乗り越える度、荷台の負傷者も一緒にバウンドしていました。右下でその様子を見ているのが私です。

生徒のコメント

トラックが路上の瓦礫を踏む度に荷台の負傷者も一緒にバウンドしていたという話が印象的だったので、動きを表現することのできない絵の中で、その状況を表現するのが難しかったです。トラックが簡単には通れないほどの量の瓦礫を道に描き、実際に自分たちがポーズをとって撮影した写真を見ながら、人々が力なく横たわり、あるいは座っている様子を描くことでそれを表そうとしました。

自分が経験していないことを描いてみることで、当時の状況は、お話を聞いて想像したものよりももっと悲惨で恐ろしかったということが、山瀬さんからの指摘を受ける中で分かってきて、絵が伝える力の強さを実感しました。

被爆体験証言者のコメント

私の不確かな指示で迷われた部分が多く、描くのが難しかったのではないかと反省しています。川畠さんは、最初、三輪トラックの時代考証のため、交通博物館に足を運び、写真を撮ってきてくださり、原爆の絵に取り組まれる真摯な態度に感銘を受けました。

コロナ禍のため後半はメールを使ったオンラインで、絵を見ながら電話で打合せを進めました。ずいぶん難しかったことでしょう。説明が難しかったです。迷惑をかけました。本当にありがとうございました。

負傷者が行列になって比治山からゆっくりと降りてくる

被爆体験証言者 山瀬 潤子

74回生 神谷 陽香

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

負傷者が比治山から降りてくる行列を麓(ふもと)から見た状況です。左側は雑木林、右側は絶壁の山道で、2～3人が横になって通れるくらいの舗装されていない山道でした。危険な坂道を、肩を寄せ合ったり、膝や尻を地につけて座ったままで降りてくる人、棒切れを支えにして降りてくる人、皆、髪を振り乱し、血と埃にまみれ、破れた服をまとい、ゆっくり、ゆっくり、ぞろり、ぞろりと降りてくる状況でした。



生徒のコメント

最初は証言者の山瀬さんの記憶と私が思っていた状況のイメージが上手く噛み合わなくて、とても苦労しました。絵にするために、描いてある人たちと同じポーズをして写真を撮り、どのような人たちがどんな風に負傷したのかをより理解できるようにしました。また原爆資料館に行き、当時の写真を見ましたが、やはり原子爆弾が落ちた日の細かな状況が分かる写真は非常に少なく、想像するだけでは足りないと感じ、代々先輩方が描いてこられた作品や、映画を参考にして、山瀬さんの記憶に近くなるように努力しました。戦争に対する恐さや痛みをこの絵で表現できていたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

私の最初の状況説明が上手くできていなくて、見たこともない場面を想像して描かれるのは大変難しかったことでしょう。クラスメイトに協力を依頼されて、学校の階段で、山道の坂と負傷者の状況を再現されました。「山道の東側はどちらですか?」「何時頃でしたか?」という神谷さんの電話の向こうでの質問に、光と影を重要視されていることに気づき、大変さが伝わりました。残念ながら私の記憶はあいまいで、2、3回山道を降りてくる負傷者を見ましたが、時間ははっきりしません。山道を、色々写真を撮ってきて見せて下さり、苦労が分かります。コロナ禍で、後半はオンラインでの打合せでしたが、変更を簡単に出したりして申し訳なく思っています。ご苦労様でした。ありがとうございました。

東練兵場から見た巨大な火炎

被爆体験証言者 山本 定男

69回生 石田 菜々子

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

広島県立広島第二中学校2年生二百数十人は、8月6日朝、東練兵場で芋畑の草取り作業をするために集合していた時に被爆し、強烈な熱風でみんな吹き飛ばされた。山本少年は割と早く気づき立ち上がって見ると、広島駅の方に、巨大なピンク色に輝く火炎がもの凄い勢いで湧き上がっていた。爆心地から約2.5kmの場所。



生徒のコメント

この活動をするまでは、頭のどこかで「原爆は遠い昔の出来事」と考えていました。しかし、山本さんと何度も打ち合わせをして、資料を集めに原爆資料館などに行っていると、「遠い昔の出来事」ではなく、「最近の出来事で、身近にあるもの」だと考えるようになりました。

この活動の中で私の原爆に対する考えが変わったように、この絵が誰かの原爆についての考えや意識が変わる“きっかけ”になって欲しいです。そして、一度でも良いので自分の手で原爆について調べてみて欲しいです。

被爆体験証言者のコメント

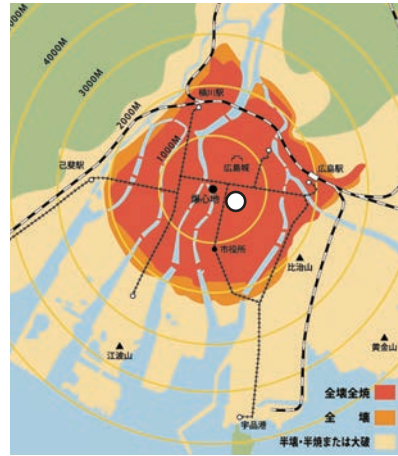
現在では想像出来ないような場面を描いて頂いたので、ご苦労が多かったと思います。お陰で巨大な火炎が見事に再現されました。これで私の証言も実感をもって話すことが出来ます。本当にありがとうございました。

翌日、本通り商店街の叔母の家を訪ねる

被爆体験証言者 山本 定男

68回生 信藤 真衣

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

山本少年の叔母の家は、本通りで金物店を営んでいた。被爆の翌日、母から叔母の家の様子を見てくるように言われて、本通りの叔母の家あたりに行った。するとあたり一面、未だ残り火が盛ん燃えており、何処に叔母の家があったのかも分からず、道端ではしゃがんでドクロになった人が燃えている有様だった。爆心地から400m位の場所。

生徒のコメント

私の描いた場面は馴染みの深い本通り商店街ですが、当時の荒んだ様子は今では全く見当のつかないものでした。燃えて真っ黒になった木や道の端に座る格好で白骨化した人間など、今までに見たことのない情景を描くのは予想以上に難しく、さらにそれらを限られた資料と証言者さんの記憶だけをたよりに描かなければならないので大変でした。

絵を描き進めていくうちに、原爆の恐ろしさ、悲惨さを強く感じ、この絵の風景は現実で絶対に見たくないものとなりました。

この絵が証言活動を通して一人でも多くの方に平和について考えるきっかけになることを願います。

被爆体験証言者のコメント

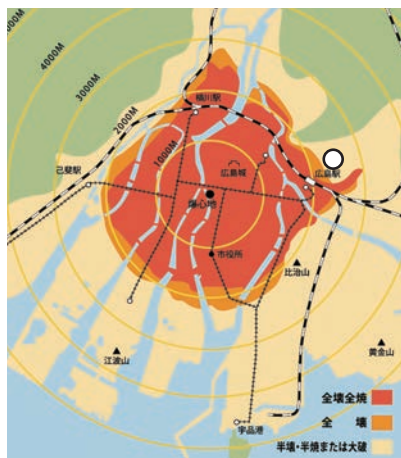
何せ70年も前のこと、私も細かいところまでは覚えていませんでしたが、貴女は本通りの現地を視察して場面を想像したり、私の服装、靴、表情など、細かく書いて頂きました。立派に仕上がり感謝の気持ちで一杯です。有り難うございました。

東練兵場に設けられた救護テントで目にした若い娘さん

被爆体験証言者 山本 定男

75回生 伊藤 早利

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下から2、3日後、東練兵場には救護テントがたくさん張られ、多くの被爆者が収容されていた。そのテントの一つで、背中の上から下まで大火傷を負った若い女性が裸のまま立って、看護婦さんに「亜鉛華」という白い薬を塗ってもらっている場面。

生徒のコメント

証言があったとしても、見た事のないものを描くのはとても難しく、証言者さんの頭の中のイメージ通りに作品を仕上げる事にとても苦労しました。私の描いた原爆の絵を見て、同じ高校生の人たちやその他多くの方たちが、戦争が自分と関わりのあるものと感じてくれたら良いと思います。

被爆体験証言者のコメント

伊藤さん、初めは背景の沢山の救護テントがあることも描いて欲しいなどと惑わせてしまいました。それに「右手がない」「刷毛がない」など細かい注文にも懸命に取り組んで頂き立派に仕上がりました。本当に有り難うございました。私の被爆後の東練兵場の様子を伝える貴重な原爆の絵です。この原爆の絵が多くの人に戦争の残酷さと平和の尊さを伝える大きな力となってくれることを願っております。

東練兵場近くの道端で亡くなっている兵隊さん

被爆体験証言者 山本 定男

75回生 日高 乃愛

令和3(2021)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆2、3日後、東練兵場の西側の水路の側の道端で、体がゴム風船のように膨らんで亡くなった兵隊さんが並べられていた。その兵隊さんたちは上半身が焼かれてパンパンに膨れていたが手足はそれほど膨れておらず、軍服のズボンとゲートルは焼けて破れてはいなかった。その様子を、当時中学2年生であった山本さんが、近くの草むらから眺めている。

生徒のコメント

山本さんのお話から、その光景を想像して絵にすることに特に苦労しました。見る人たちに山本さんの伝えたい光景が具体的に分かりやすく伝わるように、先生に助言をいただきながら制作しました。資料が少なく、兵隊さんの様子が想像しにくくて、何回も修正したり描き直したりしました。兵隊さんの体がゴム風船のように膨らんでいる様子や、死体の酷さが伝わるように頑張りました。この絵を通して見た人たちが、「平和」、この当たり前の日常をより大切にしたい世代へつなげていこうという思いを持ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

日高さん、「もっと体を膨らませて」とか「道端に寄せて」とか、細かい注文に、その都度描き直して頂き申し訳ないことをしました。でも本当によく頑張って頂き立派に仕上がりました。有り難うございました。私の被爆後の東練兵場の様子を伝える貴重な原爆の絵です。この原爆の絵が多くの人に戦争の残酷さと平和の尊さを伝える大きな力となってくれることを願っております。

逃げてきた被爆した親子

被爆体験証言者 山本 玲子

69回生 杵村 奈美

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原子爆弾が投下されて人々が逃げていく中、山本さんの家の庭に被爆した親子が走ってきました。お母さんは髪が乱れて必死な様子で、5歳くらいの女の子がそのお母さんのモンペの裾をしっかりと掴んでいました。お母さんは赤ちゃんを抱きかかえていましたが、顔は紫色で、赤ちゃんは既に死んでいたようです。

生徒のコメント

今回原爆の絵を描くにあたって、被爆者の方々のお話を聞いていると悲しい、暗い気持ちになることが何度もありました。

それは、これから私たちが生きていく中で、同じようなことが起こらないとは限らなくて、被爆体験を語るができる方が少なくなっている中で、再び争いが起きてしまうのではないか、という気持ちがあったからだと思います。

特にその「気持ち」の面で苦労して、とても過去の話、人ごとの話としては聞けなかったので、毎日考えるのは辛かったです。

被爆体験証言者のコメント

1945年頃の服装を熱心に聞いて描いて下さってよく描けていると思います。今の服装と違って大変だったと思います。私の話をよく聞いて下さってありがとうございました。

爆心地から4.1 kmの校庭から見た火の玉

被爆体験証言者 山本 玲子

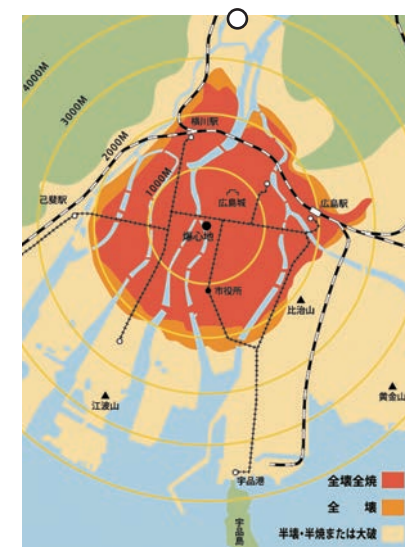
69回生 堰楽 由理

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日のよく晴れた朝の学校の校庭、青い空で朝日に輝く飛行機が飛んでいた。当時小学1年生だった山本さんが飛行機を見ていたその瞬間、ピカッと光り、太陽が落ちたかのように思われた。垣根の向こう側に連なる家々の屋根の上に両手を広げても抱えきれないほどの火の玉がゆれ動いていた。



生徒のコメント

今回、原爆の絵の制作にあたり、証言者さんのお話を聞く中で、私の想像を超えるようなことばかりで、驚くと共に、何度も悲しい気持ちになりました。そして全て現実に起きていたと考えると、戦争の悲惨さをあらためて痛感しました。子どもたちの顔の表情を描く時には、気持ちを考えながら描くように心がけ、当時の子どもたちの気持ちが伝わって来るような気がしました。

被爆体験証言者のコメント

校庭で逃げまどう児童の姿がよく描けていると思います。私の話をよく聞いて熱心に描いて下さりありがとうございました。

ひどい火傷を負ったおじさん

被爆体験証言者 山本 玲子

68回生 山野 一真

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下時、小学1年生だった山本さんが自宅の縁側にいると、下着姿のおじさんが布団を1枚かついで庭に入ってきて、縁側に倒れ込んできた。おじさんはひどい火傷で、肩から垂れ下がった火傷をした皮膚が、焼けた服のように見えた。

そのおじさんは次の日の昼過ぎに救護所で亡くなった。

生徒のコメント

私は初め、後に残るような活動をしたいと思い原爆の絵の制作に参加したので、日々制作が進むにつれ、周りの友達や後輩との動機の違いに申し訳なさを感じていました。山本さんは自分の体験をしっかりと分かりやすい文章でまとめておられて、本当に自分の絵が必要なのかとも思いました。しかし、他の人の制作する絵を見てその考えは変わりました。どの絵も証言者さんの話を聞いたり文章を読んだだけでは想像もつかないもので、当時の様子がよく分かり、証言者さんの話を絵に描きおこすことの重要性がよくわかりました。今は自分の制作を大切なものだと感じています。

被爆体験証言者のコメント

火傷の絵、上手に生々しく描いてあると思います。

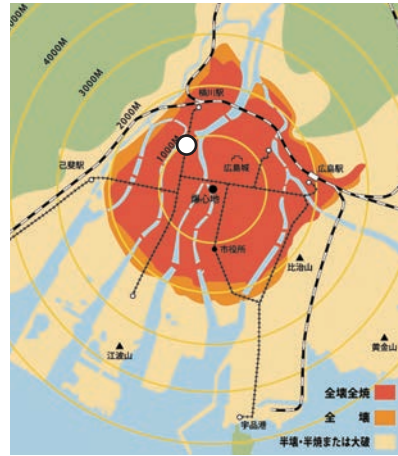
私の話を熱心に聞いて下さりありがとうございました。2人の後輩にもやさしく頭が下がりました。ありがとうございました。

赤黒く焼けた死体

被爆体験証言者 若山 登美子

73回生 栞原 太一

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原子爆弾の熱線の影響で重度の火傷を負い、全身が赤黒く膨れ、横たわるようにして亡くなっている場面です。若山さんは、広島に原爆が投下された8月6日の3日後、8月9日の午前7時頃、寺町付近でこの光景を目撃されました。

生徒のコメント

僕が原爆の絵を描くにあたって実感したのは、記憶を具現化することの難しさです。証言者さんが体験されたことを想像だけで描いていくのは思っていた以上に難しく、ヒントとなる資料を探すことにもとても苦労しました。また今回の原爆の絵の取り組みでは、新型コロナウイルスの影響により、若山さんと直接会って打合せをすることが難しく、思い通りに進めることができませんでした。ですが、原爆の絵の制作に参加させていただいたことはとても有り難く、また多くのことを学ぶことができ、貴重な体験となりました。

被爆体験証言者のコメント

私の心の底にしまっている悲惨な思いを絵に描いていただき、ありがとうございました。大好きだった父を亡くした悲しみ、その後76年経ちますが、私の成長に従い悲しみも大きくなる感じでした。でも今は、「私の悲しみを解って下さった人がある」と思い、ほっとしています。

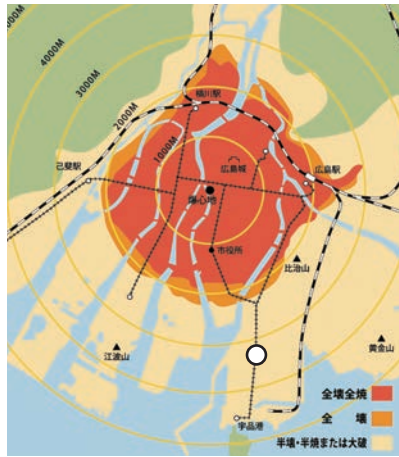
この度、不思議にすらすらと語れたのは、栞原太一君の素直で優しい心に私の心が開き、話ことができました。栞原太一君、ありがとうございました。感謝いたします。

陸軍共済病院前の風景

被爆体験証言者 渡邊 美代子

62回生 秋元 はづき

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

現在の県立広島病院前の道にむしろを敷いて、原爆で火傷を負った人々を寝かせている様子。渡邊さんは今でも、その様子を風景だけでなく、においも覚えているそうです。

生徒のコメント

制作段階で、今まで詳しくは知らなかった原爆の投下された時代背景を知る機会がありました。今までは「原爆は怖い」「戦争はいけない」と、客観的で消極的な考え方しかできなかったのですが、その時代背景と原爆の投下とを重ね合わせてみて、平和で明るい未来を見つめることが大切だという見方になりました。

原爆の絵の制作に関わらせていただいたことで、平和というものを少しでも知ることができました。さらに、それを世界に発信していくのは私たちがなのだと改めて実感しました。

被爆体験証言者のコメント

丹那へ避難する時、陸軍共済病院の前の道路にむしろが敷かれ、背中を焼かれた人はうつ伏せに、前を焼かれた人は仰向けに、姿勢を変えることも出来ない状態の人も寝かされていた。数えきれない火傷の人を見て、どうしてこんなことになったのかわからないでいた。

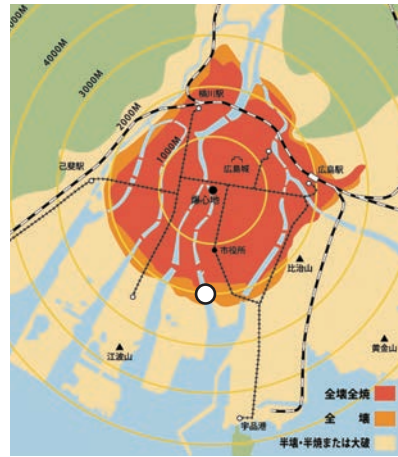


閃光

被爆体験証言者 渡邊 美代子

62回生 粟谷 果苗

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

渡邊さんのお父さんが建物疎開作業に出て、土手で建物を取り壊している時に被爆した瞬間。

生徒のコメント

自分が直接体験したことはないのですが、渡邊さんから聞いた話をもとにして、想像して描いていきました。

原爆が爆発した瞬間の写真はないので、自分で撮影した写真などを参考にしながら、光や影、色なども想像しながら描いたことが一番大変でした。

被爆体験証言者のコメント

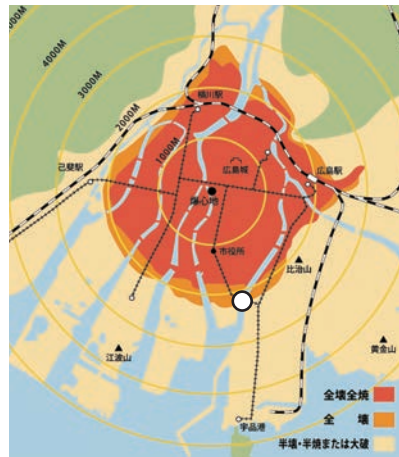
元安川の土手下で建物疎開作業をしていた父が、大火傷をして帰って来て、びっくりした。父の後ろで作業をしていた女性は、ちょうど父の陰に隠れる状態だったので火傷を免れた。

御幸橋

被爆体験証言者 渡邊 美代子

62回生 徳永 美帆

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後間もなくの御幸橋の様子。
被爆した人々が橋を渡って対岸へ逃げている。

生徒のコメント

原爆投下後の情景の悲惨さをどう表現しようか迷いました。渡邊さんの話をできる限り表現しようと描いたつもりでしたが、原爆を経験していない私には、表現に限界があると感じました。
これを機に、さらに原爆について深く知りたいと思いました。

被爆体験証言者のコメント

鷹野橋方面から、数えきれないほどの大勢の火傷や負傷した人が、手を幽霊のように前に垂らしてヨタヨタと歩いてきた。

